
とある使い魔の日常

夜刀鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある使い魔の日常

【Nコード】

N6180I

【作者名】

夜刀鴉

【あらすじ】

トラブルメーカーな幼馴染や天然セクハラ体質な妹に囲まれながらも、日々幸せに暮らしていた東間美晴。

だが、そんな彼が突然使い魔として異世界に召喚されてしまう。

しかも、召喚されたときに性別まで入れ替わってしまっ……そんな不幸な彼の日常を描く作品。

ほのぼのやコメディ中心で、シリアスは控えめです。また、主人公は使い魔ですが、チート設定ですので注意してください。また、若干名変態が出現します。

ストーリーが学園物へと進みました。ついでに紳士が登場します。
ここで一般的な紳士を思い浮かべた方は、キーワードを良くご覧の
上で再考することをお勧めします。

展開が展開なのでGL追加。この辺りって難しいと思います

ブログ（前書き）

変態出現注意。

一応GLではないはずですが、若干それっぽいような表現はあります。

ブローグ

「いよっしゃああああっ!!」

目を開けてみれば、そこは見たことのない世界だった。
床にはチョークのようなもので描かれた魔方陣と乱雑に置かれた本。周りを見渡せば背丈ほどの本棚や巨大な鍋まである。
はつきり言おう。俺はこの光景に見覚えなどない。

「ついに！念願の！使い魔を手に入れたぞ!!」

……ましてや、今目の前に居るガッツポーズをとりながら叫ぶ女なんぞ、もつてのほかだ。

つか言ってることの意味が分からん。何かを手に入れて喜んでるのは分かるが、正直俺にとってはどうでもいい。

今俺が一番知りたいのは、ここがどこでどうやってここに拉致られたのか、だ。

「し、しかも……」

目の前の不審者に警戒していると、不意にソレと視線が交わった。

……何かよだれ出てるぞ。オイ。

「こんな、こんなに可愛い……ぐふふ」

……アレか、これはいわゆる変態という奴か。それも紳士でない方の。

「うふ、うふうふ、うふふふ……。子猫ちゃん、怖がらなくて良いのよ?」

両手をわきわきとさせながら、こちらににじり寄ってくるソレ。はつきり言って、怖い要素しかないんだが?

身の危険を感じ、思わず身構えて後ずさる。俺の全身を風がかすかにくすぐる。

……待て、全身?

嫌な予感がして視線を下に向ける。その光景に、2秒程思考が止まった。

「っ!!!!!??」

あわてて体を丸め、胸と股間を隠す。頬が急速に冷め、ついで火照りだす。

っつかなんて俺は裸なんだ!?

「ぶはっ」

突然目の前のソレがのけぞり、鼻血を噴き出した。

って何かさつきよりも近いっ!!アレか、思考を止めてる間に近づいてきたのかっ!?

「も、もう我慢できないわ……」

鼻血をだらだらとたらしながら、ゆっくりと顔をこちらに向けてくる。きらきらとした目が俺に焦点を合わせる。

下手なホラーよりも怖い光景に、俺は後ろに飛びのいた。だが、

背中に何かがぶつかる衝撃とともに動きが止まる。

「さあ、私にその声を聞かせてっ！私の手で鳴き声をあげるのよっ！！」

そんなわけの分らないことを叫び、感極まった表情で飛び掛ってくる。

そのあまりに酷い光景に、俺は息をすくませる。そしてソレが目前まで迫り、

「鼻血を撒き散らしながら迫って来んじゃねえっ！！この変態があっ！！！」

そのあまりの恐怖に、思わず後ろ回し蹴りを側頭部に叩き込んでしまった。

プロローグ（後書き）

ひとまずプロローグ。

次はこの事態に陥る直前の物語です。

第1話 始まりは夢の中（前書き）

超展開注意。

R15 注意。 ひょっとしたら、この程度だとR15にはならないかもしれませんが。

第1話 始まりは夢の中

「ねえハルちゃん。何でハルちゃんって、女の子じゃないんだろうね？」

「いきなり何言ってたデメエは。寝言は寝てから言え。後、俺は男なんだからちゃん付けするな」

昼飯もほとんどの奴が食い終わり、だらけた雰囲気を見せる教室。中には予習をしたりする真面目な奴も居るが、大抵は仲のいい奴とくつつちゃべったり、寝たりする時間である。

「だってさ、ハルちゃんって下手な女の子よりよっぽど可愛いじゃん」

そんな憩いの時間なのにもかかわらず、俺はうんざりとさせられていた。

原因は目の前に居る幼馴染。俺はこいつを、学園一のトラブルメーカーだと思っている。

「アホか。後ちゃん付けするなと言ってるだろ」

「えゝ？ボクはアホじゃないよ。大体、ちゃんと証拠だってあるんだし」

その能天気な声に、俺は軽くため息を付く。こいつが関わってきたことで、ろくな目にあつたためしなど無いのだ。

「だってハルちゃんってば、『学園内女装コンテストNo.1』、
『彼氏にしたい女の子No.1』、
『彼女にしたい女の子No.1』」

の三冠王じゃん」

「がああああっ！それを口に出すなっ！それは俺の黒歴史なんだっ……！」

トラウマを刺激され、思わず頭を抱えながら叫ぶ。

「まったまたあ。女装コンテストに出るくらいなんだし、ハルちゃんだってまんざらでも無いじゃん」

「待てっ！それはお前が無理やり出させたんだろっ！俺はそんなの、出るつもりは無かったんだよっ……！」

女装コンテストが開かれるというのは確かに事前に聞いていた。というか、目の前のこいつに聞かされていた。

それから毎日「出るんだよね？」とかしつこく付きまとってきたが、俺はそのすべてを黙殺して終わるはずだった。そう、普通はソレで終わるはずなのだが……。

何をトチ狂ったか、こいつは俺の妹と共謀して、コンテストの当日に俺を睡眠薬入りのジュースで眠らせて来やがったのだ。

そして、眠りこけた俺の服を着せ替え、ご丁寧にも後ろ手に縛り上げた上でコンテストの控え室に放り込みやがったのである。

それでも開催直前に目が覚めて、何とか抵抗して逃げようとしたのだが……いや、止めよう。アレは二度と思い出したくない。

「あれ？そうだったけ？でも、大好評だったじゃん。息も絶え絶えで耳まで真っ赤に上気し……」

「それ以上言うんじゃないやねええええええっ……！！」

人のトラウマをえぐり返す馬鹿を全力で止める。周りの視線が集まってくるが、そんなの気には居られない。

……つか、なんで俺は未だにこいつの幼馴染をやってるんだ？正

直不思議でならん。

俺の名前は東間美晴。女みたいな名前だとよく言われるが、間違
いなく男だ。

……が、忌々しいことに俺の顔は非常に女性っぽいらしい。もつ
とも、主に俺の幼馴染が言ってることなので信用はしていない。
というか、成績も運動神経も中の中という平凡極まりない俺が、
たとえ女装であつてもコンテストで一位を取るとかありえんだろ。

そして今俺の前に居るのが、幼馴染の手塩最中。一応女子なんだ
が、間違いなく前に『腐』という文字が付いていると思う。

俺をからかうためなら、あらゆる努力を惜しまない。という迷惑
極まりないことを公言し、実行している文字通りのトラブルメーカ
！。

自称をボクという割には女の子らしい女の子で、今まででもそれ
なりに告白とかされてきたらしい。……その全員を振った挙句、俺
に対して告白するようけしかけるあたり、悪魔的と思えない。
いや、あつさり乗ってマジで告白してくる野郎共もおかしいが。

恐らく、先ほどこいつがあげた黒歴史の全ても、こいつの工作の
結果なのだろう。それでもなければ、俺が1位になる理由が無い。

……そもそも彼氏にしたい『女の子』だの、彼女にしたい『女の
子』だの……俺は男だっつーの。まず前提として、票が入ること自
体がおかしいわ。

なお、1つアンケートそのものがキワモノだが、そこに対する突
っ込みはもうしない。いちいちそんなことに突っ込みを入れてたら、
こっちの身が持たん。

「ふっふ」。来月には『抱いてみたい女の子』の投票結果もでるし、
今から楽しみ♪」

「おい、間違えた。おい、何をテメエはそんな、公序良俗に反する
アンケートなんて取ってやがるんだ？」

「だいじょぶだいじょぶ。ハルちゃんが今回も一位になるのは、
規定事項だからね♪」

「やっぱテメエが票操作してんだろっ！じゃなきゃおかしいんだよ
！！絶対に！！」

怒鳴り声を上げる俺に、またかといわんばかりの視線が集まる。
とどのつまり、俺は毎日このようなことを繰り返しているのだ。

「ただいま」

ようやく家に到着した俺は、脱いだ靴を綺麗に揃えて玄関へとあ
がる。返事が無いあたり、お父さんもお母さんもまだ帰ってきてな
いようだ。

そのまま自室に入り、かばんを置いてベッドに倒れこむ。ぼふっ
とやわらかい感触が顔を包み込んだ。

「ふあ……」

そのまま暫く、顔を掛け布団に押し付ける。普段からストレスの多い俺の生活においては、こういう至福の一時は必須なのだ。

幼馴染という名のストレスから離れ、掛け布団のやわらかさに溺れる。その包まれるような心地よい感覚に、俺はうっとりとして目を細める。

……だが、俺は忘れていた。

「んっふっふ……」

「！？……しまっ」

この家には、妹というもう一人の問題児が居たということ。

「つつかまゝえたっ！ハルちゃん」

「ひゃうっ！？なっちよっ！？やめっ！！」

突然後ろから抱きつかれ、思わず声を上げる。両脇に強烈なくすぐったさを感じて脇を締めるが……。

「んっふふふ、無駄だよ無駄だよ無駄なのだよハルちゃん！このほなみんなに捕まったが最後、ハルちゃんに逃げるすべなど、ありようはずが無いのだ！！」

「ひゃっ！？ほ、ほんとに止める穂波っ！！くすぐっ！！う……あ
あ……」

「みゅふふ、ハルちゃんってばかわゆいのだ。さあ、このほなみんな

が天国までつれてつて差し上げるのだ。はむっ」
「マジで止めっ……！？み、耳を噛むなあっ！！」

穂波の手によって、あっさりと翻弄されてしまう俺。俺は昔から、この手のくすぐりには弱いのだ。

「あっ……はあっ！！やめっ！？ひゃあん！！」

「ちゅっみゅふっ、ハルちゃんってば女の子みたいでかわいっ」

「ほんとっ……おこ……るぞっ！っひゃあうっ！」

「んふっ何？怒っちゃうの？怒っちゃうの？怒ったハルちゃんもかわゆいから、大歓迎なのだ」

結局、俺は穂波の手で翻弄され続け、ようやく穂波の手から離れたところには力も入らず、ぐったりとしてしまっていた。

「んっふふっ、ハルちゃんってば……耳まで真っ赤に上気させて目も潤ませて、息も絶え絶えって感じで。ほんと反則的にかわゆいだ」

くそう……い、いつか仕返しを……してやるから……な……。

俺の日常は、そんな幼馴染や妹……そして家族やクラスメート達との、騒がしくも楽しい……た、楽しい？日常だった。

幼馴染も妹も、俺の意見や意思を無視するうざったさ満載な奴らだったが、どこか憎めないような奴だった。

間違いなく、俺は幸せな生活を送っていたのだと思う。……多分、いや、貞操的な何かを無視すれば、うん。

そしていつも通り、家族に対しておやすみなさいと告げ、ベッドにもぐりこむ。心地よい掛け布団に包まれて、もっとも幸せな一時に思わず頬が緩む。

そして、ゆっくりと意識を落としていく。夢の中に意識をもぐりこませていく。

そんな普段通りの感覚に、突然妙な違和感が紛れ込んだ。

まるで何かに掬い上げられるような感覚。いつもの眠るときの感覚とは違うそれに、俺はあわてて焦点をあわせる。

(?……こ、これは??)

眼前に広がるのは夜の街。普段見慣れた、住み慣れた街。だが、今まで見た光景の、どの光景ともある一点が違う。それは、

(そら?空からの光景か?これ。……ひょっとして、俺は今浮いてるのか?)

これは、航空写真とでも言うべきなのだろうか?

俺は、自分の住みなれた街を空から眺めていた。真下には俺の家

の屋根が見えるから、間違いは無いはずだ。

このような夢など、俺は見たことが無い。そもそも、いつもはもぐる感覚なのに、今は浮き上がっていくような感覚がする。

そしてそれは間違いではなかった。ゆっくりと、目に見えて街の景色が遠ざかっていく。俺の家が、どんどん小さくなっていく。

ふいに、思った。

ひょっとしたら、このまま俺は戻ってこれないのではないかと……

そう思った瞬間、俺の視界は白く包まれ、その中で俺は意識を失った。

第1話 始まりは夢の中（後書き）

以上が、主人公の日常と異世界へと渡るきっかけです。

たとえ超展開だと言われようが上等。そもそも、異世界に渡るのに納得できる理由なんて提示できるかっ！と開き直りました。

正直R15ってどのあたりから？とか思わなくも無かったのですが、念のためにR15。もっと激しい絡み合いを期待した方には申し訳ありませんが、今後もしそういうシーンがあっても大体これくらいの予定です。

次回はプロローグの直後で、変態さんを蹴り倒した後の主人公の行動を綴ります。

第2話 召喚されし者

「ど、どうなってんだ？こりゃ……」

いきなり襲ってきた変態女を蹴り飛ばし、昏倒させた俺は、ひとまず『何故か』そいつが持っていたロープでそいつを縛り上げて、一息を付いていた。

そして改めて自分の姿を確認し、愕然とする。

全体的に青白く、とてもじゃないが健康的とはいえない肌の色。細く、小さく、頼りなくなってしまう腕と足。

そして、僅かにふくらんでいるのが見える胸。何より……。

「……冗談だろ？」

そこに、男としてあるべきものが無くなっていた。

とりあえず、いつまでも裸のまま居るわけにもいかないため、俺は部屋に掛けられていたマントを羽織ることにした。

……これはあくまで、裸で居るのが恥ずかしいからなのであって、決して自分の裸を見るのが恥ずかしい、というわけでは無い。……いや、妹の裸を事故で見たことはあるのだが、それとはまた別な感じで、見ていて恥ずかしいとかそういうなんていうかその、ああもうっ！

変な方向に走り出した思考を、頭を振って何とか振り払う。深呼吸をして、ゆっくりと自分の気持ちを落ち着かせた。

「ひとまず、やらなきゃいけない事は……」

昏倒したまま、縛られた変態女へと視線を移す。正直あの様子を見て、なおも関わりたいとは思わない。が、

「今のところ、コイツに色々聞き出すのが、一番安全で確実なんだよな……」

どうやって俺をここに拉致したのか、そもそもこの姿は何なのか。それらを一番知っているだろう人物が起きるまで、俺は退屈な時間を過ごすことになった。

「んうう……あらあ？私、なんで縛られてるのかしら」

「ようやく起きたか、この変態女」

まだ意識がはっきりしていないのか、呆けた様子で周りを見回す変態女。

やがてその視線に俺が写り、少しずつ焦点が合わさっていく。

「あ、あら？あらあら？？」

「いきなり人を拉致して、服を脱がせた拳句に襲ってきやがって……っつーか、俺の体に一体何をした？どういいうつもりなんだ？」

「あ、あらう？」

俺の言葉に、不思議そうに首を傾げる変態女。そういえばコイツ、明らかに日本人の容姿じゃないんだが……日本語が通じるのか？やがて何を勘違いしたのか、頬を染めてイヤンイヤンと頭を振り出す変態女。まて、何を考えた。

「まさか、召喚して早々に縛られちゃうなんて。ひょっとして私何か強引にされちゃうのかしら？」

「オイコラ、ちよつとマテ、何変なこと想像してやがるっ！意味の分からんこと言ってるんで、人の質問に答える！」

そこまで言っただと、女の単語が引つかかった。シヨウカン？まて、そういえばこの女、最初にツカイマとか言ってたな。

シヨウカンとツカイマという言葉……それに、床に引いてある複雑な魔方阵。これらが意味するものって言えば……おい、まさか。

「ふふふ、でも私も簡単には体を譲れないわよ？……さあ、『動かないで』？」

「んがっ！なっ……か、体がっ！？」

突如、まるで女の言葉にあわせるかのように、俺の体が金縛りにあう。

それはまるで……そう、まるで魔法があるいは超能力のような力。さっきの単語と床の魔方阵を考えれば、絞り込むのは簡単だ。

「ま、まさかお前……魔法使いとか、言うの……か？」

自分で言っておきながら、その言葉の非現実さに笑いそうになる。いくらなんでも、この科学の発達した時代に、魔法使いは無いだろ

う？

「あら？ 私は魔法使いじゃないわよ。 私は、錬金術師ですから」

……どっちも対して変わらんだろ。 って言うか、錬金術師ってあれか？ 鉛を金に変えるとか、等価交換とか、そういうあれか。どっちにしろ、非現実的なことには変わりはない。

「ちっ……うっ……け……くそっ」

「んふふ、ダメよ？ 私は貴女のご主人様なのですから。 さあ、『縄を解きなさい』？」

女の言葉に、俺の体がびくりと震える。俺の意思に関わらず、ゆっくりと体が動き出す。

「お、おい……まさかっ……！？」

勝手に動く俺の体に、俺はとてつもなく嫌な予感を感じる。顔から、血の気が引いていった。

女の後ろに立ち、俺の意思に反して、俺の手がゆっくりと女の縄を解き始める。

「ふふ、良い子ね」

「や、やめっ……」

……………。

「あら？あらあら？えっと……命令はちゃんと聞いているの……よね？」

「ああ、多分それは……間違いないと思うぞ」

「じゃあ、何で私の縄はぜんぜん解かれないのかしら？」

「そりゃあ、多分俺が固く結びすぎたんだろうな」

……………。

「あ、あら？あらら？」

「俺もちよっと、結び目を解く手が痛くなってきたんだが？」

女が冷や汗を流し始めるのを見て、俺は軽いため息を付く。

起きたときに、万が一にも抜けられないようにときつく縛っておいたのだが、どうやらそれは正解だったようだ。

……まあ、今の女の様子を見ている限りでは、縄を解くなりいきなり襲ってくるような様子は……微妙なところだな。

そのようなことを考えていると、突然部屋の扉が勢い良く開かれた。中に、小柄な女の子が入ってくる。

「おっししようさま！頼まれてたコルの実、取ってきた……よ？何やってるの？お師匠様。何か、新しい遊び？」

「あ、お帰りなさいフォルちゃん。悪いんだけど、この縄……解いてくれないかしら？」

「はい、あれ？お師匠様、この子はだあれ？」

少女に視線を向けられ、軽く焦る。……ってちよっと待った。さすがに俺は、小学生にこの子といわれるような年齢じゃないぞっ。

「この子は、私の使い魔さんなのよ。や~~~~つと召喚に成功したのよ?」

「わあ、そうなんだあ」

顔中に喜びの色を浮かばせ、トテトテと駆け寄ってくる。何か行動を起こそうにも、俺の体は縄を解く行動のまま動くことは出来ない。

「私、フォルカ・エティールドって言うの。使い魔ちゃん、よろしくね」

「あ……う」

その屈託の無い笑顔に、俺は思わず顔をそらした。手足は思うように動かせないのだが、どうやら首から上は制限が掛かっていないようだ。

「あれ?えっと……私のこと、嫌い……なの?」

「違うわよフォルちゃん。使い魔さんはね、きつと照れ屋さんなのよ」

「む……ぐぐ……」

その言葉には、若干反論がしづらい。何せ、妹や幼馴染にも散々言われてきた事だからだ。

「……俺は東間美晴。美晴って呼んでくれれば良い」

ちらちらと目をそらしながら、俺は挨拶を返す。……多分、俺はこんなだから照れ屋などと言われるんだろうな。

「わあ……うん！よろしくねっハルちゃん！！私の事は、フォルって呼んでねっ」

「あ、ああ……よろしく、フォル……ちゃん」

頬が、一気に火照っていくのが感じられる。別に女の子と話すのが初めてって訳でもないのに、照れが収まらない。

「ふふ、ハルちゃんってば可愛いっいい子いい子っ」
「はう……」

突然頭に手を置かれ、優しく撫でられる。その奇妙な安心感と心地よさに、思わず酔ってしまいそうになる。

……ちよつと待った、おかしい。

ふと、妙な違和感を感じてフォルに視線を合わせる。

……フォルが、俺より背が高い？

まで、ということは……ということは、だ。

俺、背が縮んだ？いや、ひよつとして若返った……？

フォルが可愛く首を傾げるなか、俺はそのあまりの状況に、ただ呆然と立ち尽くしていた。

ちなみに縄が解かれたのは、その30分後のことである。長いこと放置された錬金術師の女は、解かれたときにその事で若干ふて腐れていた。

第2話 召喚されし者（後書き）

本編が開始されたので、ここでの予告等は終了します。

時間軸がずれたり、過去に戻ったり視点が変わる場合は、ここや前書きに注釈として書くかもしれません。

分かりづらい物や、蛇足として書いておきたいものはここに書いていく予定です。

必要なら、ネタバレにならない程度の人物設定を書きますが……必要なんですかね？人物設定。

第3話 使い魔が着る物

「そういえば、自己紹介をしてなかったわね」

ようやく開放された錬金術師の女が口を開く。さっきまでふて腐れていたのに、今ではもう笑顔だ。

「私の名前はイセリナ。イセリナ・アールテールよ。よろしくね」
「……あ、ああ」

若干引き気味の俺の様子に、イセリナが首を傾げる。

「どうしたのかしら？ そんなにおびえちゃって……お姉さんのこと、怖いのかしら？」

そりゃあ、初対面でいきなり襲われりゃ、怖がるのは当たり前だろうが。

俺はそう突っ込みたくなるのを何とか抑えた。下手に突っ込むと、また暴走しそうな気がするし。

「でも、おかしいわね。使い魔ちゃん、ミハルって言ってたわよね？」

「……ああ、そうだが」
「まだ名前も付けても居ないのに、何で名前が……？」

……？意味が良く分からないが、俺が名前を持つてるのは当然で、それを不思議がったりするのは……

ああ、アレか。ひょっとして、ネットで良く見かけるファンタジ

「な小説とかの話みたいにな、名前は召喚主が決めるとかそういうアレか。」

「冗談じゃない。」

「良く分からんが、俺は美晴で間違いないんだ。そう呼んでくれ」「あら？不思議だけど、使い魔ちゃんがそういうのなら？」

「……どうやら、イセリナは人の話を聞かない人種のようなだ。」

「使い魔ちゃんじゃなくて、美晴って呼んで欲しいんだが……それで？そっちは何て呼べば良い？」

「一応、年上に対しての敬意は見せるべき……か？正直、最初の変態っぷりで既に評価は激下がりが。」

「私の事は、イセリナって呼んでくれればいいわ。あ、でもセリちゃんって呼ぶのもありかも。」

「分かった。イセリナと呼ばばいいんだな。」

その見た目でセリちゃんは無いだろう。年甲斐も無い。

「あらあら？何か、不穏なことを考えなかったかしら？」

「い、いやっ……何も、変なことは考えて無いぞ？」

突如、イセリナから鬼神のようなオーラが立ちのぼるのが見え、思わず目をそらす。……年のことに関しては、タブーらしい。

「ねえねえお師匠様？何でハルちゃん、マントしか服着てないの

」？」

びくり、と肩を震わせる。確かイセリナは、俺の裸を見て暴走してきたはずだ。

恐る恐る、再度イセリナに視線を向ける。

「あらら？　そういえば、まだお洋服とかちゃんと着せて無かったかしら」

「お師匠様つてばだめでしょ！　こんな姿じゃ、ハルちゃん風邪引いちゃうよ？」

「あらあら、大変ね。直ぐに取ってくるわ」

だが、思ったような事態にはならなかった。……ひょっとして、俺が最初に見たのは幻覚か何かだったのだろうか？　そういえば、起きたばかりで意識もはっきりしてなかった訳だし……。

そのときの俺は、そんなことばかりを考えていた。だが、俺は直ぐにでも、服を取ってくるの意味を考えるべきだったのだ。

「はい、これ。きつと、ハルちゃんに似合うわよ？」
「……は？」

そういつて渡されたものを見て、俺は思わず呆然とする。

黒い、ゴシック調で彩られたワンピース……って言うのか？ひらひらとした装飾とスカートは、着る人が着ればきつと映えることだろう。

……が、そんなものは俺が着るべきものじゃないだろう。常識的に考えて。俺は男……あ、しまった。俺、今女の子だったんだ。

「早く着てみて？きっとハルちゃんに似合うわよ」

「あ、その服私が欲しかったのに、ちよつとうらやましくな。でも、ハルちゃんならしょうがないかな？」

とても乗り気なイセリナに、俺は思わず頭を抱えそうになる。つかフォル、別に欲しけりやもってって構わんから。

「いや、そういうのじゃなくて……その、ズボンとかシャツとかは無いのか？」

「あら？私は男の子が着るような服は、着たりしないわよ？」
「……」

いや、あるはずだろ。ファンタジーなんだから、旅用の服とかそういうのが。

「お師匠様、ハルちゃんひよつとして、色が気に入らないんじゃないかな？」

「あらあら、じゃあピンク色の服の方が」

「いやそれで構わん！それを着るっ……！」

「冗談じゃない。黒でもきついのにピンク色なんて、本気で洒落にもなっていない。」

「じゃあ、お着替えさせて上げましょうね」

「へ？」

「んっふふっ、きつとハルちゃんに良く似合うよ？今から楽しみっ」

「は？いや、着替えぐらいは自分……で……」

そこまで言っただけで気づいた。二人とも、目が正気の色を帯びていない。

突如として訪れた貞操の危機に、俺は後ずさる。だが、

ガシッ

「なあっ！？」

「えっへへっ、ハルちゃん。逃げちゃだめっ」

フォルの拘束を何とか振りほどこうとするも、力が強くて振りほどけない。そして、

「さあ、お着替えタイムよおっ？」

「ぎゃああああああああっ！！」

「うう……もうお婿にいけない……」

「ハルちゃん、ハルちゃんは女の子だから、お嫁さんだよっ？」

突っ込みたい。激しく突っ込みたいのだが、実際体が女の子にな

つてるので突っ込めない。

「あらあら、じゃあひょっとして、私が責任を取らないといけな
いのかしら」

「いちいち頬を染めるな！くねくねと体を動かすなっ！！」

強制的に着替えさせられた以外のことはされていない。されて無
いんだが……色々と、その、見られ……ああもう！

「まったく……それで、ここはいつたいどこなんだ？」

「あら？そういえば、今日のご飯はどうしようかしら？」

「お師匠様、今日はハルちゃんが生まれた日なんだから、お祝いし
なきゃだよっ！」

「おい、人の話を聞け」

確かに食事のことは重要かもしれんが、今はそれより聞きたいこ
とがあるんだ。

……タイミング悪く腹の虫がなったが、とりあえず黙殺する。

「今のハルちゃん？お腹すいてるの？」

「あ、いや、だからその、その前にっ！」

「恥ずかしがらなくても、いいんだよ？私だって、ご飯食べない
とお腹すくしね」

「あらら、それじゃあお姉さん、張り切ってご飯作らないといけ
ないわね」

こ、この天然娘共は……人の話を聞く気は無いのか！？

「じゃあ、ご飯の材料買ってくるから、ハルちゃん待っててね？」
「お祝いなら、あれにしようかしら？それともこれのほうが？」

「あ、おい、待っ」

俺の制止の声もむなしく、二人が外に出て行く。追いかけようにも、さすがにこの服のままで外に出る度胸も無く……結局俺は、二人が帰ってくるのを待つしかなかった。

第3話 使い魔が着る物（後書き）

一話使って単に服を着替えただけ。

……話がぜんぜん進みません。

なお、服飾に関しては細かいことは考えていません。

第4話 夢で見るもの（前書き）

若干超展開注意。

第4話 夢で見るもの

「ご馳走様でした」

「ふえ？ハルちゃん、今のってなあに？」

食事後の恒例の挨拶をした俺に、フォルが首を傾げる。

「俺んところの国の、食後の挨拶だよ。さっきのいただきますと同じようなものだ」

「ほえ、そうなんだあ」

3人で昼食をとっている間に、俺はイセリナ達から話を聞き出していた。

……本当は、帰ってくるなり聞こうと思っていたのだが、腹の虫が見事に邪魔をしてくれた。まあ、朝食を抜いていたんだから、仕方ないことが。

そうして聞いた話によると……、

「つまりここは異世界。まあ、魔法だの錬金術だの、ファンタジックな単語が出た時点で、そうじゃないかと思っでは居たんだが。」

「うんうん」

つまりここは異世界。まあ、魔法だの錬金術だの、ファンタジックな単語が出た時点で、そうじゃないかと思っでは居たんだが。

「……で、これだけを聞くのに、何で食事する時間分も消費されてんだ？」

「ご飯を食べながらお話しするのは、お行儀が悪いんだよ?」

口の中に物を入れながらくっちゃべってたお子様が、何を言ってるやがる。

「つつーことは、だ。元の世界に帰る方法は……」

「あらあら? ひょっとしてハルちゃん、異世界から呼び出されてきちゃったのかしら?」

今更だな、オイ。

「ああ、それで」

「あらあら。じゃあ、さっきのお姉さんの食事、口にあわなかったりしたのかしら」

「違うっての!」

何故いきなりそうなる。

「あらあら? それじゃあハルちゃん、今度はハルちゃんが食事を作ってくれるのね」

「だから! 何故そうなるんだっ!!」

「え? そうなの? それは楽しみだよ」

「おまえら! 人の話を聞けよっつ!!」

結局俺の聞きたいことはほとんど聞けず、俺は夕食を作られることになってしまった。

「あらら」

「ハルちゃん、これ、黒焦げだよ？」

「だから、俺は料理が出来んつつただろうが」

その日の夕食が無しになってしまったのは、いわゆるオチという奴……なのか？

夢の中に潜る。

それは俺が、元の世界で毎晩行っていたこと。

それが出来るようになった当初は、誰もがやっていることだと思っていた。だが、家族も友人も、誰一人としてそんな事出来ない言われた。

俺は、夢の中で見聞きしたことを全て覚え、望めば一度見た夢の世界にだって、再度潜ることが出来た。

だから、俺にとって夢を見ている間は、一番の幸せな時間だった。……もつとも、時々悪夢を見てしまったりすることもあるのだが。

正直……異世界に来た事で、その能力も失われてしまったんじゃないかと思っていた。

何せ世界どころか、性別も姿かたちまでもが変わってしまっている。

あれから、イセリアに頼んで鏡を見せてもらった。顔の形こそ変わっていないものの、髪の毛は白く、眼の色は紅く変わってしまった。同じく見るまで気づかなかったが、髪の毛自体もウェーブが掛かって、腰の辺りまで伸びている。

力も体格相応の弱々しいものになってしまったし、若干声も以前より高くなってる気がする。身長は、130前後まで縮んでしまっ

た。まるで、小学生にでもなった気分だ。

そんなだから、正直俺はもう、夢に潜れないのではないかと……と思っていた。

視界に、公園のようなものが広がる。

現代式の、ブランコや滑り台といったものが置かれている公園。そこには……一人の少女が立っていた。

「あら、いらつしゃい。初めまして、かしら？」

「……ああ、初めまして」

こちらを見て、クスリと笑う少女。その姿に、思わず軽く見惚れてしまう。

「貴方、知りたいことがあるんでしょう？」

「？……あ、ああ」

不意にそんなことを言われて、戸惑う。確かに少女の言うとおり、俺はこっちに來たばかりで、知りたいことはたくさんある。

だが……それを目の前の少女が知っているようにには見えなかった。少なくとも、元の世界……現代の公園に住む少女が、知っているはずが無い。

「ふふ……そうね、私には教えることは出来ないけれど、貴方におまじないをかけることは出来るわ」

「おまじない？」

「そう、会話は出来ても、まだ読み書きが出来ない貴方に。読み書きが出来るようになるおまじない」

「どうしてそれを……？」

確かに俺は、こっちに来た時から本を読むことが出来なかった。今考えれば、会話が出来たことも不思議なことだったのだが。

「私は貴方。貴方は私」

「私の知ってる読み方と書き方を、貴方に教えてあげる」

そういつて、少女は俺に近づいてくる。不思議なことに、俺はその少女に抵抗する気はまったく起きなかった。ゆつくりと、少女の顔が近づいて来て……。

唇と唇が、触れ合った。

チュンチュン、と小鳥の鳴き声が聞こえる。

異世界でも、朝起きるときは似たようなものなんだな……とか、わけの分らないことを考えながら、体を起こす。

隣を見れば、穏やかに眠るフォルの姿。……これがいわゆる朝チユンか？ いや、違っだろう。俺の服装とか乱れてないし。

改めてフォルの姿を見ると、可愛い女の子だと思う。元の世界だと大体小学6年生ぐらいだろうか？ 赤い髪の手短カットと茶色い瞳は、より本人の快活さを増している気がする。

「って、何考えてんだ？ 俺は」

そんなことよりも、夢の内容だ。直接その……き、きき、ききキスをしたところで起きるとか、白雪姫じゃあるまいし……。

……いかん、思い出して恥ずかしくなってきた。そういえば、これって俺のファーストキスなんじゃ？ いや、夢の中だからノーカンだな。うん。ノーカンノーカン。

いやでも、夢の中の女の子って可愛かったし、いや、容姿はきっちりとは覚えてないんだけど……あれ？ 何で覚えてないんだ？ いつもなら覚えてるはずなんだが……。

そこまで考えたところで頭を振る。多分、今思い出せないものはいくら考えたところで思い出せないだろう。

「うっうん……ふにゃあ？」

声がしたので隣を見ると、フォルが起き上がって軽く伸びをしていた。こういうしぐさが可愛いのって、女の子の特権だと思う。

「おはよう、フォルちゃん」

俺の声に反応して、こっちに振り返るフォル。満面の笑みが、俺に向けられる。

「えっへへ、夢じゃなかったんだね。おはよう、ハルちゃん」

今まで、夢であつて欲しいと思つていた異世界への旅。だが、フォルの笑顔を見ると、こういうのも悪くないかもしれないな…と、少しだけ思えた。

第4話 夢で見るもの（後書き）

というわけで超展開でした。まあ、ファンタジーの世界なので、大目に見ていただけるとありがたいです。しかしそれでも、中々話が進みません。

第5話 本の知識

あれから数日……不思議なことに、あの夢以来俺は読み書きが出来るようになっていた。

あの少女が何者なのかは分からないが、こうなると魔法というものが実在することも信じたくなってくる。

正直、イセリナやフォルからはろくなことを聞けないので、本を読めるようになったことは非常にありがたかった。

……つか、良く分からないと言っているフォルはともかく、イセリナのアレは本当に天然なのか？どんな質問をしても、食事や服の話しか帰ってこねえし……。

まあ、悩むだけ無駄って感じだろう。あの天然のあらあつぷりは異常だ。

容姿は良い方なのにな……と、ちょっと思う。身長は160cm前後だろうか？平均よりも若干高めで、温和な表情と長い金髪、心の奥を見通しそうな蒼い眼が特徴の、かなりの美人。

問題は、その特徴を全て吹き飛ばすほどの天然っぷりと、時折暴走する思考だろうか……多分、結構な人数の男達が、この人のそれを見てドン引きしていったんだろうな。

……数日経つうちに、俺は同居人の事がある程度把握できるようになっていた。ちなみに、何故か二人とも俺に良くぺたぺたと引っ付いてくる。……そんなに暇、なのか？

「ねえねえハルちゃん、遊ぼうよ」

今もフォルが背中にくっついていてる。相当に暇なのか、俺の背中を縦にゆさゆさと揺らしてくる。

「今勉強中なんだっての。っつーか、暑苦しいからあんまり引っ付くなよ」

フォルは正直まだ子供なのだが、それでも若干……その、背中に当たってる胸とか、柔らかくて……って何考えてんだ、俺は！？
いかん。こっちに来てから、子供に対してすらもそういう意識を持つようになったのか？あ、いや、つか今俺、女の子だし、年齢も……って、いやいや。元高校男児としてはまずいだろ。

「え、せつかくお天気なのに、お家に居てもつままないよ？」

いや、だからと言ってこの姿で外に出ると？この、ゴスロリだから黒ロリだかは知らんけど、ひらひらとした服装で外に出ると？

「あらあら、勉強熱心なのはお姉さん感心だけど、たまにはお外に出ないと、体に悪いわよ？」

初日以降、一度も外に出てない貴女には言われたくないです。はい。

初日こそ、イセリナはフォルと一緒に買い物に出かけていたんだが、それ以降は外に出る様子を見たことが無い。

かといって、勉強をしたり錬金術に励んだりしているようにも見えない。ただぼろっところちを眺めてたり、時折引っ付いてきたり、

寝っ転がったりしてるだけ。お前さんは二トかと。

ちなみに、食事の買出しは主にフォルが担当している。まだまだ小さくても、フォルはしっかり者だと思う。

それはともかく。

「フォルちゃん。俺はまだ、外には出れないはずだぞ？」

そういつて、俺は自分の腕を見る。

その色は、こっちに来てから変わらず青白いまま。いや、時がたてば肌色になるってわけでもなさそうだけど……。

本によると、何でも召喚したばかりの使い魔は体が不安定らしい。なので、召喚してから一週間程は日光にも当ててはいけないのだとか。

アルビノでもあるまいし……といたいところだが、実際この肌の色を見ると何となく納得してしまう。まあ、安定するしないだから肌の色素とは関係ないと思うが。

「えゝ、でもハルちゃん元気そうだよ？お外に出た方が、楽しいよゝ？」

だが、そんなことはこの天真爛漫な娘には関係ないらしい。単純に知らないだけ、とも言うが。

まあ、フォルの場合は知ってたら多分、外に出ることを止めるだろうっしな。今も、俺に良かれと思って、誘い出している訳なんだか

ら。

とはいえ、無理して体調を崩せば、フォールが落ち込むのは目に見えている。ここは一つ、そのあたりを知っているイセリアに……。

「あらあら、お家に引きこもってばかりだと、病気になっちゃうわよ？」

……おい、そこのお姉さん。何であんたも知らねえんですか。そういえば、さっきも外に出るとか言ってた気がするな。単純に忘れていただけだと思ったんだが、違ったのか……。

「あ、分かった！ハルちゃん、お外が不安なんだよね？じゃあ、私が連れてつてあげるっ！！」

「え？いや、あ、ちよっとっ」

突然ガシツと俺の手を掴み、引っ張るフォール。思わず読んでいた本を取り落とし、バランスを崩しかける。

「じゃあ、しゅっぱっ」

「いってらっしゃい。気をつけるのよ」

「うえええええ！？」

力が弱くなってしまった俺に、フォールに抵抗する力など無く、俺は強制的に外へと連れ出されていってしまった。

日光が容赦なく俺の肌に降り注ぐ。その刺すような感覚に、ひつと声を上げる。

だが、特に煙を上げたりすることは無い。まあ、さすがに吸血鬼と言っわけではないんだから、突然灰になるようなことは無いようだ。

「ハルちゃん、ちゃんと付いてきてね？」

「ちょ、ちょっ……どこ行くんだよっ」

「近くの森のところ！ いろんな草とか、木の実とか生えてるんだよ」

俺の腕を引っ張りながら走るフォル。付いてきても何も、この状態では付いていくしかない。

周囲の視線が俺達に集中する。そういえば、俺の服装ってアレなんだよな。きつと目立ってるんだろっなあ……。

ため息をつく余裕も無いまま、俺は町の外へと連れ出された。普通、街の外は街の中で慣らしてからだと思っなのは、俺だけなのか？

「とうちゃくく！」

「ぜえっはあっ」

ようやくフォルが手を放した場所は、街から出て直ぐにある森の入り口だった。

息を整えながら、今居る位置を確認する。たしか、地図で言うところ

ころのトレイアの森……だっただか？

「あれ？もう疲れちゃったの？」

あいにく、俺は元の世界ではインドア派だったんでね。それに、こつちに来てからの見た目からしても、体力があるようには見えんだろうが。

「ん……。じゃあまずは、あそこの木の下で休もつか」

こくりと頷いてフォルについていき、木陰で座り込む。服が汚れるとも思ったが、正直気にする余裕も無い。

「はあっはあっ、疲れた……」

「ハルちゃんって、体弱いんだね……あっ！ひよつとして、私が無理やり引張ってきちゃったから……」

ぐったりとした俺を見て、顔を徐々に青ざめるフォル。気づいてくれたのはありがたいんだが、出来れば最初から気づいて欲しかった。

「だ、大丈夫、ちょっと疲れただけだから」

そういつて笑いかける俺に、ようやく安堵の色を見せるフォル。……甘いのは分かっているんだが、どうにもフォルが暗い顔をするのは好きじゃない。

ひよつとしたら、俺はフォルに妹を重ねてるんじゃない……と思いかけて首を振る。あの天然セクハラ娘とフォルを比較するなんて、フォルに失礼だろ。

俺の動きに、フォルが首を傾げる。女の子だと、こういった仕草って可愛いよな〜とか和みながら、俺は十分に休憩を取った。

「ハルちゃん、これこれ。これがカラシンの実だよ！」

「へえ〜、確かこれって辛いんだよね？」

「うん。食べると、ものすごく辛いので〜」

フォルが、拾ったカラシンの実を見せてくる。外見も中身も茶色だが、唐辛子並みの辛味を持っているらしい。詐欺だな。

十分な休憩を取った俺達は、森の入り口近くで散策をすることにした。最初はフォルが奥に行こうと誘って来ていたんだが、トレイアの森の奥は猛獣が住み着いているはずだし、何より迷ったら困るので止めた。

最初は若干不満そうだったが、散策を始めるなりフォルの機嫌は戻っていった。今は、いろんな草や木の実を見つけて来ては、俺に見せている。

「ハルちゃんハルちゃん、これはクロガサタケなんだよ」

「それ、確か毒キノコじゃねえか。捨てて来い」

時々、毒草や毒キノコまでも取ってくるから侮れない。さすがに、普段からこの森に来てるらしいから、誤って食べたりすることは無いようだが。

「あ、ハルちゃんあれあれ、アミリスだよ。可愛い〜」

今度は、木の上にリスを見つけたらしい。視線を向けると、カリカリと木の実を齧っている姿が見える。

本が読めるようになって、俺はまず、使い魔……自分についてと、この世界の動植物について調べることにした。まだ、元の世界に帰れるような当てなど無いので、生きていくために必要な知識が欲しかったのだ。

……本音としては、魔法についての知識の方が欲しかったんだが……そうだった本は、イセリナの家には置いてなかった。錬金術は錬金術で、魔術というより元の世界の科学のようなものだったし。

調べる内容も、主に身近にあるもので危険なものに絞り込んでいた。と言うのも、森の奥や山奥なんぞ当分行くつもりは無いので、そのあたりの知識よりも、より身近な危険について知っておいたほうが良いと判断したからだ。

そのお陰か、俺は街の近くで見かけるような動植物に関しては、何が危険なのかがわかるようになっていた。また、使い魔として注意すべき点も、大体は分かって来ている。

ふと、目に付いた木にぶら下がっている木の実に手をかざす。それに反応するように、木の実がぎざぎざに割れ、がじがじとかみ合わせ始める。

「あ、ガブリの実。ハルちゃん、危ないよ？」
「知ってる」

別に手を突っ込まなければ噛まれないし、噛まれてもちよつと痛いだけで、毒なんかも持っていない。だが、この実についてまったく知らない状態だと、迂闊に触れたりして驚くことになるだろう。

知っていれば、危険にさらされることはより少なくなる。本を読むだけじゃなくて、実地で見てみないと分からない部分もあるが、事前に知っているということはやはり重要なのだ。

ふと、今の自分にとっては、何が一番危険なのだろうか？と思った。

猛獣や魔獣なんかは、ここでは滅多に出会わない。毒もちの植物は見分けが付くので、口に入れなければ良い。ならば、何が一番…？

ふとした拍子に浮かんだ疑問を考え込む。そんなことをしていたから……俺は、後ろから迫る足音にも、気づくことが出来なかった。

第5話 本の知識（後書き）

と言っわけでキンクリ発生しました。数日ほど。

第6話 無知の代償

「！！んなあつ！？」

警戒していなかったところに、俺の体が突然宙に浮かぶ。誰かに抱きかかえられていると気づき、即座に逃れるために暴れだす。いくら考え事をしていたからといっても、真後ろに来るまで気づけないとは……。今の俺は、非力な女の子なんだ。捕らえられれば、そう簡単に逃げ出せないことなんて、分かってたはずなのにっ。

「あつ！こらつちよつと、暴れっ……あつ」

ズルツドサツ

「っ！？いつつたーーーー！！」

暴れた拍子に何とか拘束から逃れたはいいが、頭から地面へとずり落ちてしまった。側頭部と首からの痛みに、軽く悶える。

「ちよっ……き、君、大丈夫！？」

「だっ大丈夫なわけあるかつ！頭から落ちたんだぞっ！？」

思わず涙目で振り返り、その相手を睨み付ける。頭と首を手で押さえるが、ぜんぜん痛みが引く様子が無い。

「ハルちゃん？どうしたの？」

そんな俺の怒鳴り声が聞こえたのか、フォルがこっちに向かってきた。……痛みで忘れていたが、俺って目の前の人物に拉致られそうになったんだよね？……まずいっ！

「フォルちゃん！こっちに来るなっ！！」

俺は慌ててそう叫ぶ。俺だけならともかくとしても、フォルまで拉致られるのは絶対に嫌だ。

だが、そんな俺を不思議そうに眺めるフォル。焦ってさらに言葉を重ねようとするが、ふと、その視線の先が、俺じゃなくて誘拐犯であることに気づいた。

「あれえ？おねちゃん。こんなところで、どうしたの？」
「……は？」

フォルの言葉が理解できず、誘拐犯へと向き直る。よくよく見ると、相手は女性だった。

「おねえ……ちゃん？」

呆然とする俺の言葉に、その女性がばつが悪そうにコクツと頷く。

そういえば、顔立ちとか赤い髪の毛とか茶色い眼の色とか、フォルに似ているところは少なくない。

でも、それなら何で？と俺は首を傾げる。フォルのお姉さんなら、俺を拉致しようとしたりする理由なんて無いはずだ。

そこまで考えて、気づいた。何か、フォルのお姉さんの目の色が怪しい。手を前に持ち上げてきてるし、息も荒くなってきた。…。

じりつと俺の脚が後ずさりをする。それを合図とするかのように、フォルのお姉さんがこちらに抱きついてきた。

「あーもう、可愛い可愛い可愛い、もうさらっちゃいたいくらい、可愛いわー!!」

「なっ!？ちよっ暑い! 苦しい! 離れろおっ!!」

既に隣接されていた俺に、逃げる距離も余裕も無い。あっさりと捕まってしまった俺は、フォルの姉が満足するまで、抱きしめられることとなってしまった。

「えっと、そういえば自己紹介をしてなかったわね。私はセルニア・エティールド。この子のお姉さんよ」

「……………」

散々抱きついて満足したのか、フォルの姉が落ち着いた様子で自

己紹介をしてきた。

俺は拘束の緩んだ腕を何とか引き剥がし、しばらく離れた上で返答代わりに睨み付ける。

「あ、あちゃ〜……ひょつとして、警戒されちゃったカナ？されちゃったカナ？」

カナ？じゃねえよ、当たり前だ！いきなり問答無用で抱きついてくるような馬鹿なんぞ、警戒するに決まってるだろ！！

しかも、一度目は背後に忍び寄った上で仕掛けてきやがって、本気で誘拐犯かと思ったわ！！

「おね〜ちゃん、ハルちゃん、怒ってるんだけど。何でこんなことしたの？いつもはちゃんと、お願いしてからだよ？何で？」

フォルから非難の目が向けられる。若干聞き捨てなら無い言葉を発した気はするが、とりあえずフォルも怒っていることには違いは無い。

「いや、そのね？この子って物凄く可愛くて、その、首をかしげた動作とかもう我慢できなくなっちゃって……つい」

「つい、じゃねえよ！つい、でいきなり抱きしめられてたまるか！大体、初めん時は後ろ向いてたはずだろ！その時は何だったんだ！……」

「えっとその時は、フォルがこっちに来てるって聞いて、探している……。そうしたら、とっても可愛い後姿の女の子が居たから、その、つい」

……オイ。

「……おねーちゃん……」

フォルの視線と表情が、より厳しいものへと変わって行く。そんな妹を見て、セルニアがあわてて弁明を始めた。

「ええーと、いやだつてその、さ。わかる……で、しょ……？」

……それ、何の弁明にもなっていないぞ。つか、それで分かるのはお前だけだ。

さらに、フォルの表情が変わって行く。今度は、何か悲しいものを見たような視線に……。

「う……ごめんなさい」

さすがに耐えられなかったのか、素直に謝ってきた。

謝ったところで、ようやくフォルが表情を崩す。これって、姉より妹の方がしつかりしてんじゃないかねえのか？

軽くため息をつく。一応謝ってもらったことだし、フォルの姉と言っことを考えれば……許すしかない。

「まあいいや、許すよ。結局怪我も無かったし、そこまで酷いことをされた訳でも無いからな」

「え？ほんと？よかった」

俺の言葉に安堵の息をつくセルニア。まあ、悪い人物ではないよ
うだしな。……警戒は、しておくけど。

「ね、ね、それでこの可愛い子、誰？名前は、なんていうの？」
「……東間美晴。いや、こっちだとミハル・トウマが正しいか」

こっちは西欧式の名前・苗字だからな。ファーストネセカンドネーム生活様式も西欧式だった
し、未だ慣れないんだが、そのうち慣れないといけないだろう。

「え？え」とミハル・トウマでいいのかな？ああ、それでハルちゃん
なんだね」

正直、その呼び方に良い思い出は無いのだが……まあ、呼びやすい
のだろうし、今となっては名実ともに女の子になってしまった
ので、仕方ないか。

「ね、ね、あたしも、ハルちゃんって呼んでいいカナ？いいカナ？」
「別に俺は気にしないから、好きな呼び方で呼べば良いよ」

俺の返答に、満足そうに頷くセルニア。

「じゃあ、あたしのことはセルニアお姉ちゃんって、呼んでね」

何やら、寝言を言われた気がするな。とりあえず、冷たい視線を送ってやるか。

「ごめんなさい、謝ります。謝りますから、その非常に冷たい視線は止めてください」

……謝るぐらいなら、初めから言っなよ。

「しっかし、ハルちゃん可愛いね、うちの妹より可愛い子なんて初めて見たよ」

「そりゃどうも」

個人的には、可愛いといわれても嬉しくないんだが……それに、こいつ何気に自分の妹を持ち上げてるし。

「えっへへ、おねちゃんはね、可愛い子が大好きなの！可愛い子見ると、ぐりぐりっしてたくなっちゃうんだって」

「んっふふ、可愛いは正義！だからねん」

……………。

「ひょっとして、可愛い子を見つけるたびに抱きついてんのか？」
「へっ！？いや、そんな事無いよ？ちゃんといつもはお願いして許可取ってるよ？だから、そんな眼で見ないでっ！」

あゝ、はゝ、そうですか。まあ、本人の同意付きなら、俺は何も言わんがね。抱きつくだけなら、そこまで害も無いし。

「それで？セルニアさんは、俺達に……いや、フォルちゃんに何か用事があるのか？」

「ん？用事って言うほどでもないけど、フォルが森の近くで遊んでるって聞いてさ、ちょっと来て見ただけ」

そう言つて、セルニアが若干頬を染める。なるほど、つまりは妹を心配してきたってことか。

それならまあ、フォルにとっては良いお姉ちゃんと言うことになるか。身内であっても、心配してくれる人が居るのは良いことだしな。

「それに何より、あたしの美少女センサーがビビビーツと来て。もうこれは、行くっきゃないって思つて来ました！」

……前言撤回。妹の心配は二の次か。

「えゝつと……ハルちゃんってば。何でお姉さんに、そんな冷たい視線を向けるの力ナ？向けるの力ナ？」

「さあな？それは自分でも分かつてんじやないのか？」

「きつっつ」とか言つて、苦笑いを浮かべるセルニア。

まったく、余計なことを言わなければいいものを。いや、あるい

は、これはただの照れ隠しだったのかもしれないが。

「それで、ハルちゃんはどこの子なのカナ？あたしがこんな可愛い子逃してたなんて、ちよつと不覚なのよ」

「ハルちゃんはね、お師匠様の使い魔さんなんだよ」？」

フォルの言葉を聞いて、セルニアがきよんとする。

「あれ？フォルのお師匠様って、イセリナさんのことだよね？」

「そうだよ」？」

「イセリナさんの使い魔って、確か4日前ぐらいに召喚したんだよね？だよね？」

ああ、何を言いたいのか理解した。つまりアレだ。俺が外に、

「何でもうこんなに賢いの！？」

「おい、そうじゃないだろ。って言うか、人型の使い魔なら、初めから知性は持つてゐるはずだぞ？」

本でそう書いてあつたんだが、何で俺のほう詳しいんだ？……いや、あまり知られて無いのか。

「あ、いやそつか。そういえばそうだったよね。なんたって、イセリナさんの使い魔だし。たった4日で、これだけ賢くても……4日？あれ？」

ぎざぎざ……と、さび付いた機械のようにこちらに視線を向ける。ようやく気づいたか、いや、ようやく気づける奴が出てきた、なのか。

「つ、使い魔ってさ。確か、召喚して1週間ぐらいは、外に出ちゃだめ、なんだ……よね？な、何で？」

はあ、とため息をつく。まあ普通はありえんらしいな。具体的にどうなるかまでは、本には書いてなかったが。

「使い魔は、生まれてから1週間は体が安定しないらしいな」

「し、知ってるのなら、なんで？何で外に出ちゃってるの力ナ？出ちゃってるの力ナ！？」

「そりゃあ、本来知ってなきゃいけないイセリナが知らなきゃ、誰も一緒に外に出そうとするフォルちゃんを、止めれんだろ？」

フォルのほうが力も強いしな。俺だけじゃあ抵抗のしようが無い。

俺の言葉に、セルニアの目が点になる。まあ、そうだよな。使い魔を召喚するときに、誰もが見るだろう注意事項を知らないとか。ぶっちゃけありえねえ。

ちなみにフォルはと言うと、なにやら首を可愛くかしげていた。うん、時々賢いの、何故ここういう話題だけ理解できんだ、君は。

「ちょ、ちょっと大丈夫なのハルちゃん！？まだ4日しかたってないのに、結構外に出てるんだよね？！」

「今のところは、大丈夫……だ、？！」

不意に、頭が揺らいだ。体中から力が抜け、視界が急速に狭まっていく。

「……！！？」

「……！！！！！！」

その場に倒れこむ俺を見て、セルニアとフォルが何か叫び声をあげる。あまりに急な出来事に、パニックを起こしているかも知れない。

迂闊、だったか？命に関わるところまでは……と思っていたが、意識を失うほどなら、まずいのかもしれん。

思考がどんどん胡乱になっていき、ついに何も考えられなくなる。聞こえていた叫び声が、どんどん遠くなっていく。そして、俺の意識は深い闇の中へと埋もれていった。

第6話 無知の代償（後書き）

以上、フォルカの姉との遭遇とその顛末でした。

第7話 仮病の使い魔

「はい、ハルちゃん。あ〜ん」

「いや、そこまでしなくてもいいって、フォルちゃん」

あれから俺は、気絶したままフォルとセルニアに家まで運ばれる事となった。

幸いなことに、命に別状はなし。どうも、軽い日射病にかかっていただけだったようで、1日もたたずに起き上がるようにはなっていた。

……いや、それにしたってそこまで暑かったわけでもなく、時折木陰で休んでもいたはずなのに倒れるとは。やはりまだ、外に出るのは危険なんだろうな。

「だ〜め。ハルちゃんはまだ病気なんだから、ちゃんとご飯を食べないと」

「いや、自分で食べれるって話なんだけどな？」

相変わらず、フォルは絶妙な所で人の話を聞いてくれない。3〜4日程は外に出れないといったら、勝手に病人扱いにされてしまったし。

……まあ、病気じゃなきゃ外に出れるって考えられるぐらいなら、病気と考えてもらった方がいいかもしれん。さすがに、次倒れたらまずいだろうし。

「そうよ〜？ハルちゃん病弱なんだから、おとなしくフォルちゃんとお姉さんの言うことを聞きなさい？」

……いつの間にか、イセリナからは病弱設定にされてしまった。
いや、頼むからもうちょい考える。病弱な使い魔なんて居て……いや、どこかには居るのかもしれないが。

ん？ちよつと待てよ、俺の肌は青白い。そして、俺は外に出て数時間程度で倒れ、そのまま家に担ぎ込まれている。

……十分病弱の要素があるじゃん。いやまあ、安心して外に出れるようになれば、急に倒れたりすることはなくなるはずだから、次第に病弱のイメージは無くなっていくと思うけど……。

考え事をしているうちにも、フォルが目を輝かせてスプーンを構えていた。……観念して、口を開けることにする。

フォルが息を吹きかけてきちんと冷まし、ゆっくりと口の中におかゆを入れる。

もぐもぐ……うん、やっぱり二人の料理は美味しい。

「美味しい？」

「ああ」

俺の言葉に満足そうに頷き、再度おかゆを口に運ぶ。

「たくさんあるから、いっぱい食べて、早く元気になろうね」

「……ああ。そう、だな」

誤解を解けないのなら、あわせた方がまだマシか、と口を開ける。ちゃんと食べやすい温度に冷やされたおかゆが、再度口の中に入れた。

意に沿わない形で数日間、病人扱いされてしまった訳だが、それほど退屈になる訳ではなかった。

元々、1週間は外に出れない訳だったし、今のうちに本を読んでおいて、知識を深めておくつもりでもあったからだ。

さすがに病人ということで、イセリナもフォルも頻繁にぺたぺたと引く付くことは無くなった。

……ひょっとして、病気が治った（事になった）後に、今引く付けない分引く付いてくる事になるのか？いや、その事はあまり考えないようにしておこう。

ともかく、特に邪魔が入ることも無く、俺は本によって知識を深めていくことが出来た。

その内容はというと……

この世界は、人と動物と魔獣、悪魔や果ては竜まで存在する紛れもないファンタジーの世界である。

人間や上位の魔獣、そして悪魔や竜は、魔法を使うことが出来る。特に悪魔や竜は膨大な魔力を持ち、ほぼ無制限に魔法を撃ち続けることができると言う。

その魔法についてだが、魔法の使い方といった詳細が書かれた本は、やはりこの家にはなかった。まあ、以前探したときにも無かったし、期待はしてなかったけど。

そして魔法とは別に、錬金術という技術が存在する。これは元の世界での科学のようなもので、さまざまな道具や薬を作ることが出来る。

……さすがに、バターやケーキの作り方からいくつかの料理のレシピまで、錬金術の本に書いてあるとは思わなかったが。残念なことに、鉛を金に変えたりするような記述は無かった。

ちなみに、この家にあつた錬金術の本のタイトルは『錬金術入門』……入門だから料理のレシピも書いてあるのか？ いまいち良く分かんらん。

それ以外にも冒険者ギルドやら錬金術師協会、宗教や大陸の国家との特徴、地理といったものをさらっと頭に入れた。もつとも、まだそこまで重要な情報とは思えないが。

ついでに、山奥の秘境や森林の聖域と呼ばれるような場所に現れる、凶暴な魔獣や竜といったものに関しても、詳細を調べてみた。ざっと調べた感想。うん、見かけたら全力で逃げよう。全長30mの竜だの、1撃で巨木を吹き飛ばす（なぎ倒すではない）熊だの、勝てるわけねえだろ。

そのあたりの退治はまあ、お国の近衛騎士様とか宮廷魔導師様とかのお仕事だろう。俺みたいな、脆弱なただの一使い魔が相手する

ような代物ではない。

そういえば、ファンタジーの世界ではお約束のようにある伝承が、この世界にもあるようだ。といっても、神様がどのとか言う宗教じみたものでも、勇者や魔王がどのといった定番ものではなく、魔法の祖が居るという話。

その名前はアリス。……千年以上も前の伝承の割には、わりと詳細に残ってる気がする。まあ、名前を見た時点で、不思議の国かよとか突っ込みをいれそうになったが。

何でも彼女は、何も知らない人々に文字と魔法を教えて行ったのだそう。それだけならまあ、伝承というより記録に残るぐらいなのだろうが、彼女は何と千年も生きたらしいのだ。

……で、今から千年ほど前に突如姿を消したらしい。その詳細は不明。さすがに千年単位ともなると、壮大だなあ……としか思えんつかアレじゃね？実はエルフだったとか、そんなオチじゃね？この世界でも、エルフって長寿らしいし。

と、そこまで考えたところで頭を振る。まあ、伝承とか伝説とかの話は面白いが、真に受けたり真面目に考えるほどのものではない。第一、千年前の人物が今の俺に関係するとは思えんしな。

「ハルちゃん。お姉ちゃんが来たよ」

「やつほ〜ハルちゃん。おおっパジャマ姿も、可愛いですよ」

セルニアが来たと言う事で、読んでいた本をたたむ。セルニアは若干非常識なところはあるが、一応命の恩人には違いないし、無視するのは失礼だからな。

「こんにちわ、セルニア。そっちは元気そうだな」

「うむうむ、可愛い女の子を一目見れば、お姉さんは一発で元気いっぱいになるからね」

こいつが言うと、冗談なのか本気なのか判断付かん。

「それで、今日は何の……はあ、いちいち頭をなでなくていいから」「えゝ？いいじゃん、いいじゃん。減るものじゃないでしょ？」

突然近寄ってきて、頭を撫で始めるセルニア。相変わらず遠慮が無いというか、こういうところが無ければ、きっと引く手数多だろうに。

改めてセルニアの容姿を見る。フォルをそのまま大人にしたような容姿だが、短髪ではなくポニーテールであるところが違いか。明るい雰囲気は、姉妹そろって変わらない。

……せっかくだから、冗談でも言い返してみるか。減るものじゃないとか言われたら、何かしら言い返すのが礼儀と言うものだろう。

「それでも無いぞ？髪の毛の耐久力が減るからな」

「！？」

いや、実際そんな訳は無いのだが、何故かセルニアはびくりと肩を震わせてその手を止めた。

……本気にしたのか？

「……冗談だ。でも、少しは遠慮を覚えてくれると、俺としてはありがたいんだがな」

「はあ、びくりした。まあ、ハルちゃんってば。お姉さんをあまりからかつちゃだめ」

そういつて強めに頭をぐりぐりとされた。ちよつと痛い。

「それで、今日は何の用事できたんだ？」

「んにゃ？お姉さんは特に用事は無いよ？あえて言うなら、ハルちゃんに会いに来たのだ」

「あらあら、ハルちゃんったらもうセリーちゃんとも仲良くなったのね。おねえさんは感激だわ」

セリーちゃんってセルニアのことか？うん……まあ、セルとかニアよりはマシか。それだと、どこぞの少年誌の登場キャラになってしまうしな。

それはともかく、ただ会いにきたって……セルニアは暇か？暇なのか？後、イセリナ。いちいち感激しなくて良い。別に俺はイセリナの子供というわけでは……。

あ、いや。一応、使い魔は召喚主にとっては子供のようなものに

なるのか。むう……イセリナが母親？何か頼りねえ気がするなあ。

「んっふふっ。お姉さんは、ハルちゃんの為なら毎日通いつめてもいいよ?」

「……要は、暇なのか?」

あ、空気が凍った。

「い、いやいやいやいや、ひ、暇ってどういうことカナ?どういうことカナ?お姉さんは、ハルちゃんの為に來てるのであって、そんな暇とかそういうわけじゃ」

「いや、毎日來るとか言ってる時点で、暇だろ。ひょっとして、仕事とかも無いのか?」

ピシッと、何かにひびが入った音が聞こえた気がした。

「そっそそそんにやことにやいよ?お、おお姉さん、ちゃんと仕事やってるし、報酬とかもちゃんともらって」

「ん?……ああ、そっか。定職に就いてる訳じゃなくて、報酬がつて事はセルニアは冒険者だったのか?」

他にもそういう職業があるのかもしれないが、俺が知ってる限りでは、その条件を満たす職業は冒険者ぐらいしかない。

「にやにや?!ハルちゃん、にやんで分かったの!?お姉さん、まだ何も言っていないのにっ」

「ああ、本当に冒険者だったのか」

ピキッとセルニアが凍りつく。……こいつって何か、自爆して喋ってはいけないこととか喋りそうなタイプだな。

「それで、冒険者のランクは？セルニアの年なら、DかCランクぐらいか？」

「……………ランクうなのお」

「悪い、聞こえなかった」

「……………Eい、ランクなのおっ！」

ちなみに冒険者は最低ランクがFで、そこまでなら一般人でもなるうと思えば簡単になれるのだそうだ。

そこからEランクやDランクになるのに、必要な平均日数は……いや、考えるまい。

「あゝ……………すまん、何か悪い事したな」

「あやまらないでえ……………おねゝさん、悲しく、なっちゃうからあ」

きつとまだ、冒険者になりたてなんだろう。うむ、俺がそう決めた。聞いてないし聞くつもりも無いけど、そう決めた。

落ち込むセルニアに、フォルが「おねゝちゃん、元気出して？」と慰める。実にいい姉妹だ。俺の妹も、あんな妹だったらなあ……………としみじみと頷く。

「でも、セリーちゃんってばもう1ね」

「それ以上喋るな、このあらあら女あつ!!」

余計なことを言いそうになったイセリナを、何とか阻む。これ以上セルニアを落ち込ませたら、再起不能になりかねん。

「んー確か、大体普通の人なら2ヶげ」

「黙ってるといってるだろうがあつ!!!!」

…… 本当に、フォローをするだけでも大変だわ。イセリナ、頼むから天然で場を引つ掻き回すのは止めてくれ。

これから先、この世界で生きていくことを考える。……主がこれで、本当に生き延びれるのか？俺。

突如湧き出てきた不安に対し、少し悩んだ後、考えるのを止める。
今更だな、こりゃ。

そんな不安なんぞ、それこそ初日から感じてしかるべきものだったんだし。いやそれもどうやって気はするが。

第7話 仮病の使い魔（後書き）

以上、倒れた主人公のその後についてでした。

第8話 使い魔の事情（前書き）

R 1 5 気味注意。

第8話 使い魔の事情

「えっへへっ」

ご機嫌な様子で、フォルが俺の髪の毛を弄る。

何でも、俺の髪の毛は手触りがいいらしい。まあ、確かにさらりとはしていると思うが。

「あんまり弄り回すなよ？さすがに、ぼさぼさにはしたくない」

「はい。えへへ」

分かってるんだか分かってないんだか。そのうち、「髪型変えさせて」とか言い出してきそうな気がするな。

……まあ、その時はその時に考えるか。俺自身は髪型とか良く分からんし。

「ねえハルちゃん。おねーさんにも、髪の毛触らせて欲しいな」

俺の髪の毛を嬉しそうに触るフォルを見て、羨ましく思ったのか、セルニアがそんなことを言い出した。

「……別にかまわんが、お守りにするとか言って、引っこ抜いたりするなよ？」

「そ、そそそんなこと、し、しないよ？シナイヨ？」

慌てるセルニアに、俺は冷たい視線をプレゼントする。あの慌て

方は、絶対引っこ抜くつもりだったんだろう。

「おねーちゃん、髪の毛引つ張ったりすると痛いよ？ハルちゃんにそんな事しちゃ、だめ」

フォルの非難の声に、さらに慌てるセルニア。ああ、やっぱり、セルニアよりもフォルのほうがしつかりしてるよなあ……。

衝動的にフォルの頭をなでたい気分には駆られたが、残念なことにフォルは俺の背後に居て実行には移せなかった。……って、何考えてんだ俺。危ない危ない。

「あああう。お姉ちゃんの信頼度が、どんどん下がっていつてる気がする今日この頃」

「そう思っんなら、少しは自重すればいいんだよ」

「ごもつともです。と肩を落とすセルニア。もつとも、元から信頼があつたのかも若干怪しいのだが。」

あんまりセルニアが落ち込んで居たので、髪の毛を一房ほど分けて貸し出すことにした。

そうしたら、物凄い喜んで触り始めた。……そこまで嬉しいものなのか？人の髪の毛に触れるのって。

「わあー、さらさらだねえ。羨ましいな、羨ましいな」

「うん。私もハルちゃんみたいに、こんなさらさらの髪の毛が欲しいな」

俺の髪の毛を羨ましげに弄くる姉妹を横目に、俺は再度本を読み

始めた。今読んでるのは、錬金術の入門書。

一通り必要そうな知識は手に入ったので、暇つぶしをかねて詳しく読んでいる。しかし、錬金術師を名乗るわりには入門用の本しか持っていないというのは、一体どういうことなんだか……。

そういえば、フォルはイセリナを師匠とか呼んでたな。そうなる
と、フォルも錬金術師を目指してるんだろうか？

ちらりとフォルを見る。満面の笑みで、俺の髪の毛に頬擦りをしていた。……錬金術の勉強とか、してなくてもいいのか？

そういえばイセリナはイセリナで、錬金術をやっているところなど見た覚えが無いし……この家、本当に大丈夫なのか？二人の様子からは、生活資金に困ってる様子は無いのだけど。

「あらあら、ハルちゃんの髪の毛触らせてもらってるのね。羨ましいわ」

そんなことを考えてると、ご本人が登場した。ちなみに、先ほど部屋の中を見てみた時は、熟睡中で起きる様子はなかった。

「あ、おはよう。お師匠様」

「おはようございます、イセリナさん」

「……おはよう、イセリナ」

「あらあら、おはようございます。みなさん」

相変わらずの天然っぷりを見せているイセリナ。最初に出会ったときと比べると、性格が変わってるようにすら見えるが、どうもこ

つちが素らしい。

……何故か興奮すると、ああなるらしい。それは、一度お風呂に連れ込まれたときに、骨の髄まで教え込まされた。

それ以降、俺はできる限りイセリナを刺激しないようにしている。暴走しなければ、ただのぼけっつとしたお姉さんだしな。

ふと、イセリナが物欲しそうな顔でこちらを見ているのに気づく。……またか。

「ふふふ、お姉さんにも、ハルちゃんの髪の毛触らせて欲しいな？」

「……別にかまわんが」

さすがに三人掛かりは、暑苦しくならんか？と思う。だが、イセリナは特に気にする様子も無く近づいてきて、俺の髪の毛を触りだした。

なでなで、さわさわ、わしゃわしゃ。

髪の毛を弄繰り回す音が聞こえる。さすがにちよつとウザったくなってきたが、下手に止めると今度は読書の邪魔をされかねないので、とりあえず放っておく。

三人も、さすがに髪の毛をぐしゃぐしゃにしたまま放置はしないだろうし。……多分。

「ねえ、ハルちゃんは使い魔になる前はどこで暮らしてたの？この

国で暮らしてたんじゃないよね?」

いい加減髪の毛を弄るだけでは飽きてきたのか、セルニアがそんなことを聞いてくる。

「異世界。日本と呼ばれてる国だな」

「へえ、そうなんだ。って、えええええ!?!異世界!?!?」

……うん。まあ本でも、異世界から使い魔として召喚された例はほとんど無いと書いてあったからな。イセリナは軽く流してくれたけど、やっぱり普通は驚くところだよな。

「え?じゃ、じゃあハルちゃんってば異世界人?あ、でもさでもさ、ハルちゃんが会話できるのは分かるけど、本だって読めるじゃん。何で?何で?」

使い魔は、使い魔となった時点で、主から会話するための能力を引き継ぐことが出来る。だが、呼び出された当初の俺がそうだったように、読み書きをする能力までは引き継がれない。

「それは知らん。気づいたら読めるようになってた」

「あらあら?ハルちゃん本を読めるのね。お姉さん、知らなかったわ」

……いや、もう本を読み始めてから数日たってるとかな?その間、

イセリナは何度が俺が本を読んでるの見たよな？

「えゝ？でも、ハルちゃんじゃなくても、私だってこの本読めるよゝ？」

「あ、いや、そうじゃなくってさ」

不思議そうな顔をするフォルに、セルニアが苦笑いする。

「ハルちゃんが異世界人……他の国から来たのなら、来て直ぐに本とか読めるのは不思議でしょ？不思議でしょ？」

「そうなの？ハルちゃんゝ」

「いや、俺普通に本読めてるし、知らん」

本当は読めるようになったきっかけがあるのだが、とてつもなく嫌な予感がするので黙っておく。具体的には、下手に言くと偶像的な何かに祭り上げられそんな感じがするのだ。

「むう……ひょっとして、同じ文字が使われてたとかカナ？でもそんな事、聞いたことも無いしねゝ」

「そもそも、異世界から来る例が少ないんだから、なんとも言えないんじゃない？読めるもんは読めるんだから、別にいいだろ」

なおも、むゝ。とうなるセルニア。……だが、ふと、その表情が暗くなっていく。

「でも、それじゃあハルちゃんって、大変なんだね。元の世界に返れないんでしょ？」

「ああ、そうだな」

異世界から使い魔として召喚された例。それは、ほんの数えられるほどしかない。

そして、すべての例において、召喚された使い魔は元の世界に帰ることなく、死亡していた。つまり、今のところ異世界から来て、無事に帰った例は、無い。

……そもそも、単独で異世界を渡る方法は、まだ確立されていない。使い魔として召喚される場合であっても、相当の偶然が重ならないと起きないことらしい。

つまり、今の俺には元の世界に戻る方法はない。どうしても戻りなければ、自力で方法を見つけるか、作り出さなければならない。

これらは、本が読めるようになってから、わりと直ぐに知ることが出来た。正直ショックが無かったとはいえないが、こっちに来た時点でそういうものだろうと思っていたので、比較的すぐに立ち直ることが出来た。

もちろん、まだ完全に吹っ切れたわけではない。目を閉じれば、両親や妹、幼馴染の姿が……………

何か別に、無理して帰る必要ない気もするな。うん。

「ハルちゃん……」

そんな俺の表情を勘違いしたのか、セルニアが俺をそつと抱きしめる。顔にやわらかい感触とふわりとした匂いを感じて……一氣に顔が熱を持ち、あわてて逃れようとする。

「怯えなくていいの、ハルちゃん。あたしは、絶対にハルちゃんの味方で居続けるから。絶対に、味方で居続けてあげるから」

「私も私もっ！私も、ハルちゃんとはずっと、ずっと友達だよ」

そういうと、今度はフォルがくつついてきた。力いっぱいぎゅつと抱きしめてくるので、ちょっと痛い。

色々と勘違いされてる気はするが、これ以上暴れると余計に心配されそうなので、とりあえず大人しくすることにする。まだ顔が火照ってるけど、何とか静める。

そんな俺に対して、安心させるかのように頭に手が乗せられる。

……う、む。頭を撫でられるのは、やっぱりその、恥ずかしいけど、別に嫌ではない。

「あらあら。みんなハルちゃんが大好きなのね。お姉さんも仲間に入れて欲しいな」

そんな中に、さらにイセリナがくつついてくる。さすがに暑苦しいし、恥ずかしい。

もがこうとすると、三人共がより力を込めて抱きしめてくる。動けばより苦しくなるだけだと判断し、俺はひとまず三人の気が収まるまで待つことにした。

こういうときによくある、息がふさがれるといったことが無くてよかったと、本気で思った。この状況で呼吸を止められてたら、たぶん俺は死んでいただろう。

異世界に住んでいたということは既に話したので、ついでに性別が変わっていることも話すことにした。

あまり人に言うことじゃない気もしたが、何となくこの三人には隠さない方がいい気がしたからだ。

「へえ、ハルちゃんは元々、男の子だったんだ」

「別に隠しても居なかったけどな。大体、この口調でそういうのって、気づかんか？」

「え？ いやあ、おねえさんギャップ萌え〜とか思ってたから、ぜんぜん」

……なんでこいつが、あのフォルの姉なんだ？

前々から思っていた疑問が、再度浮上する。ひょっとして、フォルも成長するとこんな風に……いや、止めよう。そんな未来は考えたくない。

というか、こいつ。俺が元男だと知ってもなお、相変わらず頭を撫で続けてくるし。

「なあ、セルニアは元男だなんて気持ち悪い。とか、思わないのか？」

「ほえ？ ぜんぜん。そんなの思っわけ無いじゃん。ハルちゃん、こんなに可愛いんだからさ」

そういつて、につこりと笑うセルニア。……頬が若干熱を持ったので、軽く顔をそらす。

「ハルちゃんが、男の子で女の子？ でもハルちゃん、女の子だよね？」

「あらあら、ハルちゃんって男の子でもあったのね。お姉さん、びっくりだわ」

そして目に付いたのは、頭からはてなマークを飛ばすフォルと、頬を染めてイヤンイヤンと顔を振るイセリナ。

……さて、フォルはともかく、イセリナは何を考えてるんだ？ 何か、やたらと熱い視線をこっちに……って、ちよつと待った、何故こっちに近づいてくる？ その行動には何か、嫌な予感がするのだが！？

ガバッ

突然、イセリナが俺を押し倒して来る。俺の頭を撫でていたセルニアが、イセリナの様子に驚いてその場から離れる。

「もう、ハルちゃんつてば、そんなに教えて欲しければ、最初っからそう言えばいいのに。大丈夫、お姉さんがじっくり教えてあげ・る♪」

ぞくりと、寒気が走った。

「だっ誰もそんな事言ってねえっ！！って言うか、何言っただ、何してんだこのバカッ！ちよっ離せ、マジで離せっ！！」

「うふふふふ、お姉さんがちゃんと脱がせてあげるから、心配しなくていいのよ？」

そんなことを言っつて、衣服を脱がせ始めるイセリナ。何とか抵抗するも、このままでは直ぐにでも剥がされてしまいそうだ。

「わっちよっちよ、イセリナさん！？いきなり何をっ！！あわわわわっ」

突然俺を襲いだしたイセリナを見て、セルニアがあわてだす。いや、いいからこいつを止めてくれっ！

「ふふふふ、あわてるハルちゃんつてば可愛い♪ちゅっ」

「ひゃっう……な、な、何をっ……やめっ」

「えっと、何やってるの？おししようさま。ハルちゃん、嫌がつてるよ？」

「うふふ、フォルちゃんにも教えてあげる♪ハルちゃんね、決し

て嫌がつてるわけじゃないのよ?」

「そうなの? ハルちゃん」

「その馬鹿の言うことを、真に受けるなっ! あっちょっ!?!? そこは止めっ!」

フォルでは止めれないようなので、セルニアに視線を送る。頼む、お前が最後の砦だ!

「あ、あうあう、その、えと。べ、勉強させていただきます!」

「こ、この裏切り者おおおおお!」

すべてが終わったあとには、ぐったりとして身動きの取れない俺と、肌に妙な艶を帯びたイセリナが残された。

うう……いつか仕返しを……覚えてやがれ。この変態めえ……。

「じゃあ次は、フォルちゃんとセリーちゃんがやる番ね。お姉さんがお手本を見せたんだから、大丈夫でしょ?」

……マテ、今とんでもない爆弾発言が聞こえたんだが? 真に受けたりしないよな、二人とも?

一縷の望みをかけて、二人に視線を送る。……二人は、顔を真っ赤にして……。

こくりと頷いた。

絶望に揺れる視界。ゆつくりと近づいてくる足音を聞きながら、俺はこういつとときに良く使われる言葉を思い出していた。

どうして……こうなった……ぐすつ。

第8話 使い魔の事情（後書き）

直接的な描写はほとんどありませんが、念のためにR15。

これくらいなら、別にR15のタグは無くても良いかもしれませんね。もし期待した方がいらっしゃったら申し訳ありません。

相変わらず、話は中々進みません。

第9話 深まる絆と少女の笑顔

「え、え〜っと……ハルちゃん、いい加減機嫌直して欲しいな〜、何て思ったり」

「……………」

顔を覗き込もうとするセルニアを、涙目のまま一睨みして顔をそむける。

「あ、あら〜、本気で怒らせちゃったかしら〜？」

若干動揺した様子のイセリナ。当たり前だ。あんなことして、怒らないほうがおかしい。

「ハルちゃん、何でそんなに怒ってるの？あの時のハルちゃん、とっても可愛かったのに……」

フォル。君は、そういうことを知るには、まだちょっと早いんじゃないかな？とりあえず教えたイセリナ、いっぺん地獄で反省して来い。

あれから一日、未だに俺は三人を許す気にはなれなかった。と言うか、下手に許したりすると絶対常態化する（特にフォル）ので、簡単に許すわけには行かないのだ。

本当に酷い目にあつた。最終的には気絶してしまい、朝起きたときには体中が筋肉痛になってしまっていたのだから、どれだけ……その、激し、その……な、なんでもないっ。

と、とにかく！起きて直ぐに昨日の事を思い出し、赤面している最中に突然抱きついてきたイセリナを全力で振りほどき、集まってきた三人を威嚇して、この状況となったのである。

「ほ、本当〴〵にごめんっ！！いくらハルちゃんが可愛いからって、手を出したりしちゃ駄目だよ！ダメだったよね！」
「……………」

謝るセルニアを、涙目のまま全力で睨み付ける。最初の出来事に加えて今回のことなので、謝られた程度で警戒を解くつもりなんてさらさら無い。

大体、今の俺の体は、まだ10歳ぐらいの女の子のはずなのだ。それを無理やり……その……ああもうつ！

「ふかー！ーっ！ー！」

突然威嚇しだした俺に、三人が目丸くする。怒りとか恥ずかしさとか悔しさとか、その他もろもろの感情があふれて暴走してるのが分かる。

……暴走してるって、分かっても制御なんてしない。出来ない。三人とも、暫く反省してればいいんだ！もうっ！知らないっ！！

そんな感じで暫く威嚇したりしていると、ようやくフォルも、俺が昨日のことで怒っているのだと気づいたようだ。俺に対して悲しげな表情を浮かべて何度も謝り、イセリナに非難の目を向け始めるようになってきた。

「あ、あらあら？フォルちゃんまでそんな目をしなくても。だって、その、あの時のハルちゃん、本当に可愛かったじゃないの〜」
「お師匠様っ！ハルちゃんは今、本気で傷ついてるんだよ！？本気で怒ってるんだよ！？本当に可愛くても、我慢できないくらい可愛くても、ハルちゃんを傷つけたりしちゃ駄目なの！！」

……うん、フォル。そのイセリナを説教してくれるのはとても嬉しい。でもその可愛いというのを強調するのは、あまり嬉しくないかなあ……。

「あ、あらあら〜。その、セリーちゃんなら、分かってくれるわよね〜？セリーちゃんは、あの時物凄く乗気だったのですから〜」
「え？うえええ！？いや、そのつすごく可愛かったし、幸せな時間でしたけど……ここまで怒られるのなら、しないほうがいいかなって」

セルニアも、イセリナの意見を否定するのはいいんだが、その言葉は聞き捨てならん。やっぱこいつに対しての警戒は、解くべきじゃないな。

孤立無援となつて対応に窮したイセリナが、こつちを向いて愛想笑いをする。とりあえず、上目遣いで睨み返すことにする。

「はうつ……こ、これは……理性が、我慢が出来ないわ」

「お師匠様、ダメっ！！今、これ以上ハルちゃんを傷つけたりしたら、たとえお師匠様でも本当に怒るから！！」

「だ、ダメですイセリナさんっ！！今手を出したりしちゃったら、ハルちゃんに本当に愛想を付かされちゃいますよ！？」

俺に近づこうとしたイセリナを、フォルとセルニアが押し留める。

……イセリナ、お前絶対に反省して無いよな？

「ふ、ふふ、無駄よ。ハルちゃんの前ではたとえ二人掛かりでも、私を止めることは出来ないの。さあ、ハルちゃん。私の手で再度鳴き声を！！」

押し留めようとする二人を引きずって、イセリナがこちらに駆け出す。……ふ、ふふ、はははははははは

「いい加減にしろっ！！この変態女あつ！！！！」

二人を引きずったまま駆け寄ってきた変態女の顎に、俺の全身の力を込めたアッパーが炸裂する。両腕を封じられ、理性を失つていた変態女はその衝撃をモロに食らい……

引きずっていたフォルとセルニアを巻き込みつつ、その場に倒れこんで気絶した。

朝食……は、結局ごたごたで食べ損なってしまったので、昼食。
俺のアップパーによる気絶から目が覚めたイセリナは、ようやく頭が冷えて来たのか平謝りで謝ってきた。

……正直怒りは収まってないのだが、とりあえず許すことにした。
いつまでも怒っていてもしようがないし、何より養ってもらってる身だからというのもある。

「いやあ、何か悪いですね。私まで食べさせてもらっちゃって」
「あらあら、いいのよ？セリーちゃんは、フォルちゃんのお姉さんなんですから」

何故か、セルニアも一緒に昼食を食べることになった。なんでも、セルニアは普段は外で食べているらしい。

「あ、イセリナさんのお料理おいしいわあ。毎日食べれるフォルやハルちゃん、羨まし」

「ん？料理なら、確かフォルも手伝ってるんじゃないか？」

「うええ！？……そ、そうなの？そうなの？？」

「うん。お師匠様に、教えてもらったの」

ニコニコと笑顔で答えるフォル。それを見て、セルニアの顔色が徐々に悪くなっていく。

「……ああ、セルニアも料理が苦手なのか」

「うつ！？……そ、そうですよ、苦手ですよ。おね〜さんが作る料理は不味いって、近所では評判なんですよ〜」

「……まだ食べれるだけマシだろ。俺が作ろうとしたら、紛れも無い炭が出来たんだぞ。」

「おね〜ちゃんもハルちゃんも、ちゃんとお料理の勉強すれば、きっと直ぐに作れるようになるよ〜？」

「ふふふ、おね〜さんは……ってあれ？ハルちゃんも、料理は苦手なん？」

「ああ、以前二人にねだられて作ったら、炭が出来た」

俺の言葉にセルニアがばあ、と明るい表情を浮かべる。ちよつとマテ、何だその嬉しそうな顔は。

「おお、意外だけど意外でもないような、とにかく心の友よ、こんなところに居たのかあ〜」

「くつつこつとするな。蹴り飛ばすぞ」

両手を広げて迫ろうとしたセルニアを、威嚇する。拒絶されたセルニアが、暗い表情を見せた。

「はうう……まだまだ、おね〜さんが信頼を取り戻すのは、難しいですよ〜？」

「あ、あらあら〜。本気で嫌われちゃったかしら〜？」

セルニアがイセリナに助けを請い、助けを請われたイセリナが冷や汗をたらす。

「……別に、嫌ってはいねえよ。……抱きついたり、触って欲しくないだけで」

「うっ」

「あら」

俺の言葉に、さらに冷や汗を流す二人。まあ、しばらく反省するまでは、絶対に触れさせるつもりは無い。

「……ハルちゃん。ハルちゃんに触っちゃ、ダメなの？」

俺達のやり取りを見て不安になったのか、悲しげな表情でそう尋ねてくるフォル。……むう、さすがにフォルは……そうだな、単に知らなかったただけだしな。

「フォルちゃんはいいよ。でも、昨日のような変なことは、絶対にしたらダメだからな？」

「うん！ありがとうございます！！ハルちゃん！！」

食事中にもかかわらず、抱きついてくるフォル。俺はしょうがないと頭を掻き、フォルの頭を撫でることにした。

「えへへ、ありがとうございますハルちゃん」

「べ、別に礼を言われることなんて、して……ねえよ」

そういつて、赤くなってしまったであろう頬を隠すために顔をそらす。

その、これは何となく、撫でたくなってしまうたから撫でたつて言うだけだし。……撫でたくなつたのは、俺の意思なんだから。

「うう……うらやましいなあフォル。おねーさんも頭を撫でて欲しいよ」

「あらあら、ハルちゃんの手を撫でるのもいいけど、ハルちゃんに頭を撫でられるのも、気持ちよさそうでいいわね」

外野の二人が何か言っていたが、無視する。

「そういえば、明後日にはハルちゃん、お外に出てもいいんだよね？」

「ん？ああ、そうだな」

もうそろそろ大丈夫な気もしていたのだが、あまり無理をして、また倒れたりする訳には行かない。

……昨日も、誰かさんのお陰で気絶したわけだしな。今日明日は、ゆっくりと休んで十分体力を回復しておきたい。その間に、筋肉痛も治るだろうし。

「じゃあ、明後日はみんなで森に採取に行こうよ。お師匠様もずっと家に居るし、おねーちゃんも暇なんだし」

「あら、それは素敵ね」

「ぐっ！？フォ、フォル？お、お姉ちゃんは別に、暇だと言っわけじゃあなくてね？」

「え？お姉ちゃん、一緒に来れないの？ダメなの？」

「ぐうっ！……い、行きます行きます行かせてください！！望むところです、依頼なんてやってられるかっ！！」

「いや、依頼は受けてるんならちゃんとやれよ」

とりあえず、冷静に突っ込んでみる。確か冒険者は、一度受けた依頼を破棄するとギルドからのペナルティが加わるはずである。

「だいじょぶだいじょぶ。まだ今回の依頼は、依頼人との契約まで行っていないしさ。破棄してもまだ違約金も出ないレベルよん」

いや、それでもランクに関わるギルドポイントに対して、ペナルティが発生するはずなんだが……？

……ああ、そういうことか。こういうことを繰り返してるから、未だにランクがEなわけね。

「あのう、ハルちゃん。何かおねえさんを呆れるような目で見てきてないかな？見てきてないかな？」

「ん？別に、ある一つの疑問が解決しただけだから、気にするな」

「ぬう……おねえさんが関わってそうない気がするんだけど……何か聞かないほうがいい気がするから聞かないで okay」

大正解。聞いたら確実に、セルニアは落ち込むだろうしな。

思わず口元に浮かびそうになった笑みを、手で隠す。フォルがセルニアと俺を交互に見て首をかしげた。いかにいかに、あまりセルニアをいじめててもしょうがない。

「そうね、それじゃあ明後日、みんなでお弁当を持っていこうかしら」

「賛成」。私、ハルちゃんの分も頑張って作るね」

「ぬぬ……お弁当かあ、あたしだけ携帯食料はちよっと嫌だし、どこで作ってもらうかな」

三人が明後日の相談を始める、ふと、まだ俺が答えていないことに気づいたのか、フォルが不安そうな顔をこちらに向けた。

「ハルちゃん、ハルちゃんも一緒に来てくれるよね？」

「……フォルちゃんの頼みなら、断らないよ」

別に断る理由ももう無いし、今までの分フォルに付き合うのも悪くない。

「えっへへ、ありがとう、ハルちゃん」

余程嬉しかったのか、会心の笑みを浮かべるフォル。それを真正面から見てしまい、俺は思わず赤面して顔を伏せてしまった。

「はれ？どうしたの？ハルちゃん。何か顔、赤くなってるよ？」
「な、なんでもない、なんでもないよ。ちゃんと行くから、よろしくな」

少し心配そうなフォルに、何とか顔を見せて笑いかける。フォルもそれに安心して、また満面の笑みを返してくれた。

「はあ……か、かわいいわあ。ほんとハルちゃんってば可愛いわあ」

「……顔を赤く染めて、うつむき加減に笑うハルちゃん……た、たまらん、可愛すぎなのですよお」

……とりあえず、大人二人は少しは自重しろ。頼むから。

第9話 深まる絆と少女の笑顔（後書き）

大人組み二人がちつとも自重しません。

怒って笑って……頭を撫でて、子供組みは仲良くなっていっています。

次回は、少しは話が進むと思います。

第10話 トレイアの森にて

「これっくらいの♪おべんとばっこに♪」

「おにぎり♪おにぎり♪ちよいっつとつめて♪」

「歌のタイミング、明らかにずれてるぞ」

歌を歌いながら、ノリノリでお弁当を作るフォルとイセリナ。フォルはともかく、イセリナはのんびりと歌うものだから、タイミングが物凄くずれてしまっている。

いやまあ、それ以前にこの歌が異世界でも聞けるとは思わなかったが。いったいどこから伝わったんだ？いや、むしろまったく同じ歌詞が作られただけか。音程は全然違ってたし。

「あらあら、いいじゃないですか。こういうのは、雰囲気を楽しむものなんですから」

「そうなのか？……まあ、いいか」

個人的には、こういうのはきっちり綺麗にあわせてこそだと思うのだが……まあ、カラオケと同じようなものか。あれは、音程がずれてても歌詞を忘れてても、楽しめれば問題ないからな。

「えへへ、ハルちゃんも歌う？」

「あらあら、それはとっても素敵な提案ね」

……とか考えていたら、何やらこっちに飛び火してきた。

「え？いや、俺は二人を見てるだけだし、それに俺、歌なんてあんまり上手じゃないし……」

「上手とか下手とか、そんなの私も気にしてないよ？それに、ハルちゃん声すつごく綺麗だから、きつと歌もすつごく綺麗だと思うの」

「う……」

ストレートなほめ言葉に、顔が赤面していくのが分かる。フォルは多分、成長したら天然の女殺しに……あれ？違うか、男殺しに……って、本当になりそうだな。

「で、でも……恥ずかしいし」

「大丈夫だよ、恥ずかしがらなくてもいいの。私も、お師匠様も、ぜえったい、ハルちゃんの歌を笑ったりしないからっ」

……うう、きらきらとしたフォルの笑顔がまぶしい。

「で、でもっ俺、歌の音程とか良く知らないしっ」

「大丈夫だよ、そんなの、私も良く知らないんだから……ね？良いでしょ？」

あれ？そうなんだ？ってまあ、こちらに来てから歌なんてほとんど聞いた事無かったから、実際どうなのかは知らんのだけ。

「ほら、歌って歌って？」

「う……し、しょうがないな。どんなに下手でも、本当に笑うなよ？」

何を歌うか少し迷ったが、さっきフォル達が歌っていた歌にした。音程はぜんぜん違うけど、歌詞は同じだからフォル達も分かると思うし。

俺が歌い始めたたん、お弁当を作っていた二人の動きがぴたと止まる。二人とも歌いながらお弁当を作ってたのに、そんなに俺の歌が変……だったのか？

そして、二人ともまるで信じられないものを見たかのような目でこちらを見る。う……やっぱり音程がここまで違つたと変に聞こえるらしい。

急にすごく恥ずかしくなつてきて、歌が途切れる。火照つた顔を見せたくなくて、顔をうつむかせる。

しばらく、その場に沈黙が流れた。……これ、生殺しだよね？お願いだから、だ、誰か何か喋つて！？

「すっごい……」

震えるようなフォルの声に、俺ははじかれたように顔を上げる。

……何か、すっごいきらきとした目でこつちを見ていた。

「すっごい綺麗だし、上手！ハルちゃん、すごく歌が上手だよ！」

そう言つて、興奮したのかぴよんぴよんと跳ね回るフォル。いや、分かつたからお弁当作つてる最中にそんな暴れまわるな。イセリナも止め……。

「ぐすつ……おねーさん、不覚にも感動しちゃったわー」

……えつと、イセリナさん？何ゆえそんな、涙ぐんでいらつしやるのですか？今歌った俺の歌に、涙を流す要素は含まれて無いはずなのですか？

あまりの光景に若干混乱する。つか本当に、お弁当を作る歌で何故泣ける？どこに泣く要素があつた？

その後、何とか二人を落ち着かせるも、二人にねだられて何度か歌わされる羽目になってしまった。そのせいで出発が若干遅くなつてしまったのだが……まあ、二人とも喜んでいるんだし、別にいいか。

……あ、セルニアのこと忘れてた。

「うう、羨まし。何でおねーさんが居ないときに限って、そんな楽しそうなことをしてるのカナ？してるのカナ？」

「そんなこといわれてもな……あ、今日はもう歌う気は無いからな」「っ！？ガーン……」

俺の歌わない宣言に、本気で落ち込むセルニア。さすがに疲れたし、どうもまだ体が歌うのに慣れてないのか、先ほどから喉の調子が若干おかしいのだ。

普通に喋る分には問題ないが、歌を歌うには少し厳しい。あまり無理をして喉を潰したくは無いし。

「おねーさんも聞きたかった、聞きたかったよー」

「はいはい、また今度機会があつたらな」

「え？本当！？」

セルニアが、勢い良くこちらに振り返る。……何か今、ゴキッて音がしたぞ？

「ふぉぁぁぁあつ！？く、首がっ首があつ」

「お、おねーちゃん大丈夫！？」

「何やってんだか……おい、大丈夫なのか？」

首を押さえてうずくまるセルニアに、フォルが駆け寄る。さすがに、首を痛めたというのは若干心配だ。

「ったた……はっ！そうだ、ハルちゃんが撫でてくれたら治るかも！？」

「……寝言言ってる余裕があるなら、大丈夫だな」

心配して損した。

「あ、あれえ？おねーさん痛がつてるのに、何でハルちゃんの視線が冷たいんだろう？」

「本当に理由が分からんのか？」

「あ、あははは……」

笑ってごまかせるとでも思ったのか。まったく……。

どうにもあれからセルニアは、理由を付けては俺から触らせようとしているようだ。

触らせてもらえなきゃ触ってもらえばいい、と言う逆転の発想。

でも、俺に気づかれてたら意味無いだろ、それ。

「あらあら、私も首を痛めたほうがいいのかしら？」

「やめる。もしやったとしても、絶対にそのまま放置してやるからな」

……セルニアだけじゃなくて、イセリアもかよ。つか、触らせるためにわざと怪我するとか、アホなのか？コイツは。

「とうちやくく」

嬉しそうなフォルの声が、森に響く。その声に驚いたのか、木の上に居た鳥達が、ばさばさと音を立てて飛び立った。

うつすらと霧の漂うトレイアの森。以前フォルと一緒に来た場所だが、今回は目的が違う。

「今日は採取をしに来たんだから、もうちょっと奥まで進まないかね」

「ああ、……確か、狼とかが出るんだったか？」

「んっふふ、ハルちゃん狼が怖いのかな？大丈夫。ハルちゃんはおねーさんがちゃんと守ってあげるからねん」

まあ、狼が怖いって言うか、俺じゃ魔獣どころかそこらの動物にすら、勝ち目が無いだろうからなあ。

「ハルちゃんハルちゃん、私もハルちゃんのことちゃんと守るから、大丈夫だよ?」

「あ、ああ。って、フォルちゃんは大丈夫なのか?」

「ありよ?知らないん?フォルは下手な冒険者よりもよっぽど強いんよ?」

……マジか。

「えへへ、狼くらいなら、私が簡単にやつつけちゃうから」

「そ、そうか。ってことは、俺だけがまともに戦ったりすることが出来ないのか……」

ん?まだイセリナが居るって?フォルとセルニア、二人掛かりでも抑えきれないような奴が、まともに戦闘をできないとでも?

それに、イセリナはある程度魔法を使えるはずだし。使えなければ、使い魔を召喚などできないはずだからな。

いやしかし、主に守られる使い魔って言うのもどうなんだ?俺の体格ではとても接近戦には向いているように思えないし、魔法……一応俺は使い魔だから、使い方を学ぶことが出来れば、使えるのか? ……

「なんらかの方法を考える必要があるな」

俺の呟きがかすかに聞こえたのか、フォルが不思議そうに首を傾げる。

「さ、行くぞ。せつかく採取しに来たんだから、何かは見つけないとな」

「うん！」

俺の言葉に、フォルが笑顔で頷いて駆け出す。残された俺達は軽く苦笑いをして、フォルの後を追いかけた。

森の中に、うつすらと漂う霧。初めは大したことは無いと思っていたのだが、気づかないうちに周囲が見通せない程度には濃くなってきた。

「ちょっと霧が濃くなってきたね。みんな、いったん集まろっか」
「うん！ハルちゃん、こっちに来て〜！」

声が聞こえる範囲なら、まだ大丈夫じゃないのか？と思ったが、それで何かあってからでは遅いか。

一度倒れた身としては無茶はしないほうが良いな……と、俺は声のする方向へと歩き出す。

……おかしい。

確かに俺は、声のした方向へと進んでいるはずだ。それなのに、いくら進んでも三人の姿が見えてこない。

それどころか、先ほどまで聞こえていた三人の声が聞こえなくなっている……？

俺の思考に、若干の焦りが生まれる。トレイアの森はそれなりに規模があり、一度迷ってしまうと簡単には出れそうにない。

それに……何よりトレイアの森の奥地は、危険地帯なのだ。もしも……もしも、俺が今迷っていて、奥地へと進んでいたとしたら……

ガサツ

顔から、一気に血の気が引いたのが分かった。目の前の茂みが動く音、ただそれだけ、ただそれだけの音に……俺は、とてつもない恐怖を感じた。

狼か熊か、はたまたそれ以外の何か。たとえ何であっても、今の俺が出会ってしまったえば、命の保証は無い。

震えだした足に力を込める。その場から離れようと、何とか一歩を踏み出す。

「あつ」

だが、たった一歩を踏み出すだけで、俺はバランスを崩してしりもちをついてしまった。腕も、足も、ガクガクに震えて立ち上がることも出来ない！

「う……そ……」

やがて、茂みの中から狩人が姿を見せる。その特徴を、俺は本で見たことがある。

純白に黒の縞模様が特徴の魔獣。鋭い爪と牙を持ち、人間に限らず、多くの生き物達に恐れられる存在。

別名を『聖域の守護者』。森の聖域に住み、聖域を荒らす人間を容赦なく食い殺す……白い猛虎。

「ホワイト、タイガー……」

トレイアの森にて、最も出会ってはいけない魔獣の一つ。

出会えば、逃げることにすら難しいとされるその魔獣。その眼が、何とかその場から逃げ出そうとする俺を捉える。

「ひっ」

たったそれだけで、体中が硬直して動けなくなる。身動きができない俺に、その魔獣はゆっくりと近づいてきて……

その口が、俺に向けてゆっくりと開かれた。

第11話 隣人達の実力

俺は、恐怖で悲鳴を上げることすら出来なかった。

ただただ眼を閉じ、身を竦めて、これから襲い掛かるだろう痛みや衝撃を待つ。

フォルやセルニア、イセリナの顔が次々と浮かぶ。三人は無事だろうか？ひよつとしたら、居なくなってしまった俺のことを心配しているかもしれない。

両親や妹、幼馴染の顔が浮かぶ。妹はともかくとして、何も幼馴染の顔がこんなときに思い浮かばなくても……。

まだ、この世界に来てからそんなに時間はたつてない。日付にして約一週間ちよつと。たったそれだけで、俺は死ぬのか。

元の世界でもまだやりたいことは……あ、いや、ぶっちゃけ俺のやりたいことって、大抵幼馴染に邪魔されそうな気はするけど、まだまだ生きていたかったという気持ちはある。

こんなところで、俺は死ぬのか……。

絶望と若干の後悔が俺の心を渦巻く。あの時、もう少し三人のそばに居れば、三人からはぐれることも無かったのかもしれない。

……………。

「あ、あれ……？」

どれだけ待っても何も起きない、不審に思つて、勇気を出してかすかに目を開ける。

実は1秒がすごく長い時間に感じられるだけであつて、目の前に魔獣の口があつたりしたら嫌だな……とか思っていたのだが。

目の前の白い虎は、俺の少し前であくびをしていた。

「え？は？何で！？」

呆然とする俺を尻目に、白い虎があくびを終える。そのまま襲ってくるのかと思いきや、その白い虎はその場に伏せ、ついには寝転び出してしまった。

「えーつと……」

思わぬ平和な光景に思考が停止する。つて言うか、凶暴なんだよね？出会った人を無慈悲に食い荒らすんだよね？何で、この白い虎さんは俺の目の前で寝ところがつてんの？

訳が分からないが、とりあえず俺に害意は無いってことで、良いのか？いや、害意を持っていたら、目の前で無防備な姿をさらしたりはしない……と思うけど。

ひとまず、その場を離れようと手足に力を入れる。が、恐怖で完全に腰が抜けてしまっており、立ち上がることも出来ない。

「ぬ……くう……だ、だめかぁ」

しょうがないので、力が入るようになるまでここで休憩することにした。気が変わって、襲ってきたりしないよな……とか思ったが、目の前の白い虎は特にそんな様子は見せなかった。

「よっ……いしょっ……」

しばらく休憩した後、俺は何とか木を支えにして立ち上がった。まだ少しふらつくが、歩けないことは無い。

それを待っていたといわんばかりに、白い虎も体を起こす。今更襲うのか！？とか一瞬考えたが、どうやら違うらしい。

白い虎が、俺から背を向けて歩き出す。しばらく眺めていると、歩みを止めてこちらに振り返った。

「ええっと……付いて来いって、ことか？」

敵意が無いことは分かっているけど、怖いものは怖い。正直、白い虎のそばを歩くのには抵抗がある。あるのだが……。

だからといって、適当に歩き回って森を出れるとも思えない。たまたまこの白い虎は敵意は無かったが、他の魔獣に襲われない保障

など、どこにも無いのだ。

仕方ないので、白い虎について歩き出す。それを見て満足したのか、白い虎も再度歩き始める。

仮にもこの森を住処としてるんだから、もつと早く歩けるはずなのだが……俺に歩調を合わせるかのように、その速度は遅い。

俺って、動物とか魔獣とかに好かれるような体質……なのか？あ、ひょっとして人型でも使い魔だから、襲われずに済んでる……とか？

いくつか理由を考えるも、結局なぜこうなってるのかは分からない。無駄な思考に陥った頭を振って、とりあえずその白い虎に付いていくことにした。

しばらく進んでいくと、急に前の白い虎が歩みを止めた。何かあるのか？と俺も足を止める。

すると白い虎はこちらを振り返り、首を振る。……動作を見るに、先に進めと言ってるように見える。

待っていても動く様子は無いので、白い虎の前に進み出る。あたりにはまだ霧が残っており、ちゃんと前を進めている自信は無いのだが……。

軽く振り返ると、白い虎が俺に視線を合わせたままじっとしているのが見えた。……まあ、今更襲ってくるとは思ってないけど。

少し不安に思いながらも、霧に包まれた森の中を進む。すると、何か怒声のようなものが聞こえてきた。

それとともに漂ってくる、血の匂い。嫌な予感を感じて、その方

向へと駆け出す。

「フォルちゃん！？セルニア！？イセリナ！？」

ようやく姿が見えてきて、俺は三人の名を叫ぶ。良く見ると、三人共大勢の狼に囲まれている。

俺の声に気づいたのか、狼に囲まれた三人が、いつせいにこちらを向く。

「は、ハルちゃん！？だめ、今はこっちに来ちゃダメだよっ！！」

「だめよハルちゃん！今すぐそこから逃げてっ！！」

フォルとセルニアがそう叫ぶのと同時に、狼達が一斉にこちらを向く。忘れていた恐怖心が、一気によみがえった。

「ひっ！！？」

たとえ狼でも、この数に一気に襲われればひとたまりも無い。俺は再度恐怖に目を閉じ、死ぬことを覚悟した。

「あ、あれ？」

だが、そんな俺の覚悟が、セルニアの間の抜けた声に碎かれる。ゆっくりと目を開けると、そこには散り散りになって、その場を離れていく狼達の姿。

「た、助かった……のか？」

腰が抜けてその場にへたり込む。今日はこれで二度目か……と、自分の情けなさが恥ずかしくなる。

「ハルちゃん！大丈夫！？怪我は無い？！」

あわててフォルが駆け寄ってくる。フォルのほうで、狼に囲まれたりしてて怪我をしたのでは思ったが、特にそんな様子は無い。

「大丈夫、怪我とかはしてないから……ちょっと、腰は抜けたけど」「そっか、よかったあ……ハルちゃんが怪我とかしてたら、どうしようかと思ったよ」

そういつて、ぎゅっと抱きしめてくるフォル。心配してくれて嬉しいやら心配させてしまつて申し訳ないやら、複雑な気持ちになつてしまふ。

「本当よ、ハルちゃんつてば、一人で居なくなっちゃうもんだから……本当に心配だつたんだよ」

「ハルちゃんが居なくなつて直ぐに、狼さんたちがたくさん出てきてしまつて、囲まれてしまつたのですわ」

……は？

「俺がいなくなつて直ぐに、狼に囲まれたのか……？」

「そうそう、おねーさんはもう焦つたよ。直ぐにハルちゃん探さなきゃいけないのに、どんどん狼が集まつて来るしさあ」

周りを見渡すと、結構な数の狼の死骸が転がっていた。……なんていうか、三人共実は結構強いんだな。

「でも、ハルちゃんが無事でよかったわ」

「うんうん、ハルちゃんが怪我なんてしたら、大変だもん」

「いや、俺からすれば、あれだけの狼に囲まれても三人共怪我をしなかったことに、安心したいんだが？」

周りを見る限り、結構激しい戦闘だったみたいだし。

「もう、ハルちゃんってば。私が狼相手に、怪我なんてするわけ無いでしょ？」

「……は？」

「そうそう、フォルにあたしにイセリナさんまで居て、狼相手に怪我とか。さすがに恥ずかしいよ？」

「……へ？」

「お姉ちゃんってば。あれくらいなら、私一人でも怪我なしで倒せるよ？」

「………」

訂正、俺の周りには、中々の化け物がそろっているようだ。たとえ狼であっても囲まれて無傷って、どれだけ力の差があるんだよ。

「二人とも張りきっちゃって、お姉さんが出る幕がなかったわ」

「いや、イセリナさんがやる気だすと森に被害が出るし。そうなるのと、一緒に居たあたしが怒られるんよ」

「あらあら？ 私も、ちゃんと手加減くらいはするわよ？」

「イセリナさんは以前、手加減で平原の一角にクレーターつくったつしよ。だめだめ」

「あら」

……イセリナに至っては、どうやら相当の化け物らしい。ってか手加減でクレーターを作るってどんなんだよ。

「ハルちゃん、今日は疲れたでしょ。あまり採取できてないけど、今日は帰ろ？」

「……そうだな」

色々なことがあつたし、二度も恐怖で腰を抜かしてしまって、正直疲れた。

なんていうか、俺の情けなさが際立つてる気がする。い、良いんだよっイセリナが強いって分かったんだし、俺は非戦闘要員でもいいのっ。

とか、言つてられないよなあ……仮にも使い魔なんだから。とりあえず家に戻ったら、剣術か魔法を教えてもらうようにお願いしてみるか。

そんなことを考えながら、イセリナとセルニアに目を向けると……腰が抜けてしまった俺をどちらが背負うかで、本気でじゃんけんをしていた。まあ、今回は仕方ないか。

ちなみに勝つたのはイセリナだった。

「うふふふ、ハルちゃんの温もりが心地良いわ」
「くう、くやしいっ次は絶対勝つんだからっ！」

第11話 隣人達の実力（後書き）

ズコーは控えめをお願いします。

と言うわけで、イセリナ達の救出劇や覚醒したチート主人公による戦闘シーンを期待した方、申し訳ありません。

この小説の大体の方向性は、この1話で解るかと思われます。つまり、今後も戦闘シーンはあまり期待できません。

ほのぼのやコメディ中心でシリアスは控えめ、今後も変態ちっくな人たちが主人公を中心にして騒ぎ立てる。

そんな作品ですが、それでもよろしければ、これからも読んでいただけると幸いです。

第12話 平和な街での平和な一時

あれから数日。

俺は夕食や雑貨の買い物のため、街へと出かけていた。ある程度の店の位置も既に覚えたので、特に付き添いなどは居ない。

既に俺はイセリナの使い魔として、街の人たちにも知られるようになっていた。

……それはいいんだが、挨拶や買い物に行く先々で、みんなが俺の頭を撫でようとするのは何故なんだ？拒否しようとする、一様に残念そうな顔を見せてくるし。

答えの出ない疑問に頭をひねりながら、道を歩く。この街は治安が良いらしく、よほど裏路地でも歩かない限りは警戒する必要はない。

……一度だけ、ガラの悪い男に絡まれたことがあったんだが、何故か近くに居たおっちゃんおばちゃん達が、総出で追い払ってくれた。包丁やら鉈やらを振り回して男を追い回すと言う光景は、若干怖いものがあつたのだが……。

そういつた事もあつたからだろうか、それ以来街中でトラブルに巻き込まれたことは無い。街の人たちには感謝しておくべきかな。

「いらつしゃい、おつハル坊じゃねえか。今日も買い物か？」

「おやつさん、今日も元気そうだな。今日も俺は買い物だよ。何せイセリナ達が、俺一人では街の外に出してくれないし」

「そりゃあたりめえよ。おめえさんが弱いし、こんだけ可愛いんだから、一人で街の外なんかに出たら直ぐにさらわれちゃうだろ」

がっはっは、と豪快に笑うおやつさん。このおやつさんは食料品店の店主で、いつも食料を買うときにお世話になっている人だ。

見た目どおり力強く、豪胆な性格をしている。街の人たちで俺の口調を気にせず笑ってくれるのは、このおやつさんを含めて数人ほどだ。

「俺だって、剣術とか魔法とか覚えれば大丈夫だと思うんだがなあ……」

「そりゃ〜難しいんじゃないかな。フォル坊やセルニア嬢ちゃんは反対してんだろ？イセリナ先生も、魔法は教えないって話だしよ」

おやつさんの言うとおり、初めはフォルやセルニアに剣術を……と思ったのだが、二人に猛反対されてしまったのだ。曰く、『ハルちゃんが剣で戦うなんて信じられない』だそうで。

ならば、とイセリナに魔法を教えてもらおうとしたら、今度は教えるのは苦手と答えられてしまった。イセリナ本人は魔法を使うことが出来るのだが、使うのと教えるのではやはり大きな差があるのかも知れない。

かといって、街の外にあると言う魔法学園に通う訳にも行かない。学費がどれだけ掛かるのかも知らないし、入学時期も過ぎてしまっているそうだ。……簡単に転入って訳にもいかないだろうしなあ。あまり、イセリナの近くからは離れられないって言うのもあるけど。

そんな訳で、俺自身の戦力強化策は出だしからつまづいてしまっていた。

身の安全を確保出来ないまま、街の外に出るわけには行かず。街

の外に出るときは必ず、三人のうちの一人と一緒に出ることに
なっている。

だが、いつまでもこの状況のままに居るわけにも行かない。い
ずれ、俺が一人で街の外に出なきゃいけない事態になるかもしれ
ない、何より三人に負担を掛けっぱなしというのは心苦しい。

とはいえ、ここまで焦ることは無いと言う意見もあるだろう。ま
だこちらに来てから知識も経験も浅く、俺の今の体格を考えればも
っと成長してからでも遅くは無い。

だが……正直まともに錬金術師としても動かず、作った道具や薬
を売するための自前の雑貨屋もほったらかして、日がな一日のんびり
しているイセリナを見ていると……このままじゃまずい、と思
えないのだ。

というか、雑貨屋を経営していると聞いたときも驚いたが、その
雑貨屋を初めてみたときは本気で驚いた。全ての商品が埃まみれの
雑貨屋って、一体誰が来るんだよ。

あわてて掃除しようと思ったのだが、イセリナが言うには、置
いてある商品は全て使い物にならなくなっているらしい。

まあ、確かに青いはずのポーションが緑色になってたとか、羽帽
子らしきものを触ってみたたら崩れ落ちたとか、少し調べるだけでも
説得力は十分にあつた。

……そんな説得力いらねえ。

そんな訳で、錬金術師や雑貨屋として何とか復帰するためにも、俺が一人で動けるようになっておいたほうがいいのだ。

イセリナは「別にいいんじゃないかしら」などと言っていたが、そういうわけにも行かない。蓄えというのは、いくらあってもやがてなくなるものだし、何より自分の主がそんな二トつぷりを発揮するのは、精神的にもきつすぎる。

フォルはフォルで、森に行って取ってくるのは香辛料やココアの原料、後は食べるためのきのこぐらいだし……それも自分達で使う分だけ。フォル、君はイセリナの弟子になって、一体何を習ってるんだ？

とりあえず、数日間かけて何とか店の掃除のめどは付いてきたのだが……何せ、売るのが無い。街で原料を買うのは高く付くし、まだ錬金術をほとんどやったことが無い俺では、失敗の可能性も低くないのだ。

何か、微妙に手詰まり感が出てきた気がする。イセリナに一人を外に出たいと言ったら、何やら考えごとをしていたのだが、イセリナのことだからろくなことじゃないだろうし。

「それで、今日は何を買いに来たんだ？俺としちゃあ、遊びに来たってんでもいいんだがよ」

「飯にも商売人なんだから、冷かしを歓迎するなよ。これとそれとそれ、4つずつお願い」

「あいよっハル坊の元気そうな顔も見れたし、ちっとはサービスしとくよ」

おやつさんが提示した金額は、相場より若干安めの値段だった。まけてくれるのはありがたいが、自分から値引きするのは商売人としてどうなんだ？

「ありがと、また必要になったら来るよ」

「おう、いつでも来な！遊びにでも構わんからよっ」

一礼をする俺に、笑顔で手を振るおやつさん。多少の違いはあれど、街の人たちの反応は大体こんな感じだった。

食料は買ったし、頼まれていた服も買った。後は……雑貨屋で傷薬か。

……確か、雑貨屋を経営している錬金術師なんだよな？俺の主。

何故自前で用意せず、わざわざライバルの店に買いに行くのか。首を振ってそんな疑問を振り払い、俺は街にあるもう一つの雑貨屋へと向かう。

既に一度行ったことのある店だが、イセリナの店とは違い、こざっぱりしていて人気のあるお店だった。

店主さんもいい人そうに見えたし……何か、イセリナを妙に目の敵にはしていたが、その使い魔の俺に対しては優しく受け答えしてくれた。ちなみに女性で、セルニアと同年齢ぐらいの人だ。

ひよっとしたら、過去にイセリナとの間に何かあったのかな……
いやまあ、イセリナと暮らしていて、その何かの心当たりは山ほどあるわけだが。

「あつ」

「おっと」

そんなことをぼーっと考えていたら、道行く人にぶつかってしまった。

「す、すまん。ぶつかってしまつて」

「いえ、こちらこそすみませんでした」

こちらに非があるので、素直に謝ることにする。あまり、考え事をしながら歩くのは良くないか。

「あら？貴女、ここらでは見かけない子ですね。最近この街に来たのですか？」

「え？ああ、ちょっと違うかな。俺は最近召喚されたばかりの使い魔だから」

「あら、そうだったのですか。珍しいですね、人型の使い魔なんて」

そういつて優しげに微笑む女性。……うーん？何か雰囲気がいセリナに似ているような？

「それで、ご主人様はどなたですか？ひよっとしたら私が知っている人でしょうか」

「主人の名はイセリナ。一応、錬金術師をやってるらしい」

イセリナという言葉に、目の前の女性が反応する。イセリナって
そこまで有名人物だったのか？

「ちよつちよつと待ちなさい。貴女、あのイセリナさんの使い魔で
……間違いないですね？」

「俺が知ってるイセリナは、一人しか居ないはずだが……何かある
のか？」

俺の返答に、目の前の女性が口を押さえてぶつぶつとつぶやき始
める。……何なんだ？ 一体。良く分からんが、あまり関わらない方
が良いかもしれないな。

「すまんが、俺は今から雑貨屋に行かないといけないんだ。じゃあ
また」

「あ、ちよつと待ちなさい！」

その場を立ち去ろうとして、足を進めたとたんに肩をつかまれる。
拍子にバランスを崩しかけて、何とか立て直す。

「な、何だよもう。何かまだ俺に用事でもあるのか？」

「イセリナさんに話があるの、今すぐ私を連れて行ってもらえませ
んか？」

……人の話を聞いてなかったのか？ こいつは。

「今から雑貨屋に行くところだといってるだろうが。その後にして
くれ」

「なっ！？……いえ、そうね。ごめんなさい。イセリナさんは家に
居るのですね？」

「俺が出かける前は、家に居たよ。その後出かけたかは知らない」
「そう、分かりました」

そう言つて早足でその場から離れていく謎の女性。……そういえば、互いに名乗りもしてなかったな。

「……ま、いつか」

特に気にせず、俺は雑貨屋へと向かうことにした。別に急ぐほどではないが、時間を食ってしまったのも事実だ。

「ふふ、傷薬ね。はい、どうぞ。ミハルちゃん」

「ありがとう。はあ……イセリナも錬金術師なんだから、傷薬ぐらい自前で用意できれば良いんだけどな……」

「あの人にそれを求めるのは……いえ、ごめんなさい。あんな人でも、ミハルちゃんのご主人様だもんね」

「あ、ああ。まあそうなんだよな」

あんな人つて……やっぱりイセリナは、この店主さんに嫌われているようだな。

「ああ、ミハルちゃんがうちの子だったら、こんな苦労なんてさせないのに……。ねえ、今からでもいいからうちに来ない？ミハルちゃんなら歓迎するよ？」

「使い魔なんだから、さすがに無理だろ。それに、俺があの家から居なくなると、フォルも悲しむだろうしさ」

それはうぬぼれ……では無いと思いたい。ただ、フォルの場合は、同居人がどんな相手でも居なくなったら悲しみそうではあるのだが。

「そっか、あの女はともかく、フォルカちゃんからミハルちゃんを引き離しちゃ、かわいそうよね」

「そういうこと。気持ちだけは、ありがたく受け取っておくさ」

そういつて軽く笑う俺に、店主さんは「残念」といつてペロツと舌を出した。……っていつか店主さん、今、悪意を持ってアマって言ってませんでした？

「代金はこのお値段で良いわよ。アレならともかく、ミハルちゃんなんだしね」

「ありがとう。何か、悪いな」

そう言つて提示された代金を支払う。やっぱり、相場より若干安かった。

「良いのよ別に。もし良かったら、買うものが無くても来てくれればいいの、ミハルちゃんなら歓迎するわ」

「おやつさんといい……商売人が冷かしの喜んだらいかなだろ」

「あら、それじゃあ、ミハルちゃんがもつと女の子らしい口調に変えてくれる、というのでも良いわよ？」

「……それはちよつと勘弁してくれ。まあ、気が向いたら来るよ」

店主さんの言葉に苦笑をもらしながら、俺は雑貨店を出る。見上げれば、青かった空はすっかり茜色に染まっていた。

この分なら少し急げば、暗くなるまでには帰れるか。そう判断した俺は、茜色に色づく街の景色を眺めながら、少し急ぎ目に帰るこ

とにした。

買い物を終え、家にたどり着いた俺を、イセリナと先ほど出会った女性が待っていた。

そして、そこで話される出来事が、俺のこれからの運命を大きく変えていくことになる。

第12話 平和な街での平和な一時（後書き）

前話を第一章の終わりとすると、この話は第一章と第二章のつなぎとなります。

ミハルの街での日常。

基本的に、街の人たちはミハルに対して好意的です。

第13話 新たなる道

「確かに、俺にとって悪い話じゃないな」

俺の言葉に、目の前の女性は喜びの表情を見せる。対して、イセリナとフォルの表情は暗いものだった。

「べ、別に、ハルちゃんが魔法を覚える必要は無いのよ？おねえさんが、ちゃんと守ってあげられるんだから」

「それでも限度はあるだろう？それに使い魔としても、いつまでも主に守られるだけなのは嫌なんだよ」

「ハルちゃん、魔法学園に行っちゃうの？ここに居てくれないの？」

「いや、行くとっても、精々1週間って話だろう？」

本当は、魔法をちゃんと覚えるには1年2年は必要なのだが、さすがにそんなに待ってはられない。

そんな訳で、俺は特例として1週間だけ、魔法学園で魔法の基礎を教えてもらうことにしたのだ。

「でも」

「しつこいですよ？イセリナさん。彼女は自分の意思で、そうすると言っているんですから」

「そうは言いますが、カルナさん……」

今、俺の目の前に居る女性は、カルナ・ゼノグレート。この街の近くに立てられているヴィレア魔法学園の学園長にして、元宮廷魔導師らしい。

腰まで伸びた銀髪と若干鋭い黒目が特徴の、有能な秘書官って感

じがする人。背は平均ぐらいで、結構なキャリアを持っている割には若々しい。

……と言っても、経歴を考えれば30代は行ってると思うけど。

「……何か、妙な詮索をする気配を感じたのですけど?」

「何も考えていません」

カルナさんから妙なオーラが漂い始める。どうにも、年齢をタブーとする人たちはそういった思考に対して感が良いようだ。

さて、何故カルナさんがここに来たのかと言うと、それにはどうやらイセリナが関係しているらしい。

何でも、イセリナは実は元宮廷魔導師候補だったのだが、使い魔が召喚できないことを理由にそれを辞去していたというのだそうだ。……ならば、使い魔を召喚できた今はと言うと、本人は戻って宮廷魔導師になるつもりは無いらしい。

「まったく、理解に苦しみますね? 貴女ほどの実力があれば、私と肩と並べるのも夢ではないでしょうに」

「あらあら、それはさすがに過大評価ではないでしょうか」

「……本当のことなのですがね」

そういつて肩をすくめるカルナさん。随分とイセリナのことを買っているらしいが、昔何かあったのだろうか……?

「昔……ね、私はイセリナさんに、命を助けられたことがあったのですよ」

そんな俺の疑問に気づいたのか、カルナさんがそう語る。

「貴女の特例も、その借りを返すためと言うのが一つの理由なのですよ？もつとも、私自身も貴女に興味があったりはしますが」

……ひょつとして、えらい人に目をつけられたか？俺。

カルナさん曰く、俺は使い魔とは思えないほどの魔力を持っているそうだが……変な実験とかに、使われたりしないよな？

「ふふふ、安心しなさい。興味を持ったと言っても、貴女を勝手に調べたり、貴女で実験をしようなんて思っていないませんから。……貴女が、それを望むのなら別ですけど」

にいつと笑うカルナさんに、俺はあわてて首を横に振る。つか実験ってあれですか、いわゆる人体実験のことですか。

「ねえねえ、私も……行っちゃだめかなあ？」

「フォルちゃん？」

そんな話をしていると、フォルがおずおずと前に出てそう切り出して来た。

「だって、ハルちゃんが行くなら、私も行きたいもん。お師匠様……だめ？」

「あらあら、フォルちゃんまでそんなことを……どうしようかしら」

イセリナが困ったような表情を浮かべる。まあ、言いたいことは何となく分かる。

「フォルちゃん、フォルちゃんはここに弟子に来てるんだろ？そのフォルちゃんが、勝手に学園に行ったりするのはさすがにまずいんじゃないか？」

「別にいいと思うよ？あたしは許可するし、うちの両親ってば放任主義だからねん」

……どっから湧き出てきた、セルニア。

「おお？何で久々に出てきたおねーさんに、ハルちゃんはそんな視線を向けるの力ナ？向けるの力ナ？」

「久々って、昨日も普通に会ってただろうが。ってか、どっから出てきたんだよ」

「どこからって、普通に……天上から？」

それ、普通じゃねえ。お前はクモか何かか。

「ま、それは置いて。フォルが魔法学園に行くってんなら、あたしは賛成。むしろ、早めに行つていた方がいいと思う」

……？今一瞬、セルニアの表情が翳った気がしたんだが。

「あらあら、セリーちゃんまでそういうのね。困ってしまいま

すわ」

「……？セルニアが賛成するなら、問題ないんじゃないのか？」

基本的に、魔法を覚えること自体に問題は無いはずだ。それとも、何か俺の知らない副作用があったりするのか……？

「あらあら？でも、二人とも行ってしまったら、家から可愛い女の子がいなくなってしまうすし」

……………。

「フォルちゃん、明日にでも学園に通い始めようか。その気なら、1週間じゃなくて1ヶ月でも1年でも、俺は良いと思うぞ？」

「え？ええ？急にどうしたの？ハルちゃん」

「あら、それは良い提案ね。私としても、1週間じゃなくて1ヶ月や1年、ちゃんと教えた方が良いと思いますし」

「いいの？カルナおね～さんに、迷惑掛かるんじゃないの？」

「あ、あらあら？だ、ダメですよ？1週間でも大変なのに、1ヶ月や1年なんて、きつと耐えられませんか」

まあ、使い魔なんだから、そんな長いこと離れるわけにもいかなのだから。

「ねえねえ、さっきから離れる云々って話だけどさ、別にこっから通えば良いんじゃないの？」

「……へ？」

「学園つていったら街から出て直ぐなんだし。フォルと一緒になら、平原ちよつと歩くぐらい危険でもないしさ」

「あゝ……そつか、そういえばそうだったな」

頭の中の地図を思い出す。ヴィレア魔法学園は、ヴィレアを包むようにあるセプール平原に建てられている。

街からの距離もそこまで遠くは無い。一般的な子供なら若干不安はあるが、フォルなら危険らしき危険は無いだろう。

「何も、寮に入らなきゃ学園に通えないって訳じゃないしね」

「あらあらゝ、そういえばそうでしたゝ。忘れてましたわ」

「イセリナさんは、魔法学園に通ったことがあるはずですが。ひよつとして、そんなことで反対をしていたのです？」

カルナさんの目が光り、イセリナが冷や汗を流し始める。……うん、カルナさんにだけは、なるべく逆らわないようにしておいた方が良くも。

「といつても、俺はあんまり魔法の勉強ばかりに注力は出来ないんだよな……イセリナは真面目に働かなくて、正直不安だし」

「あら？……それは、どういうことですか？」

「え？いや、イセリナは普段、錬金術も雑貨屋の運営もほとんどしてなくて、収入があるように見えないからさ。魔法を覚えてきたら、こっちの手伝いもやらないと」

「……………」

「あ、あらあらゝ」

イセリナが、大量の冷や汗を流し始める。……あれ？ひよつとして俺、何かまずいことを言ったか？

「イセリナさん？」

「は、はい〜？」

「貴女、まだ召喚して間もないこんな幼い使い魔に心配されるほど、働いていないのですか？」

「え、ええと〜……」

「そうなんですネ？」

「は、はい〜」

カルナさんが、ゆつくりと顔に笑みを浮かべる。その笑みを見た瞬間、俺の背筋に強烈な寒気が走った。

ダメだ！この人間には逆らうな！！と、本能が告げる。その殺気の対象となっているイセリナは、あからさまに恐怖で震えだしていた。

「ふふ、ふふふふふ……貴女には、ちょっとお説教が必要なようですネ？」

「ひい〜、そ、それは〜」

「何か反論が？」

「あ、ありません〜」

横を見ると、フォルが恐怖に震えていた。セルニアもかなり青ざめた表情を見せている。

「ではまず、この子達は1年間、魔法学園に通わせてもらいます。その間に貴女は、錬金術師としての仕事をきっちりしてもらいますよ。良いですね？」

「は、はいいい〜」

何だか、うやむやのうちに1年通うことになってしまった。……

良いのか？これ。

「カルナさん、ちょっと良いか？」

正直今のカルナさんに声を掛けたくないのだが、後で何かあつては困るので質問をする。

「質問を許可します」

「俺は一応使い魔だし、あまりイセリナから離れたりして魔法の勉強をするのは、よくないんじゃないのか？」

それは、極々一般的な疑問。使い魔が主と離れて大丈夫なのか？本に書いてある限りでは、使い魔は主なくしては活動ができないはずだ。

「問題ありませんよ。使い魔でも、貴女は人型ですから」

「はえ？人型だと、そういうのって違ったりするんですか？」

「……そうでしたね、そもそも人型は珍しいので、あまり知られていないのかも知れません」

セルニアの質問に対し、カルナさんがそう言つて髪を軽く掻き上げる。何か、すごく様になっていた。

「本来、使い魔は主からあまり離れることは出来ません。距離にすると、活動範囲は約4ケルほどでしょうか」

4ケルとは大体4kmのこと。つまり、普通の使い魔は半径4kmの範囲なら、自由に動ける。

「その距離を越えてしまえば、使い魔は活力を失い、身動きが取れ

なくなります」

使い魔は、主の魔力によって活動している。当然、主から魔力を受け取れる範囲を外れれば、活動できなくなるということだろう。

「しかし、人型に限りその制限は解除されます。人型とそれ以外の使い魔の最大の違いは、食事を取るか否かです」

「……あ、そうか。そういうことか」

確かに本で書いてあった使い魔は、食事は必要ないと記述されていた。だが、俺は食事を取っているし必要としている。

「つまり、人型の使い魔は、主からの魔力とは別に活力を得られると言っことです。もっとも、主を失えばやがて活動不可となってしまいますが」

さすがに、主を失っても生き続けることは出来ないようだ。だが、これで納得した。

例えどれだけ離れていても、使い魔は主から最低限生存するだけの魔力を得ている。それは、どれだけ使い魔を遠くに離しても使い魔が消滅しないという、本の記述からも理解できる。

ただ、その状態では活動するのに必要な魔力を得ることは出来ない。その分を、人型の使い魔は食事によって得ることが出来るということだ。

つまり、人型の使い魔は主に関係なく行動することが可能と言うことだ。……さすがに離れっぱなしとかは、使い魔としてどうかと思うし、主に命令をされれば、それに応じる必要はあるだろうけど。

「どうやら、理解していただけたようですね」
「はい」

カルナさんが満足そうに頷く。なるほど、教育者なんだなあ……
と思わず感心する。

「えっと、難しいお話はわかんないんだけど、ハルちゃんは大丈夫
って事なの？」
「そういうこと」

「あらあら、そういうことだったのですか、驚きました」

ピシッと空気が固まる。カルナさんが仁王のようなオーラを漂わ
せて、ゆっくりとイセリナに振り返る。

「イセリナさん？人型の使い魔を手にしたあなたが、何故そのよう
なことを知らないのです？」

「え？ええ、つと、それは」

「ひよつとして、まさかと思いますが、それ以外の使い魔の事につ
いても調べてない……とは言いませんね？たとえば、そう。召喚し
て一週間は、外に出てはいけないこと……とか」

「あ、あらあら？ひよ、ひよつとして私、ハルちゃんに無理を
させていたのかしら？」

ビキッとその場の空気の質が変わった。その瞬間、カルナさん
以外の全てが、完全に凍りつく。

圧倒的な恐怖。あの、ホワイトタイガーに出会った時の恐怖ですら、霞んで見えるほどの……恐怖。

「は、はははハルちゃん……」

ガタガタと震えながら、フォルが俺の手を握る。大丈夫、と握り返そうとするが、思うように手に力が入らない。

大丈夫、この殺気は俺には向けられてない。そう思っている、全身の震えがとまらない。

これが……元宮廷魔導師長の力なのか。ぶっちゃけこんな形で知りたくは無かったけど、これは確かに……すごい。

セルニアも、あのイセリナですらも顔を蒼白にさせている。：

…もはや、この仁王を止める手段は……この場に存在しない。

「ふふ、分かりました。貴女のこと、よくよく理解させていたいただきましたよ」

ぞくり、と震えた。ただの言葉が、こんなにも寒気を催すものなのか？

「イセリナさん、ちょっとこちらへ。ああ、今日は眠らせませんよ？ ゆっくりと、貴女の不勉強^{サボリ}を懺悔させて上げましょう」

ゆっくりとイセリナに近づき、首根っこをつかんで引きずっていく。その光景を、この場の誰も止めることは出来ない。

そして、仁王がゆっくりと部屋の扉を開ける。その先の光景はいつもと変わらない風景のはずなのに、まるでその先が地獄であるかのように見えてしまう。

パタンと扉が閉められる。部屋の空気が一変し、残ったみんなが安堵の息をつく。今日は色々あったけど、これだけは言えるだろう。

『カルナさんだけは、絶対に怒らせてはいけない』

俺は何となく、魔法学園に通う上で一番重要なことを今教えられた気がした。

第13話 新たなる道（後書き）

扱いとしては第二章のプロローグ扱いです。

というわけでこれから第二章として、ミハルの学園での生活が始ま
って行きます。

何とか、学園に入ってからつまらなくなっただということが無いよう
にはしていこうかと思えますので、よろしければこれからも読んで
行っていただけると幸いです。

第14話 ヴィレア魔法学園（前書き）

紳士注意。

第14話 ヴィレ魔法学園

「ハルちゃん。準備って、これくらいでいいのかな？」

「ああ、筆記用具に何枚かの紙。念のために携帯食料があれば大丈夫だろ」

魔法学園で必要になるものを、お互いにチェックする。基本的に必要なものは向こうで用意する、と言っていたが、念には念を入れておいた方がよい。

「楽しみだね。お友達とか、たくさん出来るかな？」

「フォルちゃんならきつと出来るよ。むしろ、俺の方が心配だな」

……何せ、俺は見た目は女の子でもこんな口調だしなあ。

「え？ハルちゃんなら、きつとすぐにお友達が出来ると思うよ？」

「はは、ありがと」

不思議と、フォルがそういつてくると、そうなんだろうと思えてくる。

多分、俺は今までもずっと、気づかないうちにフォルに元気付けられてきてるんだろう。

「いつか、恩返ししなきゃな」

「？」

そう、小声でつぶやく。聞こえなかったのか、不思議そうに首を

傾げるフォルに、俺は笑いかけた。

「さ、いこつか。あんまり遅れると、カルナさんに怒られるかもしれないしな」

「うん、じゃあ行つてきまゝす」

「はゝい、いつてらっしゃい」。道中、気をつけるのよ」

そう言つてにこやかに手を振るイセリナ。何だかんだ言つても、彼女も魔法を勉強する事自体は、反対していなかったのかもしれない。

学園、と言つても特別何かが必要なわけではない。指定の制服があるわけでもなく、何らかの資格や試験が必要と言つわけでもない。イセリナは「これを着ていかなきゃダメよ」などと言つて、妙に可愛さを強調したドレスを見せてきていたが。「嘘だつたらカルナさんに説教してもらつぞ」と言つたら青ざめて謝るあたり、あれは嘘だつたんだろう。

いい加減、少しは自重と言つものを知れば良いのに。

街をでて、セブル平原を二人で歩く。遠目に動物や魔獣の姿は見えるが、特にこちらに来る様子は無い。

意外と安全なのか？とも思つが、それでも一人で歩こうとは思わ

ない。何せ、俺は襲われたら逃げる以外の対抗手段が無いのだから。

「えへへ、久しぶりの街の外だね、ハルちゃん♪」

「ん、そうだな」

「こつちには、遊びに来たことなかったよね？こつちはね、お馬さんとかがいるんだよ？」

「へえ、乗ったりすることは出来るのか？」

馬は主に、移動手段として使われるらしい。もっとも、飼いならせれば……の話だが。

「それは無理かも」。以前乗ろうとしたんだけど、みんな嫌がったの」

「そっか」

やはり野生の馬じゃ難しいだろうな。大抵売ってる馬とかは、既に飼いならされた後の馬だろうし。

そんなことを喋っているうちに、俺達は無事、学園にたどり着くことができた。特に道中トラブルも無かったので、ほっと一息をつく。

「ここが学園かな？」

「おっきな建物」。一体何人の人が住んでるのかな？」

「寮には数十人って聞いてるけど……あ、あっちが受付かな」

入り口の近くに小さな建物があったので、そちらに向かう。中から、気のよさそうな女の人が顔を出した。

「あらあら可愛い子達ね、どうしたの？」

「今日から転入することになった、ミハル・トウマとフォルカ・エティールドです」

「あらあら、貴方達がそうなのね。話は聞いているわ。さあ、私についてきて」

そういつて、女の人が俺の手を引いて歩き出す。あわててフォルカも俺の手をつなぎ、後ろに付いて来る。

女の人が俺達を連れて一番大きな建物の中に入り、なおも進んでいく。ここが学園の学舎なのだろうか？

歩きながらそんなことを考えていると、女の人が足を止めた。目の前には一つの扉があり、『学園長室』と書かれた札が張ってあった。女の人が扉をノックする。

「学園長。転入生のお二人ををお連れしました」
「どうぞ」

中の声を聞いた後、女の人が一礼をして入っていく。俺達も一応それに習って入っていく。

中には、椅子に座って書類を眺めるカルナさんが居た。少し経ったところできりが付いたのか、書類を置いてこちらに向き直る。

「ヴィレア魔法学園にようこそ、ミハルさん、フォルカさん。私、ひいてはヴィレア魔法学園は、貴女達を歓迎いたします」

そういつてにつこりと笑うカルナさん。こうして、俺とフォルカは晴れてヴィレア魔法学園の生徒となった。

「彼が、君達が転入するクラスの担当教師です。……おい、駄犬。ボサツとしてないで、さっさと自己紹介しなさい」

カルナさんに連れられ、俺達は担当教師に挨拶をするために職員室へと来ていた。……って、駄犬ってカルナさん？ちよつと今、凄まじい毒が聞こえた気がするのですが……。

駄犬と呼ばれた担当教師は、何かプルプルと震えながら顔を伏せている。さすがにいきなり罵声を浴びせられて、怒っているのじゃないだろうか？

「いいいいよつつつしゃあああああつ！！俺のクラスに幼女二人っつ！！ついに俺の時代が来たーーーーー！！」

……………。

カルナさんに視線を向ける。カルナさんは頭に手を当て、盛大なため息をついていた。オイ、本当にコイツが教師で良いのか？

「俺の名前は、レオナルド・クライシアだ。二人ともよろしくな。もう、本当に嬉しくて嬉しくて仕方ないぜ！」

「は、はあ……俺はミハル・トウマ。よろしく、レオナルド先生」

「私の名前はフォルカ・エティールドって言うの。よろしくね、レオナルド先生」

……コイツの今の行動を見てなお、無邪気に挨拶できるフォルはすごいと思う。同時に、なんとしてもコイツから守らなきゃ、とも思うけど。

「おおう、気の強そうな子に天真爛漫な子だあ。だが、まだ甘い！俺のことは、お兄ちゃんと呼びなさい！！」

「……はあ？」

「へ？でも、レオナルド先生は、おねちゃんみたいにおにちゃんじゃないよね？」

フォルの言葉が何かの琴線にでも触れたのか、再度プルプルと震えてうつむくレオナルド先生。……何か、もう分かってきた気がする。

「くはあああああつその蔑むような視線！そして舌つたらずな口調！！ほんとたまら」

「いい加減にせんかつ！この下種犬が！！！」

メキツという音を立てて、レオナルド先生が地面に叩きつけられる。……顔が地面に埋もれてる気がするんだが、生きてるのか？これ。

「二人とも済みません。ですが、駄犬……もとい、レオナルド先生は教師としては優秀なのです。信じがたいかもしれませんが」

確かに信じがたい。が、カルナさんがそういうのなら、恐らく間違いはないのだろう。少なくとも、カルナさんは役に立たない変態を、教師として置き続ける様な性格でもないだろうし。

「レオナルド先生は、こう見えて生徒には手を出さないことを公言し、それを遵守しています。……真に信じがたいですが、それは事実なのです」

あ……つまりアレか、これがいわゆる紳士という奴か。まさか、異世界で見かける事になるとは思ってなかったが。

「不安かもしれませんが、貴女達に手を出すことはありません。これは間違いないでしょう」

「……ああ、確かにそうだな。コイツは俺達を見て狂乱して喜んでたけど、イセリナみたいに襲い掛かってはこなかったしな」

俺の言葉にカルナさんが顔をしかめる。あ、何かまたまずいことを言っちゃったか。

「……その件に関しては、後ほどイセリナさんからじっくり聞いた差ししよう。とにかく、レオナルド先生が安全な人であることを理解していただければ、幸いです」

カルナさんから、若干オーラののようなものが立ち込めているのが見える。イセリナ、ご愁傷様。

「では、そろそろ始業の時間ですね。ほら、いつまで気絶してるその駄犬。早く起きないと踏み潰しますよ」

「んのわっ……あれ？何か、花畑のようなものが見えてたんだけど、知らんか？」

それって死に掛けてんじゃん。良くコイツ今まで生き残ってこれたな……。

「そんなものは知りません。とにかく、始業の時間が迫っているんですから、この子達を連れてさっさと教室に向かいなさい」

「イエッサー、学園長殿。このレオナルド、お二人をつつがなくお届けすることを誓いますっ」

「そこはサーじゃなくてマムだろ。そのうち、本気でカルナさんに殺されるぞ?」

思わず突っ込む俺に、レオナルド先生が嬉しそうにこちらを向く。しまった、やぶ蛇だったか?

「良いな、良いぞ、その突っ込み最高! 何で君の年齢でサーとかマムとか知ってるのか不思議だが、それでも君は最高だ!」

「良いから、とつと二人を連れて行きなさい」

まったく、とカルナさんがため息をつく。そんなカルナさんを尻目に、俺達はレオナルド先生に連れられて、職員室を後にした。

目の前には、『Aクラス』と言う札が貼られた扉。軽く深呼吸をして、自分の気持ちを落ち着かせる。

「よし、それじゃあ準備は出来たか?」

俺とフォルがコクツと頷く。何事にも、初めは肝心だ。

「じゃあ、ここが今日から君らが魔法の勉強する教室だ。さあ……」

入ろうか」

そういつて、レオナルド先生が教室の扉を開く。こうして、俺達は学園生活の第一歩を踏み出した。

第14話 ヴィレア魔法学園（後書き）

ついに紳士のご登場です。といっても一般の方が良くご存知の紳士ではなく……。

……はい、すみません。調子に乗りすぎました。ですが、自重する気はありません。

ここまでご覧になった方は、なぜ冒頭に紳士注意と書いたのかを理解できると思います。もし理解できない方がいらっしゃったら、紳士のルビとして変態と頭の中で書いていただければ理解できると思います。

第15話 二人の転入生

ズパアンツと鈍い音が響き渡る。

突然の轟音に、俺は何が起こったのかわからず呆然とした。そんな俺の横を、猛烈な風が吹き抜ける。

何者かの攻撃。そう気づいた瞬間、俺は勢い良くフォルのほうへと振り返る。フォルが巻き込まれた様子は……特に無い。

じゃあ今のは？と思ってふと気づく、……目の前に居たはずのレオナルド先生の姿が、どこにも無い。

さらに、後ろからガゴオツと鈍い音が響いてきた。それは何か、重い何かが壁にぶつかったような音だった。

そこまで状況を知って、ようやく俺は今の状況を判断することが出来た。つまり、

レオナルド先生が、担当の教室の扉を開けた瞬間、教室内の何者かの攻撃によって吹き飛ばされた。

ゆっくりと後ろを振り返る。そこには頭を壁にめり込ませ、ぴくぴくと痙攣しているレオナルド先生。……生きてるのか？これ。

「やりましたわっ！みんな！！作戦は見事に成功ですわよ！！」
「「「おおおおおおおお！！」」」

そこにさらに主犯らしき人物の掛け声と、中の生徒のものらしき歓声が響き渡る。

……おい、本当に大丈夫なのか？ここ。

未だ眼を丸くしたまま呆然とするフォルを見て、これからの学園生活に対する不安がよぎる。いくらなんでも、俺達が入るにはバイオレンス過ぎんだろ、これ。

え？何？ひょっとして、俺達が入ろうとしても攻撃されるわけ？
……怖くて教室に入れねえ。

「……あら？ちょ、ちよっと待ちなさい。ダメ教師の他にも誰か……居るみたい、ですわよ？」

凄まじく不安に駆られてきた俺の思考を、教室の中から聞こえてきた声が止める。気がつく、あれだけ響いていた歓声は止まっていた。

代わりに、教室内からざわめきが聞こえ始める。教室の中から、生徒の一人が飛び出してきた。

「や、やっぱり……ちよっと貴女達、ひょっとして怪我とかしているではありません？巻き込まれた様子は……無いようですけど」

非常にばつの悪い顔を見せる女の子。口調からして、それなりの身分の人……だろうか？佇まいもどこと無く上品だし。

「あ、ああ。俺は大丈夫」

「うん、私も怪我とかはしてないよ？」

俺達の言葉に、その女の子が安堵の息を付いた。

「そう、安心しましたわ。そしてごめんなさい、まさかあのダメ教師以外に誰かが居るなんて、思いもなかったの」

そういつて女の子が頭を下げる。突然のことにどうしていいかわからず、困惑する。

そんな中、さらに教室から一人の男の子が顔を出してきた。

「ふふふ、でも無事でよかったじゃないか。きっと君達は、幸運の女神に祝福されているんだね」

「そんなことを言うてる場合じゃありませんわよ！大体、貴方がダメ教師が来たのを【探知】で確認していたのでしょうか？」

「僕にそんなことを言われても。先生はきちんと来ていたじゃないか」

「【探知】をするのなら、きちんと周りの事も確認しなさいと言っているのですわ！」

後から顔を見せた男の子に対して威嚇する女の子。……えっと、つまりあれか。これは黒板消しトラップみたいなものか。

……破壊力が文字通りの桁違いだが。さすがにいたずら程度じゃ済まされんだろ、これ。

「む……うっ……いたたた。やれやれ、さすがにメイフィールド君の愛は強烈だな」

「はあ！？」

何事も無かったかのように後ろから聞こえて来る声に、俺は驚いて振り返る。

……おい、無傷って！無傷って！！絶対それはおかしいだろっ！！

「やれやれ、相変わらずゴキブリ並みのしぶとさですわね。ダメ教師」

「さすがの僕も、先生のゴキブリ並みの生命力には、驚きを隠せませんよ」

何ていうか、すっごいひどい言われよう。どうやらこの教師は、相当この二人に嫌われているようだ。いや、中の歓声を考えれば、ほぼ全ての生徒に嫌われているのか。

ってか、台詞から考えるとこの二人殺る気満々だったんじゃないかね？
良くこの先生、今まで生き残ることができてたな……。

「うむうむ、メイフィールド君のその蔑む視線は最高だ。でも、愛のあるやんちゃは程ほどにしないとダメだぞ？」

「ふふ、どうやらこのダメ教師には、全然お仕置きが足りないようね。必要なら、私の魔力ぎりぎりまでその体に叩き込んで差し上げますけど？」

「それはそれでご褒美だが、残念なことに、今の俺にはそれをもたらてる時間は無いんだ。この二人の挨拶があるからな」

ハッと気づいた様子で女の子が俺たちを見る。若干ばつが悪い様子を見せて、口を尖らせる。

「……し、仕方ありませんわね。今日は大人しく席に戻ることにしますわ」

「そうだね、じゃ、子猫ちゃんたち。また後で」

そう言つて、二人の生徒は教室に戻つていった。俺の心の中に、なんともいえない感情がわきあがる。

「さ、二人とも入るぞ。みんなに自己紹介しないとな」

「はい」

こういうときは、フォルの純粋さがとても羨ましい。頭を振ることによつて、ようやく思考を切り替えた俺は、フォルに遅れて教室へと入つていった。

教壇に立つ俺達を見て、教室内の生徒達がざわめく。教室中の視線が、俺達に集中しているのが分かる。

「はいはい、静かにしろ。この二人は、今日からこのクラスに転入することになった幼女達だ。今から自己紹介してもらうからな」

……何か、視線の中に哀れみのようなものが混ざつた気がしたのだが？あと、幼女とか言うな。

「はい、じゃあ私からね。私はフォルカ・エティールドつて言うの。みんな、よろしくね」

フォルの笑顔つきの自己紹介に、クラス内の野郎共から歓声が上がる。……自重しろよ。フォルはまだ、体格とか小学生レベルなんだぞ？

「……つと、次は俺か。俺の名前はミハル・トウマだ。よろしくな」

まあ、最初の自己紹介は肝心だからな、と作り笑いを見せる。……何故か、教室のざわめきが止まりだす。

あれ？俺、何か変なことしたか？と思った瞬間、突然教室中からドツと歓声が巻き起こった。

ちょ、ちょっと待った。何でここまで歓声が巻き起こる？って言うか、男の子だけじゃなくて、女の子達まで何故喜びだすんだ！？

突然の反応に戸惑っていると、何人かの生徒達がこちらに駆け寄ってきた。まずい、あの目にはどこかで見覚えがある。

あわてて身構えると、迫ってきた生徒達が目の前で停止した。……いや、これは何かの壁にぶつかったのか？

「おいおい、幼女を前にして興奮するのは分かるが、襲い掛かったりするのはダメだぞ？それは紳士協定違反だ」

……ついにこいつ、紳士協定とか言いだしやがった。いや、だが助かった。目の前の生徒達も、不満そうな顔はすれどもその目には正気が戻っている。

「で、席だが……そうだな、あそこらへんに座ってくれるか？」

そう言ってレオナルド先生が指差す先は、一番後ろの隅の空席。ひとつ前の席には、大人しそうな男の子が座っている。

まあ、妥当だと思って指示に従い、席に座る。フオルはその隣の空席に座った。他の生徒達が不満そうだったが、指示に逆らってまで彼らのそばに座りたいとは思わない。

「じゃあ、点呼を取るぞ」

俺達が座るのを確認したレオナルド先生は、そういつて順番に生徒の名前を呼んで行く。

ふと、視線を感じたのでそちらに振り向く。前の席の男の子が、あわてて前へと振り返った。

やっぱり転入生って気になるもんかなあ……とか適当に考えながら、俺は教室内を観察することにした。

世界には、友好的な人間と敵対的な人間が居る。

転校……転入するって言うことは、すなわち住む世界を変えらるということだ。こちらから見れば見慣れた光景が様変わりし、向こうから見れば今まで居なかった異物が現れる。

だから転入する際に、俺は友好的な人間と敵対的な人間を良く見極めるべきだと思っていた。よほど好戦的かこちらから仕掛けでももしない限り、転入初日から何かが起きることは無い。だから、その間にそれを見極めておいた方が良いのだ。

そして、早めに友好的であろう人物との接触を図る。そうしてある程度の輪を広げておけば、敵対的な人間もそう簡単に手出しをしにくることが無くなる。

……まあ、本音を言うと、あまりそういう打算の混ざらない友人関係を広げなかったのだが、さすがにそうも言ってられない。今の俺は、あまりに非力な女の子なのだから。

そう、考えていた時期が俺にもありました。

何だこれ、と思わずつぶやきそうになる。それは先生による点呼が終わった後のこと。

いわゆるHRみたいなものだったのか、二・三連絡事項を告げ、授業を始めることも無く先生は教室の外へと出ていった。

次の瞬間、教室中の生徒達が俺達に集まってきた。席が隅だったのが災いし、逃げることにすら出来なかった。

そして始まる質問の嵐。フォルは楽しそうに答えているが、正直、俺はこういうのはちよつと苦手だ。

どいつもこいつも、好奇心と微笑みを顔に張り付かせて質問を繰り広げてくる。何より、ちょうどいい機会だし、と集まってきた奴らの中に悪意を探してみたのだが、誰からもそんな様子は見当たらなかったというのがおかしい。

正直理解が出来ない。さすがに全員集まってきたているわけではないようだが、この数で全員好意的にしか見えないのはいくらなんでも異常だろう。

だって、フォルならまだ分からなくも無いんだが……俺だぞ？

「みなさん！何をしていらっしやるんですの！！そっちの転入生の

方が怯えてるじゃないですよ!!」

そんな中、さすがに俺以外にも異常だと思った人物がいたのか、集まった生徒達を注意する怒鳴り声が教室内に響き渡る。

「ほらっさつさと散りなさい!二人とも、まだ10歳ほどの子供じやありませんの!そんなに集まっては、ただ怖がらせるだけですわよ!??」

いや、フォルは楽しそうだったんだけど……まあ、ここで突っ込むのはさすがにアレだよな。

ってかこの口調。さっき教室から出てきた女の子かな?なるほど、かなり正義感と言うか、面倒見がいい子のようだ。

人だかりが徐々に消えて行き、後に先ほどの女の子が残る。改めてみると、いかにも貴族のお嬢様っぽい女の子である。

元の世界だと高校生ぐらいか、整った顔立ちに金髪の長めのツイテール。ややきつめの眼差しとその眼に宿った赤い瞳は、まるでその性格を端的に現しているようにも見える。

「まったく……。ごめんなさいね、怖がらせてしまったでしょう?」

「あ、いや……でも、ありがとう。助かったよ」

「何言ってるんですの、貴女が感謝するようなことではありませんわ」

そういわれて、俺は軽く首を傾げる。それを見て、女の子がクスツと笑った。

「私はこのAクラスのクラス長を務める、メイフィールド・D・アウストレーゼですわ。私が居る限り、クラス内の生徒達による、貴

女達への無体は許しません」

そう、目の前で堂々と言いのける。威風堂々と言う言葉がぴったりに似合いそうなその姿に、俺は思わず見ほれてしまった。

「おやおや、君が初対面でそこまで入れ込むなんて、珍しいこともあるものだね」

「……何の用ですの？」

さらに別の方向から、一人の男の子がやってきた。メイフィールドさんと同じく、先ほど教室の外に出てきた男の子のようだ。

「別に。僕はただ、転入してきた子猫ちゃん達に挨拶をしに来ただけさ。君の珍しい姿も、同時に見る事が出来たけどね」

「……ふんっ」

笑顔を向ける男の子に対し、顔を背けるメイフィールドさん。メイフィールドさんはこの子に、あまり良い感情を抱いていないのかもしれない。

「僕の名前は、ゼノガルド・C・トロイホースさ。よろしくね、子猫ちゃんたち」

そういつて、とびっきりの笑顔らしきものを見せてくるゼノガルド。……多分こいつ、かなりの女泣かせの類だな。

容姿を見てもそれは分かる。中性的で端整な顔立ちに、金色に光る短い髪の毛。そしてまるで吸い込まれそうな蒼い眼。

外見だけでも、十分にファンが居そうな色男である。優雅な佇まいや貴族と言う立場を考えれば、さぞやあこがれる女の子は多いことだろう。

……まあ、それはともかく。自己紹介をされた以上、こちらでも仕返さなければ礼儀に反するだろう。たとえ先ほど、生徒達の前でした後だったとしても。

「先ほど自己紹介したと思うけど、改めて。俺はミハル・トウマだ。二人とも、よろしくな」

「私はフォルカ・エティールド。二人ともよろしくね」

今後長い付き合いになりそうな二人に、俺達は改めて自己紹介を返す。二人はそれを暖かい笑顔で迎えてくれた。

一時は胸によぎっていた不安も、だんだんと消えていくのを感じる。この分なら、無事に学園生活を過ごして行くことも出来るかな、と少しだけ思った。

「さて、それじゃあ次の、対ダメ教師用トラップの作成を始めるわよ」

「ふっ……今度は僕の名誉挽回のためにも、きっちり周囲まで探知しておくよ」

……本当に無事に過ごせるのか？何か、やっぱりダメな気がして

きたんだが。

第15話 二人の転入生（後書き）

というわけで、クラスメイト達との自己紹介でした。

閑話休題 ある少女に対する考察（前書き）

この話は、ある人物の能力に関する話が主題です。

もし能力に関する情報を、今後の話の中で自分で考えて行きたいという場合は、読まないことをお勧めします。

なお、この話を読まなくても、今後の話が分からなくなるといったことは無いはずで

閑話休題 ある少女に対する考察

報告書を読み直す。

改めて見ても信じがたい。それは、観察対象としても研究対象としても、まさに極上の人物だろう。それこそ、この機会を逃せば後百年はこんな機会にめぐり合えないと思えるほどの。

そしてもつとも信じがたいのは、私自身があの子をそういう対象で見たくない、と思ってしまうこと。

元宮廷魔導師であり、現ヴィレア魔法学園学園長。そんな肩書きが、邪魔だと言う衝動すら生まれてしまっていること。

軽く首を振って、自嘲した。あまりにも、私らしくもない。

大体、朝にあの子と話をしていた時だっておかしかったのだ。主が使い魔を無下に扱うのは、確かにあまり許されることではない。

だが、イセリナさんが本心から使い魔を粗暴に扱うはずがない。そんな事、私には分かりきっていたはずだ。

「カルナさんでも、あの子の事になると、変わってしまうのですね。」

あの時のイセリナさんの、そんな言葉がよみがえる。確かに私は、あの子に対する情をイセリナさんにぶつけてしまっている。イセリナさんには……悪いことをしてしまったかもしれない。

……もつとも、人がせつかく援助していたと言うのに、ただ情眠を貪っていたのは万死に値する。そこに関しては、イセリナさんにも深く反省してもらいたいところだが。

そこまで考えたところで、扉をノックする音が聞こえて来た。

「学園長。セティスです」
「どうぞ」

私の返答を聞いて、ヴィレア魔法学園の受付嬢……セティス・レイクトールが入ってきた。

「……お仕事中でしたか？」
「いえ、かまいませんよ。この資料は、貴女が報告に来た人物の調査内容と関係していることから」

私の言葉に、セティスの表情が一瞬動く。

「貴女も、気になりますか？」

「……任務としても、個人としても、気になります」

セティスの素直な答えに、私は軽く笑みを浮かべた。……本当に、信じがたい。

「素直ですね、それなら教えてあげましょう。ただし、その前に貴女の報告を聞かせてください」

「了解しました」

そういつてセティスが一礼をする。

「ご命令通り、彼女……ミハル・トウマの転入時の様子を伺ってきました」

「様子はどうでしたか？」

「断言します。……彼女は、異常です」

予想通りの返答だった。

「通常、全ての人間に好意を持たれる事は不可能です。それは、たとえどんな人間にも例外ではないでしょう」

セティスに対して首を振って、続きを促す。

「彼女は間違いなく……初めて出会ったはずのAクラスの全ての生徒に、好意を持たれて居ました」

「……例外は？」

「確認しましたが、ありませんでした」

その報告に、私は笑みを浮かべて頷く。セティスがそう言うので

あれば、間違いは無いのだろう。

そして、これだけそろっているのならば、もはやそう信じるより他はない。

「貴女がそういうのなら、その報告に間違いは無いんでしょう。調査の協力、ありがとうございます」

「あの……それで」

「?……ああ、そうでしたね」

改めて私が持っていた資料を開く。それはイセリナからの報告だ。

「彼女はね、魔獣に襲われない性質を持っているそうです」

「……はい?」

「彼女が居るだけで魔獣は近寄らず、彼女が来るだけで魔獣は去っていく。……そう、まるで、彼女自身が魔獣避けでもあるかのよう」

「……信じられません」

セティスが顔をしかめる。

「私は、貴女の報告も全て含めて考えて……彼女が、常に周囲に【魅了】を掛けているのだと思っています」

【魅了】の魔法は、人に対して好意を抱かせる魔法だが、魔獣に對して使った場合は何故かその魔獣が逃げ出すと言う効果を持っている。

「そんな馬鹿な。報告では、彼女はまだ魔法を使えないはずです。それに、彼女に魔法を使っている形跡はありません」

「そうね。でも、私達は知っているはずですよ？」

何を、と言いかけたセティスが眼を見開く。

「例のあの人と同じ、魔力を使わずして魔法を発動させる……もしくは意識もせずに常時発動させることが出来る、特異体質の事……ですか」

「そう。アレは既に自覚していますが、彼女はきっとこのことを自覚していないでしょうね」

自覚していれば、それこそ国でも世界でも容易く支配できるだろう。彼女のそれは、それほどまでに危険なのだ。

「しかしそうになると、貴女には辛いお仕事になりますね」

「……いえ、かまいません」

彼女に与えた仕事は観察すること。しかし、たったそれだけでも、彼女はえもしれぬ罪悪感に襲われるはずだ。

……そう、彼女の真の恐ろしさは、自分に牙を向けようとする相手を事前に封じ込めてしまうことにある。人も魔獣も、自らが好意を抱く相手に、牙をむくことは出来ないのだから。

ために、私は彼女を倒す方法を考えてみる。……考えようとするだけで私の思考は停止し、彼女に対する罪悪感で心が満たされた。つまりはそういうこと。彼女に出会った人物は例外なく彼女を傷つけようとすることは出来ない。出来るとすれば、傷つけることが愛情表現なのだと勘違いしている輩ぐらいだろう。

「このことは、国に報告するのですか？」

「不思議なことを言いますね。それは、本来国からの監査役である

貴女が決めることでしょう?」

自分で言っておきながら、意地の悪い言葉だと思った。そんな権利など、既に私達には無いと言うのに。

閑話休題 ある少女に対する考察（後書き）

以上、主人公ミハルに対するカルナさんの考察でした。

ミハルのチートっぷりと、ミハルに対する周囲の好感度が妙に高い理由をカルナさんが語ってくれています。

ちなみに、セティスさんはミハルが学園に入った時に初めて出会った受付の人です。

……そういえば、今回はシリアス全開ですね。あまり暗い話ではありませんが、いつものコメディ色を期待された方は申し訳ありませんでした。

第16話 不思議な交渉（前書き）

紳士注意。

主人公壊れ気味注意。

第16話 不思議な交渉

普通、授業と聞けば教師が黒板に学ぶことを書いたり、参考書を見ながら言ったことを生徒が覚えることを言うと思う。

あるいは……教師と生徒が協同で、新しいことを覚えていく。少なくとも、俺の認識はそれで間違いないはずだ。

つまり、何が言いたいかというと、

「今日こそ、その体を吹き飛ばして、普段の言動を反省させて見せますわ!!」

「甘い甘い甘いぞ!!その程度では、俺の心どころか、体に響かせることも出来ん!!」

少なくとも、こんな口上が繰り返られるような授業は、授業とは言わん。

生徒達からレオナルド先生へと、大量の光の弾が飛んでいく。そしてそれを、仁王立ちのまま片っ端からかき消していく先生。

開始早々、授業は非常に力オスな展開へと移っていた。もちろん、原因はレオナルド先生である。

……まあ、入ってきて早々、今日は女子は全員おにいちやんと呼べー！とか叫べば、そりゃあブチキレもするわな。

かくいう俺も呆れ気味。女子の中で否定的じゃないのは、フォルぐらいだろうか？

「わあゝ、きらきらして、綺麗だねゝ」

といつても、フォルはフォルでこの状況を楽しんでいる訳だが。次々と、光の弾が生み出されては先生にかき消されるという、この危険極まりない状況を見てもなお、その感想なのだから恐れ入る。

「はっはっはあ、どうした？俺の体を吹き飛ばすんだろう？まだ俺に、一発たりとも当たってないじゃないか！」

「くうゝ……この化け物！一体貴方はどうなってるんですのっ！！」

余裕の表情を見せる先生に対し、生徒達は既に疲労を見せ始めている。様子を見る限り、どう見ても生徒達の方が分が悪い感じた。

そんな中、ふと俺とフォルが参加していないのに気づいたのか、先生が俺達に声を掛けてきた。

「お、ミハル君とフォルカ君は、参加しないのかな？もし一発でも俺に当てれたら、何でも言うことを聞いてやるぞ？」

参加しろつつたつてなあ……フォルは知らないけど、俺は魔法をまだ覚えてないし。かといってこんな弾幕の中、接近戦を挑むと

かありえんし。

大体、全ての魔法を直前でかき消してる時点で、俺がどうこうで
きるような相手じゃ……ん？待てよ？

ふと、ある事を思いついて先生や生徒達の様子を注意深く見てみ
る。……ふむ、この様子なら、試してみる価値はあるか。

「えっと……確か、メイフィールドさんだったっけ？ちよつとこっ
ちに来てくれないか？」

「……？何ですの？一体」

表情に疑問を浮かべつつ、メイフィールドさんが近づいてくる。
一応先生に聞こえないように、思いついたことを聞いてみた。

「はあ？それは確かに出来ますけど……そんなことして意味などあ
りますの？」

「いいからいいから。後、ちよつとみんなに合図して、一斉に魔法
を撃つようをお願いしてもいいか？」

「……仕方ないですわね。悔しいですけど、このまま続けていても
こちらが消耗するだけですし、貴女の策とやらを見せていただきま
すわ」

まだ納得した様子ではないが、明らかに不利な状況ということも
あるからか、俺の提案を承諾するメイフィールドさん。

「はっはっは、作戦タイムかい？先生としては、どんな策で来ても
かまわんぞ？」

そして、仁王立ちのまま余裕の笑みを見せる先生。死角から飛ん
で来た光の弾をかき消すあたり、その余裕は本気なのだろう。

「じゃあ、お願い」

「分かりましたわ、みなさん！今から合図を出しますので、その合図に従って一斉に魔法をお願いしますわ！！」

メイフィールドさんの掛け声に、全員が頷く。教室内に、緊迫した空気が流れ始める。

「ふっふっふ、魔法を集中すれば俺に届くとしても？まだまだ甘い」
「甘いかどうかは、やって見ないとわかりませんわよ！！今ですわ！！」

メイフィールドさんの声にあわせ、ざあっと、教室中に光の弾が浮かび上がる。そして、それらが一斉に光の軌道を描きながら先生に向かって飛んでいく。

「はっはっは、きちんと魔法を合わせられたのは見事だが、それでも俺には届かないな！！」

先生の言うとおり。集中して打ち出された光の弾ですらも、先生の前にあっさりとかき消されていってしまう。

光の弾幕が薄れ、仁王立ちの先生が姿を見せ始める。

ダメか……と誰かがつぶやいた。生徒達に、諦めの色が広がっていく。だが、

「はっはっはぶへっ！？」

先生の高笑いが途中で止まり、今までとは違うゴキッという音が教室中に響き渡る。

諦めの表情を浮かべていた生徒達が、呆然とその様子を眺める。作戦が成功したことを確認した俺は、ひそかにガッツポーズを取った。

「ぐ、つはあ……」

頭を押さえ、そのまま倒れこむレオナルド先生。……さすがにちよつとやり過ぎたか？と、後悔が生まれた。

「ハルちゃんハルちゃん、今のはちよつと、やりすぎだと思うよ？」
「そ、そうだよな。ごめん、さっきまでのを見てたら、あれくらいなら大丈夫じゃないかと思っただけ……」

「うん、後でちゃんと先生にも謝らないと、だよ？」

たしなめるようなフォルの声に、俺は素直に従う。さすがに、頭を押さえながら痙攣をしている先生を見ると、やりすぎとは思えん。

……つか、あのまま死なないよな？レオナルド先生。さすがにこんな冗談みたいなことで人殺しになるとか、すっごい嫌なんだけど。

「ええつと……い、今のは一体何なんですの？」

「え？何って……見たとおりなんだけど」

そうとしか言いようが無い。そもそも、俺がやった事を補佐した

メイフィールドさんが、それを聞くのはおかしいと思うが。

「私が聞いているのは、そういうことじゃありませんの。私は、一体どうやって、あのダメ教師の頭に椅子を直撃させたのかを聞いてますの！」

そう、俺がやったことは簡単。単に座ってた椅子を、レオナルド先生に投げつけただけ。

もっとも、俺の力だけではぜんぜん届かないので、メイフィールドさんに魔法を使ってもらって、精度と威力を格段に上げてもらっている。……まあ、それが原因でやり過ぎになった気もするが。

「いや、見ていて何となく思っただけなんだけどさ。みんな、あの先生に対して魔法しか撃ってなかっただろ？」

「え、ええ。そうですけど」

「俺は魔法についてはぜんぜん知らないけど。クラス全員の魔法を受けて、それでもそれを余裕で防いでるって事は、何か秘密があるんじゃないかって思っただよ」

「何かって、何の……ああ！まさかっ！？」

どうやらメイフィールドさんも、俺と同じ考えに至ったようだ。

「それで、ために魔法攻撃に椅子という物理攻撃を混ぜてみたら……こうなっただけだ」

まあ、目くらましと、魔法を集中させるのが策だと思わせる引っかけがあっただにしても、先生は少し油断しすぎじゃないかと思う。

「……盲点でしたわ。まさか【絶対魔法防御】を使っていたなんて」
「これは、一本とられたね。先生にも、そして君にも」

いや、気づけ。それぐらい気づけ。つか少しは物理攻撃をしよう
と思え。後、ゼノガルド君はいつの間に近くまで来てたんだ？

「ってか、あの先生大丈夫なのか？さっきから痙攣してるんだけど」
「ああ、アレなら大丈夫ですよ」

そういうが早いか、むつくりと起き上がるレオナルド先生。……
って、何で無傷なんですか。明らかに、何かが折れるような音して
たよね？

「はっはっは、話は聞いたぞ？やるじゃないかミハル君、君の観察
力と作戦はまさしく見事だ！」

「あ、いや、すみません。挑発されたからといっても、ちょっとや
りすぎました」

「いやいや、気にすることは無いぞ？俺も、久々に生徒からの愛を
受け取って上機嫌だからな！」

……いや、気にしろよ。って言うか、椅子の一撃が愛って、本当
に変態紳士なんだな、こいつは。

「それに一撃を当てたのだから、約束どおり言うことを聞かねばな

るまい。さあ、何でも望みを言うのが良い！」

「……何でも？」

「その通りだとも！君が望むなら俺の肉体美を見せてもいいし、俺のすばらしい魔法の威力を見せてあげてもいい！」

……ふむ、まあ、ぶつちやけそんな望みなんてどうでも良いし。

生徒を挑発などしないで、真面目に授業をしてくれさえすれば良い。そう思って、口を開く。

「ちょっと待ちなさい、ミハルさん！」

だが、それをメイフィールドさんが押し留める。……？何か、叶えて欲しい願いでもあったのだろうか？

「おっと、メイフィールド君は何も言うてはいけないよ？他の生徒達も同様だ。君らが何かを言えば、それはミハル君の願いではなくなってしまうからね。そうなってしまえば残念だが、俺にはその願いを叶えるつもりは無い」

「くっ……」

ん？何だそりゃ。別に誰かが俺に叶えて欲しい願い事を言ったからって、俺がその願い事を採用するかは分からないだし、わざわざ釘を刺す理由なんて……

いや、待てよ？ひょっとして、こういう機会は以前にもあったのか。まあ、この先生の性格からして、俺とフォルだけにあんなことを言うとは思えんしな。

俺はメイフィールドに軽く視線を向ける。若干の怒りと憤慨が、その表情から見て取れた。……ふむ。

「まあ、俺は今日転入してきたばかりだし、先生に願うこともそんなに無いけど……あえて言うなら」

まあ、これは転入してから最初の授業を見て、誰もが思うことだろう。

「先生には、生徒を挑発したりせずに真面目に授業をして欲しい」

それを聞いて、先生の笑みがいつそう深まっていく。……やはりそうか。だが、甘いな。お前はその願いを、即座に了承するべきだったのだ。

「ただし、基準は俺達生徒の基準で。先生の基準で真面目だったとか、先生の基準なら挑発じゃないとか、そんな戯言は許さんから」

ピシッと先生の笑みが凍りつく。やはり、その逃げ道を考えていたか。いや、むしろ実際に実行していたのだろう。先ほどの、メイフィールドさんの様子を見る限りは。

しかし、これだけではまだ一步足りない。あくまでこれは口約束。そんな約束など忘れた……などと言われる可能性はあるのだ。だから、もう一手何か欲しい。

俺が知っている先生の情報は、正直少ない。それでも、その中から何とか弱点を探り出してみる。

恐らく変態紳士である以上、物理や魔法問わず攻撃は無駄だろう。むしろ褒美だとか言いかねない。まあ、変態紳士である奴が恐怖するものなんて、そうそう……ん？紳士？

ふと、俺はある方法を思いついた。奴が言っていた事を考えれば、失敗はしないはず。後はその策を用いた場合のリスクと……反応ごとの対処方法。

……これなら、いける。

「とはいっても、これはあくまで口約束。簡単に破ることは出来ると思う。……だから、この約束を破った場合、先生には罰を受けてもらうことにする。いいな？」

「お……？おお？ああ、いいだろういいだろう。どんな罰でも、先生は喜んで受け付けるぞ？」

凍りついた表情を復帰させ、再度笑顔を取り戻す先生。罰と聞いて、約束を破っても大丈夫になりそうだとでも思ったのだろう。

大半の苦痛をご褒美とし、喜ぶであろう変態紳士にとっては、罰という存在は願ったり叶ったりだ。むしろ、率先して約束を破りに来るかもしれない。

……だが、それは甘いな。俺はお前の望む罰をくれてやるほど、無知ではないのだ。

「ああ。罰の内容は簡単だよ。お前に、俺を襲わせるだけだ。……
そう、もし約束を破れば、俺はたとえ無理やりになでもお前に俺を襲
わせるからな」

そういつて、俺はにやつと笑う。一瞬の静寂の後、教室中に困惑
が広がっていくのを、俺は黒い笑みを浮かべながら感じ取っていた。

第16話 不思議な交渉（後書き）

というわけで……すみません、石を投げないでください。

ミハルが十分壊れてます。でも、これはミハルなりに考えた上での策なんですよ。

ということで、詳しいことは次回判明するはずです。

第17話 ミハル式紳士限定脅迫術

「なっ なっ ……何を言ってるんですの！貴女は！！」

真っ先に立ち直り、反応したのはメイフィールドだった。まあ、言いたいことは分かる。

「あ、あ、ああああのダメ教師に、あ、貴女を、お、おお襲わせるなんて……そんな、そんな事、私は絶対に許しませんわ！！」

「ハルちゃん、襲わせるって、どういうこと？先生、ハルちゃんを傷つけたりするの？」

あ、しまった。フォルに対する説明って言うかフォローは考えてなかった。

「大丈夫。あの先生が、俺を本気で襲ったりするわけ無いだろ？だから、先生が俺に対して暴力を振るったりはしないし、俺も怪我をしたりはしないさ」

「そっか……うん、そうだよ。びっくりしたよ」

「ああ、すまん。フォルちゃん」

「ちょ、ちょっと待ちなさいっ！私を無視するんじゃないありませんわよっ！！と言うかですね、何故そんなことが言い切れるんですの！！」

何とかフォルを納得させ、俺は安堵の息をつく。だがそこに、まだ納得していないメイフィールドが割り込んで来た。

……いや、メイフィールドだけじゃないな、クラス中の生徒達が、

納得していないと言った様子で俺のほうを見て来ている。まあ、そりゃそうか。

「ん、とりあえず説明する前に……まあ、アレを見てみ？」

そういつて、俺は先生を指差す。それにつられて、教室内の全ての生徒の視線が先生へと向けられる。

「……あ、ありえない……そ、そんな、この、俺が？馬鹿な……そんな事、あつては……」

そこには、まるでこの世の終わりを見たかのように顔面を蒼白にし、頭を抱えて振り乱すレオナルド先生の姿があつた。

「……アレは、一体何をしてるんですの？」

「いや、見れば分かるだろ？どう見ても、精神的に致命傷を負ってるようにしか見えないはずなんだけど」

理解できないと言った様子のメイフィールドに対し、俺は見たままを答える。

「そ、そういうことを言ってるわけではありませんわよ。私は何であのダメ教師があそこまで追い詰められてるか、それを聞いているんですの」

ふむ、まあそう来るだろう。効果は一目瞭然だが、なぜ俺がその

一手を打ち出せたのかは、恐らく理解できないだろうし。

「いや、大した理由ではないさ。カルナさんから聞いた話によれば、先生は生徒に手を出さないことを公言し、遵守してるんだろ？」

「ええ、まあそうですね……って、ひよつとして」

「だったら、それを崩すことを目的とした罰にすれば、ダメージを与えられるんじゃないかって思ったんだよ」

実際はレオナルド先生が紳士であることを確認し、紳士協定を語ったのがそう思った最大の理由なんだが。……まあ、さすがにそれは説明できん。

「なるほど、いや、しかしだね？もし先生がそれに乗って、君に手を出してきたらどうするつもりなんだい？」

「そ、そうですね。あのダメ教師が、生徒に……貴女に手を出さないって言う確証なんて、なかったのではないですの」

いやまあ、そのあたりは今までの言動に対して信用した。と言うしかないのだが、確かに俺も万に一つを考えなかった訳じゃない。紳士だからと言って、誰もが誘惑に耐えられる訳ではない。自分の欲望に負け、卑劣な犯罪に手を染めてしまう人間だって、確かにいる。

そういう点では、レオナルド先生って真正の変態紳士なんだよな。襲うじゃなくて襲わせるなのに、あそこまで苦しむと言うのは相当だ。

……ん？むしろ逆に、一瞬でも襲いたくなってしまったから……一瞬でもそれを想像してしまったから、苦しんでるのか？まあ、そこは先生にしか分らんことだし、どうでも良いか。

「まあ、万に一つも無かったと思うけど。もし、そうなつてたら簡単だ。それをカルナさんに^{チクれば}告げれば良い」

「へ？」

「カルナさんが言つてたんだよ。あの先生は、言動はともかくとして生徒に手を出さないことは遵守していると」

「え、ええ。そうですね……それが何か関係ありますの？」

俺の言つてることが理解できない、と言つた様子の二人。

「あの先生が教師でいられるのは……もちろん、優秀だからつて言うのもあるだろうけど、無害であることが一番の理由なんだよ。カルナさんはあの先生を、明らかに毛嫌いしているだろ？」

「まあ、そうだね。学園長先生の先生に対する仕打ちは、僕でも考え付かないようなものが多いし」

「だったら、俺が手を出されたと言う事実が出来れば、あいつはここにはいられなくなるだろ。……むしろ、カルナさんの今までの鬱憤を晴らすべく、消滅させられるかもな？」

そう言つて、俺はにやつと笑う。我ながら、酷い手を考えたものだと思う。

ここで、俺から誘つてゐる事実があるんだから……などと言う人がいるかも知れない。が、俺は中身はともかく、見た目は10歳ほどの子供なのだ。どんな理由があつても、手を出した時点でアウトである。

しかも、真面目に授業をするかとの二択を迫つて手を出す方を選択するということであれば……まあ、酌量の余地はあまりあるまい。

俺は、本来教師がすべき事を要求しているだけなんだし。

もちろん、この策には一つの穴がある。それは最悪の場合、俺が襲われるのが確定していること。

だがまあ……幸いなことに、俺の中身は男だ。男としての急所は十分熟知しているし、男の裸を見るだけで恐怖に震えて何も出来なくなるって事も無い。

……いや、んなもん見たくねえし、見ずにすむならそれに越したことは無いんだけどさ。それに、俺だって男に襲われる事自体は嫌だし。

教室内が、しん……と静まり返る。生徒達の表情を見る限り、俺の説明には納得してもらえたようだ。

「いやはや……恐れ入るね。この学園に来て、たった一日足らずでそんな事を考え付き、実行できるなんて」

感心したようにつぶやくゼノガルド君。……何か、過大評価して無いか？

「そんな大したことじゃないだろ。俺なんて、ただの一般的な市民だよ」

「ははっ……それこそ冗談だろう。僕は、君の年齢でここまでの無謀ともいえる勇気を見せた人物なんて、聞いたことも無いよ」

「知ってるか？勝算がある策なら、それは無謀とは言わないんだよ。この程度なら、アレの事がある程度知つてれば勝算の判断くらい十分つけれる」

そういつて俺は先生を指差す。

「何を言ってるのさ、その観察力に関しても君は素晴らしいじゃないか。通常、罰と言えば痛みを与えるのが普通だろう？」

「まあ、そうだろうな」

「だが、君は先生には、それが通じないことをあつさりで見破っていた。さらに、たとえ気づいていても通常感覚なら実行できないであろう策を実行した」

……いや、それは単に紳士の共通の弱点というか、紳士協定を逆手に取っただけでしかないんだがな。

あ、後、紳士であっても全ての痛みが大丈夫って訳でもなくて、前歯をクキツとやられたりするのダメらしいね。まあ、個人差はあるだろうけど。

「まったく、君が一体何をして来てそこまでの知識と度胸を積んできたのか、興味が尽きないね」

「そこまでになさい。ミハルさんへのそれ以上の詮索は、私が許しませんわよ？」

ゼノガルド君の言葉をさえぎるように、メイフィールドさんが割って入ってくる。

「人には、思い出したくない過去や、暴かれたくない過去があるものですわ。それを詮索するのは、失礼と言うものではなくて？」

「……確かにそれはそうだね。すまなかつたね、ミハル君。どうか、僕のぶしつけな言葉を許してくれたまえ」

「あ、ああ。それは別にかまわんけど」

過去つつたつて、俺の過去にそんな……あ、いや、止めよう。
結構なトラウマがあるわ。俺。

「そんなことよりも、ミハルさん？ 貴女に、約束して欲しいことがありますの」

「？……何かあったのか？」

怒ってるような、心配しているような、何か複雑な表情を見せる
メイフィールドさん。

「もう二度と、あのような事を言わないと約束しなさい。乙女が、
その、襲わせるだの……決して、言うてはならないことですわ！」

あ、あ………そういや、俺の外見を考えればあの言葉は確かにま
ずいか。いや、そんな易々と口に出す言葉でも無いけどな。

何せ俺は中身は男のままだ。体は女の子になっても、男に抱か
れたいとは思わないし、思いたくも無い。

それに今回は偶々条件が重なった結果こうしただけであり、一般
的に考えれば公衆で体を使った交渉など下策以外の何者でもない。
成功しても、周囲の評判も下がるだろうしな。

……まあ、たとえ秘密裏だったとしてもやりたいとは思わんが。

と、そんなことを考えている間に、いつの間にかメイフィールド
さんが俺の顔に手を伸ばしてきていた。メイフィールドさんの指が、
優しく俺の顔をなぞりだす。

「この可愛らしい顔が、綺麗な紅色の眼が、さらさらで美しい銀色の髪が、小ぶりな耳が、唇が、そして、触れれば壊れてしまいそうなほどに儚い肌が！あの様な汚らわしい男に汚されるなど……」

あ、あの……メイフィールドさん？貴女ちよつと今何を考えて……いや、ちょ、本気でその顔怖いです。

「断じて！許されることはありませんわ！！ミハルさん！！」
「は、はいっ！？」

「アウストレーゼ家の娘として……いえ、メイフィールド・D・アウストレーゼとして、貴女に命令します！！あのようなことは、二度とおっしゃらないください！！いいですね！？」

「は、はいっ！わかりましたっ！！」

完全に勢いに飲まれる形で承諾する。うん、無理。今のこの人には逆らえない。逆らっちゃダメとしか思えない。

「まったく、分かればいいんですの、分かれば。……それと、貴女の口調だって、出来れば直して欲しいんですのよ？」

うげ、まだ終わってなかったか。

「いや、んなこと言われても……もうこれに慣れちまってるしな」

街の人たちにも言われたことはあるが、慣れてしまっている以上はしょうがない。無理に直すのも面倒だし。

……それに、もし元の世界に戻れるとするなら、この口調のままじゃないと困るのだ。万に一つでも、女の子の口調をあのお馴染みや妹に聞かれようものなら、一体どうなることが……。

そんな事を考えていた俺の表情から、何かを読み取ったのか、メイフィールドさんが軽くため息をつく。

「はあ、しょうがないですわね。無理強いはしませんわよ」

「悪いな、不快な思いをさせちゃって」

「別に、不快などとは思っていませんわ。ただ、単にもったいないと思うだけですから」

そういつて、メイフィールドさんが俺の髪を触る。さらさらと髪の毛が流れる。

「この可愛らしい容姿に、見事な服装。鈴を奏するような声に、脆く、儚さを演出する青白い肌……。後は口調さえ相応しいものに変えてしまえば、完璧でしたのに」

……そういえばすっかり忘れていたが、俺の服って、あの黒ゴスロリ服で固定されてるんだよな。いつ洗ってるのかは知らないけど、いつの間にか汚れとかなくなってるんだよな……。

まあ、もう慣れたから、これを着て外に出るのは恥ずかしくは無いんだが。間違っても、元の世界に戻ったときにそういったのを着ないようにしないと。

って言うか、

「さすがにそれは持ち上げすぎ。メイフィールドさんのほうが、よっぽど綺麗だし素敵だろ？」

何より、さすがは育ちが違うって言うべきなのか、佇まいからして俺とは別格だ。

俺は育ちがそんなに良いわけでもない。つか元男なんだから、女の子の嗜みなんぞほとんど知らない。

……特に初めてのトイレのときなんか……いや、止めよう。あの事はこつちに来てからの、最初にして最大の黒歴史だ。

「な、何を言ってるんですの。そ、そんなことはありませんわよ」

「だって、佇まいとか優雅だし、いかにも綺麗な女の人って感じで俺じゃあそんな雰囲気は出せないからなあ……」

「そ、そんなもの、貴女だって学ばば容易いでしょうに。何なら、私が教えて差し上げますわっ」

いや、そこまでしてもらわなくても……と思ったところで背中輕輕い衝撃が走る。

振り返ると、満面の笑みを浮かべてフォルが抱きついてきていた。

「えっへへ」

「ん？どうしたんだ？フォルちゃん」

フォルはいつもにまして、嬉しそうだ。何かそんな嬉しいこととかあったか？

「だって何だか、ハルちゃんにおねーちゃんが出来たみたいだもん」

……子供は時に、思いもしないような爆弾を放つ事があるという。

「み、ミハルさんが妹……？」

「い、妹だと！？」

フォルの放った爆弾は、見事にメイフィールドさんの何かに致命傷を与え、ゼノガルド君を巻き込み、これから起きる波乱を生み出していった……。

第17話 ミハル式紳士限定脅迫術（後書き）

はい、え〜っと…… 良い子は絶対に真似を…… え？誰も真似しない？まあ、普通そうですよ。

というわけで、以上がミハルが暴拳に出た理由です。恐らく普通の感覚の人には実行不可能だと思いますが、元々周囲が変態ばかりだったのと、元男だったという理由からやらせてみました。

…… 作者が、こういうのを書いてみたかったというのもありますが。

ちなみに、ミハルは自分の事を常識人だと思っっていますが…… さて、みなさんにはどう映っているのでしょうか？

第18話 兄姉の資格

「い、い、妹……私に、妹……」

「み、ミハル君を妹……」

「おいおいフォルちゃん、さすがにそれはないだろ？」

何やら、メイフィールドさんがぶるぶると震えだしているが、今触れると危なそうなのでとりあえず放置。というか、何かゼノガルド君も挙動が怪しいんだけど。

「えゝ？何でゝ？」

「メイフィールドさんは、単に世話好きなんだから。今ので妹とか言ってたら、それこそクラス中が兄弟姉妹だらけになるだろうが」

一瞬頭の中に、『人類みな兄弟』とかいう意味不明な単語が思い浮かぶが、即座に切り捨てる。というか意味が違う。

メイフィールドさんは単純に、本当に世話好きなのだろう。そうでもなければ、転入早々の俺達に対してこうも世話を焼こうとも思わないはずだし。

事実、クラス長をやったり、クラスの指揮をしていたところから見てもそう思う。若干の言葉のきつさはあるが、それはきっと彼女の思いやりの裏返しなのだろう。

「うゝん……良く分からない」

「別に姉じゃなくても、友達でも良いだろ？……あ、いや、初日から友達を名乗るのは少し傲慢かも知れないけどさ」

二人から見れば、まだ俺たちはただの知り合いだろうし。そんなに早く友達を名乗れるとも思っていない。

……そう考えれば、先ほどの兄姉とか激しく失礼だったんじゃないだろうか？

「そ、そんなことはありませんわっ」

「そうだとも！君が友達を名乗り出るのであれば、僕等はそれを否定したりはしないっ」

あ、いやまあ、二人がそういうならそれでいいんだけどさ。俺としては、二人は十分信頼できると思うし。

「えへへ……じゃあ、メイフィールドさんとゼノガルド君は、もうお友達なんだね」

「ま、二人がそれで良いなら、そうだな」

「ちよっちよっと、お待ちなさいっ！」

結論付けようとした俺達に、復活したメイフィールドさんの横槍が入る。

「ん？ああ、やっぱり嫌なのか？」

「え？……お友達に、なつて、くれないの？」

「だ、誰もそんな事を言ってませんわ！！」

涙目で上目遣いに覗き込むフォルに、あわてて否定するメイフィールドさん。

……いいけどフォル。それかなりダメージ大きいから、最後の手段にとっておいた方が良いと思う。というか、何故か横で見ていた俺もいたたまれなくなつて来るし。

「わ、私が言いたいの……その、……………ですわ」
「?ごめん、ちょっと聞き取れなかった」

メイフィールドさんが顔を真っ赤にして、体を震わせていく。あ、あれ?俺なんかメイフィールドさん怒らせたか?

「ですから!私が貴女の姉になってもいいといってるのですわっ!」

……………は?

「え…………と、それは何でまた?」

いやだって、おかしいじゃん。え?妹ってことは義妹になるわけ?でも、俺って異世界から来た元男だし、それなら義弟ってこと?あ、いやそうじゃなくて。

混乱した頭を振って、思考を取り戻す。そこでふと頭にあるもの
が思い浮かんだ。

…………と言っても、ここは女子学園じゃないし。俺は『ごきげんよう』とか挨拶したり、ロザリオをもらったりするような趣味は無いぞ…………あまり神様とか信じてないし。

「な、何でってその…………あ、貴女が私の妹ってことなら、貴女の口調を直すのが正当化できるじゃないですのっ」

何その理由。この人は俺の面倒を見るためだけに、俺を妹にする気なのか……何というか、もうこれは面倒見が良いと言うレベルを超えてる気がする。

「待ちたまえ、ミハル君を妹にするのは僕だ！僕の元、ミハル君は淑女として必要な勉強をしていくべきだっ！」

「何を言ってるんですの！私の妹を、貴方のようなケダモノに任せれるわけが無いでしょう！？」

「何をっ！？僕が妹に手を出すような、下郎に見えんでも言つつもりなのかね！！」

……おい、何か勝手に妹で決定されちまってるぞ？っていうか、俺の意思は？つか、ゼノガルド君。あんたは確か、さっきまでもうちよつと冷静じゃなかったか？

ひよつとして妹という言葉が、何らかの琴線に触れたとかか？生まれるはずだった妹が……とか。

「ハルちゃん。ハルちゃんに、新しいおにゅちゃんとおねゅちゃんが出来たよ？良かったね♪」

「いや、良く無いだろこれ？っていうか、二人ともいきなり喧嘩を始めるなってば」

俺の制止も聞かず、二人の言い合いがエスカレートして行く。二人とも、今にも魔法でも使いたして来そうでかなり怖い。

「止めないで欲しいですわ！姉として、妹の貴女に手を出そうとする不逞の輩を、見過ごすわけには参りません！！」

「まだ言うのかね！！僕も兄として、妹への純粋な愛を侮辱する者は見過ごせない！」

「……だから、何でもう既に妹扱いなんだよ」

この二人はまだ、常識的な方だと思っていたのだが……とりあえず人の話を聞けよ。後、二人とも俺の意思ぐらい確認しろ。

そんなことを考えていると、二人の目前に、長方形の光る板のようなものが浮かび上がる。おい、これってまさか魔法か？！

「覚悟なさい。今日こそ貴方に、裁きの鉄槌を下して差し上げますわ！」

「ふ、それはこちらの台詞さ。今日こそ君を、僕の前に跪かせて見せる！」

二人の目は明らかに本気である。というか、こんなところで魔法を使われたりしたら、俺どころかフォルまで巻き込まれるだろうがつ！

「待てっ！二人ともいい加減につ！！」

バンッ

教室中に何かを叩きつける音が鳴り響いた。……これは、俺が出した音ではない。

「一体何をしているのかしら？お二人さん」

教室中の視線が、教室の出入り口へと集中する。そこには、険しい表情でうつすらとオーラを漂わせるカルナさんの姿があった。

「まったく……互いをライバルとし、研鑽を積むのはかまいません。しかしそれは、当たりかまわず魔法を撃って良いということではないのですよ?」

「か、返す言葉ありませんわ」

「僕も、少し頭に血が上りすぎていたようです」

カルナさんの言葉に、二人が青ざめた様子で反省をする。

俺達から事情を聞いたカルナさんは、それからずっと二人に対しての説教を続けていた。

「大体、ミハルさんの為だとおっしゃっていましたが……あの場で魔法を撃てば、巻き込まれていたのは当のミハルさんだったのですよ?」

その一言に二人が目を見開く。……確かにあの位置だと、確実に巻き込まれていただろうな。

「頭に血が上っていたとはいえ、守るべきものを傷つけてしまうのでは本末転倒です。魔法を扱うものは、常に冷静さを忘れてはならないはず。それは、二人とも理解していますね?」

「はい……」

メイフィールドさんとゼノガルド君が、がっくりと肩を落とす。

俺を巻き込みそうになったと言う事実は、どうやら二人に重くのかかってるようだ。

「ミハルさんの兄や姉として、頑張りたいと思う気持ちは分かります。ですが、」

「ちょっと待てい。あんたまでもがそう言うか」

とりあえず、聞き流せないことを言い始めたので会話に割り込む。このままだと、本気で妹化が既成事実になれかねない。

「ミハルさん、今は二人の説教を」

「いいから聞け。何度も言うが、俺は二人の妹になるつもりは無い。それは二人が勝手に言い出したことだろうが」

「なっ！？わ、私が姉では、不服と言いますの！？」

「ぼ、僕では君の兄としては不足だというのかい！？」

いやお二人さん。不服とかそういう意味じゃなくて、とりあえず考えろ。

会ってからまだ一日も経っても居ないのに、突然妹にされるとかどんなだよ。しかも、俺が養女になるとかそんな話でも無いし。

「あら、そういうことでしたか。でしたら、私から簡単な解決策を提示しましょうか」

「解決策？いや、そもそも」

「私から見ても……二人は、ミハルさんの兄や姉には相応しいとは思えません。兄や姉というものは、常に妹の事を考え、守り通すもの。たとえば何があるうとも、危害を加えてしまうなど論外でしょう」

んなアホな。そんな常識聞いたことも無いし、そんな常識を適用

されたら、俺は素で兄失格になるじゃねえか。

っていうか、この世界の大半の兄や姉は失格になるんじゃないのか？それだと。あと、さりげなく妹だけなのな。弟の場合は適用外か。

「そ、そんな……今の私では、まだ、足りないと言ったことですね……」

「く……悔しいけど、今の僕は、まだまだ未熟と言うことか……」

お二人さ〜ん？何を真に受けてるんですか〜？ほんとこの人たち、誰かどうにかして。

「諦める必要はありません。貴方達はまだまだ成長するのでしょうか？それとも、彼女を置いて諦めてしまうのですか？」

いや、諦めて欲しいんだけど。後、カルナさん。二人をたきつけるのは、止めて欲しいんだけど。

ゆらり……とメイフィールドさんとゼノガルド君から、オーラのようなものが立ち上がる。二人の目が、鈍く輝いた。

「諦める？このメイフィールド・D・アウストレーゼたるものが、諦めるですって？ありえませんか。この私が妹……いえ、ミハルさんを置いて逃げ出してしまうなど、死にも匹敵する屈辱ですわー！」
「諦めるだと？ふっ……このゼノガルド・C・トロイホース。随分となめられたものだね。だが、今はその屈辱に甘んじよう。その屈辱を元に、必ずやミハル君の兄となるための力を、僕は掴み取ってみせる！ー！」

……何で、そこまで必死になるのか分からない。後、カルナさんも、満足げな表情で頷く。

カルナさんに対して非難の目を向けると、カルナさんが満面の笑みを返してきた。思わず、ため息を付いてしまう。

「あら、ため息をつくとき幸せが逃げてしまいますよ?」

「その原因を作った方が、一体何を言ってるんでしょうかねえ? 二人をこんなに炊きつけて、どうするつもりなんだ?」

「私はこれが、この現状を解決するもっとも良い方法だと思ったのですよ。これは貴方にとっても、悪い話ではないはずですよ?」

いや、悪い話じゃないって、もう二人俺を妹にする気満々じゃないか。

「二人は、貴女のために強くなることを決意してますから。貴女にとって利益になることはあっても、害になることは無いはずですが?」

「いや、俺のために……とかは、本人の自由だから別に構わんのだがな? 成立すると、もれなく兄と姉が生まれるのが問題であってな?」

「そうですか。まあでも、こうなってしまった以上、もうあの二人は止められません。諦めなさい」

「いきなり諦める宣言!? もうちょっとカルナさんが責任ぐらい取れよ!!」

たきつけるだけたきつけて、こっちに丸投げするとか……カルナさんは鬼かつ!?

「では二人とも、貴方達が兄や姉として相応しいかどうかは、ミハルさんに決めてもらいます。これはミハルさんも関わることでずから、かまいませんね？」

「はいっ」

「もちろんだとも」

ちよっそのまま無視して、いつの間にやら審判役まで……って、あ、そっか。

カルナさんがこっちを見てクスリと笑う。なるほど、初めからそうするつもりだった訳ね。確かにそれなら俺としても問題は無くなるか。

審判約が俺なら、基本的に俺が認めるまでは妹にならずに済む。どうしても嫌なら、ずっと認めなければ良いんだし。

……しかし、何か俺をダシにされた気がしてしょうがないんだが。カルナさんとしては、二人が奮起するなら万々歳なんだろうけどなあ……。

「ミハルさん」

俺の思考を、メイフィールドさんの言葉がさえぎる。振り返った俺の手を、両手でそっと包み込む。

「今はまだ、頼りないかもしれませんが、必ずや貴女の理想の姉になつて見せますわ。その時を……ご期待なさいませ」

そう言つて、少しだけ恥ずかしそうに笑うメイフィールドさん。

その笑顔を見て、まあいいか。と少しだけ思った。きっとこれを引き金としているんな騒動が起きるだろうけど、騒動^{そんなの}なんてとつくに元の世界で慣れている。

なら、こんな学園生活だって悪くはないかも知れない。そんな気持ちを込めて……俺はそつと、メイフィールドさんの手を握り返した。

第18話 兄弟の資格（後書き）

最近、大体1日1本ぐらいのペースになってきました。
しばらくは、このペースを維持しようと思います。

第19話 空回りと茶番劇

「さて、話が綺麗にまとまったところで、私がここに来た本題をお尋ねしたいんですが」

そういつて、カルナさんが一点を指差す。

「……一体、何がどうなつてこの有様になつたのです?」

その先には、今までの騒動の間も復活することなくもだえ続けるレオナルド先生の姿。

「えっと、それは若干説明しづらいことなんだが……」

そういつて、俺はメイフィールドさんをちらりと見る。説明するにはあの言葉を言わねばならず、それに関しては既に釘を刺されている。

「……いや、言ってしまうと確実に、カルナさんからも怒られそうな気はするけど。」

「はあ。しかしこのままという訳にもいきませんし、コレを復活させるためにも説明をしていただけませんか?」

「ああ、確かにこのままだとまずいな。……よし」

俺はいったんその場を離れ、レオナルド先生に近づく。メイフィールドさんが俺の動きに反応したが、ひとまずは置いておく。

「おい、とつとと復活しろ。俺との約束を破る気か？」

ビクツと一際大きく跳ねた後、ゆっくりと起き上がる。顔面蒼白で目はうつろのままだが、一応意識は取り戻したようだ。

「これで良いのか？カルナさん」

「これで良いと言える貴女の判断が不思議ですが……」

カルナさんは、どうやらまだご不満のようだ。……つてまあ、当たり前か。誰に聞いてもこれで大丈夫だと返す奴は居ないわなあ。しょうがない、これはこれでまたメイフィールドさんに怒られそうだけど、一つ手を打っておくか。

「ほら、しゃきつとしろよ。もしちゃんと授業をしたらごほうもがつ！？」

さらにレオナルド先生に対する餌を与えようとしたところで、突然後ろから口をふさがれる。誰かと思つて振り返ると、そこには顔を赤くして怒つて居る様子のメイフィールドさんが居た。

「むぐぐつ……ぶはつめ、メイフィールドさん？」

「貴女……今、何を言おうとしたんですの？」

う……少しまずいか。これは、恐らく俺が言おうとしたことを大体予測してる。

人道的というか道義的には若干問題のあることだし、メイフィールドさんの場合は俺がそれをするって言うのは反対されかねない。

「教えなさい。貴女、今あのダメ教師に何を言おうとしたんですの！？」

「あ、いや、それは……」

正直に言っただけでも困るので、俺は思わず口ごもってしまった。それが悪かったのか、メイフィールドさんの表情がどんどん険しくなっていく。

「私、言いましたよね？あの様なことは二度というなと。なぜ……なぜ、貴女はそう自分を犠牲にしたがるんですのっ！！」

メイフィールドさんの悲痛な叫び声が、教室中に響き渡る。

「貴女はまだ、幼い子供なんですのよ？そんな貴女が、何故そこまですごい犠牲をしたがるんですの！貴女の役割は、本来私達が背負うものでしょうっ！？」

……彼女が言いたいことは、分からなくも無い。俺の見た目が見た目だし、俺がやろうとしていることは、むしろメイフィールドさんの方が適任だと思う。……だが、

「ダメだ。今回に限っては、メイフィールドさんに任せるわけにはいかない」

「っ！どうしてですのっ！！」

「今回、コイツをこんな状態にしたのは俺だ。だから、その後始末

を他の人に任せる何て嫌なんだよ」

そう、これは俺の行動の結果である。その後始末を、適任だからという理由だけで誰かに任せるべきだとは思わない。

「……そん、な……」

がつくりと、その場に崩れ落ちるメイフィールドさん。その表情からは、後悔と絶望の色すら伺える。

……うん、さっきからちょっと思ってたんだけどさ。

この人は何か、俺のやろうとしていることに対して盛大な勘違いをしているんじゃないだろうか？ さっきから、明らかに悲壮感が漂いすぎてるよね？

「じゃ、じゃあ……せめて、せめて何をするのか、教えて欲しいのですわ」

まあ、それはもう仕方ない。ここまできたら、反対もされないはず……だし。

「あ、ああ。単に、授業をきっちりやってくれたら、ご褒美に踏んでやるって言おうとしただけなんだが」

教室中に沈黙が流れる。多分、俺の言ったことを理解できなかったんだろう。

「……………は？」

「…………ええと、貴女は一体何を言って」

バンツ！と、カルナさんの声をさえぎって、何かが叩きつけられる音が響き渡る。

音の発信源は…………レオナルド先生。

クラス中の人間の視線が、レオナルド先生に集まる。そしてほぼ全ての人物が、驚きの表情を浮かべた。

そこには、先ほどのよううつろさはもうどこにも見当たらない。むしろ、廃人寸前になる前よりも活気に満ち溢れ、生気が滾っているようにすら見える。

恐らく、今の先生を見た者であれば誰もがこう答えるだろう。今の先生ならば、間違いなく地獄からでも復活できる…………と。

…………あ、いや、言い過ぎた。さすがに死んだら死ぬよな。こいつでも。

「聞いたぞ！！授業をきっちりやれば、ミハル君からのご褒美がもらえるんだな！？」

「ああ、きっちりやれば、きっちりと踏んでやるぞ？」

「ふ、ふふ、ふははははっ……ちゃんと俺は聞いたからな？忘れないからな？約束を破ってはいかんぞ！？」

「ああ、こっちも破るつもりは無いから、安心しろ」

完全復活した様子で、仁王立ちをする先生。まあ、無事、元に戻ったようでは何より。

「え、ええっと……これは一体、どういうこと………ですか？」

「わ、私にも説明して欲しいですね。正直悔しいですが、私では貴女の説明無しにこの現象を理解できそうにありません」

一方、メイフィールドさんとカルナさんは目の前の光景が理解できないのか、俺に説明を求めて来た。

その気持ちは分かるが、正直説明したいとは思わない。女の子に変態紳士の事を詳細に説明するとか、どんな羞恥プレイだよ。

「別に理解する必要は無いと思うぞ？アレはああいう生き物だって言うことを知ってれば、十分制御していくことができるだろ」

何を喜んで何を嫌がるのかを理解しておけば、この二人ならアレを十分制御出来るだろうし。

「た、確かにそうですね……」

「いいえ、私はそれでは納得しません」

何とか納得したメイフィールドさんを尻目に、カルナさんがきっぱりと言い切った。眼鏡を指でくいつと押し上げる。

「私は学園長でもあります、同時に研究者でもあります。研究者として、解らないものを解らないままにしておくのは、プライドが許しません」

なんとも面倒くさい話だ。正直やりたくなかったし、カルナさん相手に通じるとも思えないけど……ここは一つ、芝居をうってみるか。

俺は自分の顔から、意識的に表情を消す。突然変わった空気に、どこからか息を呑む音が聞こえる。

「カルナさん」

「……な、なんでしょう？」

「世の中には、知らないほうが幸せな事が………あるので
すよ？」

言い終えると同時に、意識的に壮絶な笑みを浮かべる。

俺はよく妹や幼馴染に強制されて、いろんなポーズや表情を作ら

されていた。そのため、どうすれば人が怖がる表情を浮かべられるのかも、俺はある程度は知っていた。

……妹や幼馴染が怖い表情を何故ねだって来たのか、俺にはいまだに理解できない。あるいは、そのうち何らかの演劇でもやらせるつもりだったのかもしれないが。

「は……はい」

カルナさんから、かすれた声が漏れ出す。よほど俺の変化が恐ろしかったのか、青褪めたその表情からは先ほどまでの毅然とした姿は見られない。

「はい。ご理解いただけたようで、ありがとうございます」

そういつて、今度は普通の笑みを浮かべる。もちろん作り笑いだが、怖がらせた相手を安心させる効果ぐらいはあるだろう。

俺の目的は、カルナさんを怖がらせることではない。……いや、そもそもここまでハツタリが通じるとも思ってたんだが、詮索を止めるのが目的なだけなので、詮索をしなければ脅さないと刷り込ませる方が良い。

……カルナさんとの交友関係を、あまり悪化させたくないという理由もあるが。

俺が表情を変えたたん、教室中からため息が漏れる。ちょっと待った、カルナさんはともかく、何で他の連中まで緊張してんだ？

「あ、あの、ミハルさん、今のは一体……？」

「ん？ああ、ただのハツタリ」

「は、ハツタリですって？」

俺の言葉にカルナさんが反応する。

「知らないほうが幸せだと言っるのは事実だけどさ。単にそれを言うだけじゃ、カルナさんは引いてくれそうに無かったからな」

そんなカルナさんに、俺は種明かしをする。多分、もう全部ばらしても大丈夫だし。

「それを私に聞かせて、私が先ほどの発言を取り消すとは考えなかったのですか？」

「そりゃ何せ学園長だし、カルナさんなら生徒に対してそんなことはしないだろうと信じてるしさ」

俺の返答にカルナさんが口を閉ざす。しばらくして、盛大にため息をついた。

「……卑怯ですね。そんな言い方をされては、取り消すことなど出来ないではないですか」

「卑怯だよ。でも、それで平穩が保てるなら、俺は迷わずそつちを取るさ」
卑怯

そう言っつて、俺達は二人して笑い出す。どうやら、何とかこじれさせることなく、カルナさんの詮索を逃れることが出来たらしい。

……なにやら、メイフィールドさんとゼノガルド君の目に、畏敬

の眼差しが混ざってきている気がするけど、とりあえず気のせいと
いうことになっておく。

第19話 空回りと茶番劇（後書き）

紳士は踏めば復活する！というのは、現実では絶対にまねしないでください。

どうしてもまねする場合は、双方の同意を得てからにしてください。なお、その際何らかの損害が発生しても、当方は一切の責任を負うつもりはありません。

……いえ、まねする人なんて居ないと思いますけどね。

第20話 それぞれの努力

「うん……？」

休憩時間に入り、初めての授業から開放された俺は、自分で紙に書いた内容をみてうなり声を上げていた。

「ハルちゃん、どうしたの？何かわからないことあった？」

そんな俺が気になったのか、フォルが尋ねて来る。

「あ、いや、そういうわけじゃないんだけどな」

「でも、ハルちゃん、さっきからうなってるよ？何か先生の言ったことで、解らないこととかあったんじゃないの？」

確かに、レオナルド先生の言っていたことを、俺は半分も理解していなかった。……いや、変態紳士的な意味ではなく、転入生でかつ魔法の基礎知識がまったく無い俺には、今行われている授業は難しすぎたのだ。

と言うか、先ほどの授業は本当に魔法の授業だったんだろうか？言葉の端々をつなげると、錬金術のような、何かを生み出すための技術を扱う知識……という印象を受けたんだが。

とは言っても、まったく解らなかったわけでもない。大体半分は解ったんだから、嘘は言っていない。うん。

……ごめんなさい。

「すみません、本当は半分以上解りませんでした」

見栄を張っている事に気づかれたのか、疑うような目を向けて来たフォルに俺は素直に謝った。

「えへへ、やつぱり。でもしょうがないよ。ハルちゃん魔法のことぜんぜん知らないんだから。それに、私だってぜんぜん解らなかつたんだしね」

……時々、フォルのことが良く分かりません。何故そんな事をそこまで明るく言い切れるんだろうか？不思議だ。

「フォルさん、貴女ねえ……そんな、己の無知に胸を張っていてどうするんですの？」

「ふっ、でもそれも無理も無いことかもしれないね。僕等とて、今まで無為に過ごしてきたわけでもないのだから」

まあ、ぼつとでの俺達がいきなり理解出来てたら、この学園の生徒達の立つ瀬は無いか。

「とは言っても、解らないままだと今後がまずいんだよね……なあ、この学園って図書館とかあるか？」

「ええ。図書館なら、学園に入っこの建物の右側に見える小さな建物がそうですわよ」

メイフィールドさんの言葉に、俺は学園に入っこの記憶を掘り起こす。そういえば、視界の端にそんな建物が見えていた気がする。

「それじゃあ、後でそっちに行ってみるか。学園の図書館なら、魔法について書かれた本もあるだろうし」

その前に、カルナさん辺りに尋ねて、読む必要のある本の目星をつけておいたほうが良いか。さすがに、図書館中の本を調べまわるわけにも行かないしな。

「お待ちなさい、貴女がそんなことをする必要はありませんわ」

「……？何でだ？今の授業は、基本知識も無しに理解できるような内容じゃないだろ？」

特に専門用語とかが出てくると、それがまず何なのかを理解しないことには手の出しようが無い。

「まったく、私が何故ここに居ると思っているんですの？」

「……え？いや、それは……魔法の勉強のため？」

「そういうことを言ってるんじゃないわっ！私が言いたいのは、何のために自分の席からここまで移動して来ているのかを尋ねているんですのっ！」

いや、そんなことを言われても。俺はメイフィールドさんじゃないし、心を読んだりすることなんて出来ないしなあ。

「ふふ、君は相変わらず回りくどいね。さあ、ミハル君とフォルカ君、こんな素直じゃない子は放っておいて、僕が勉強を教えてあげようじゃないか」

……ああ、そういうことか。

「良いのか？俺達に勉強を教えると、ゼノガルド君の勉強の時間が減るだろ？」

「ふっ……もし、迷惑じゃないのかと思ってるのなら、それは大きな間違いさ。僕は自分の意思で、君達に教えたいと思っているからだ」

「あ、ああ。まあそこまで言っんなら」

「お待ちなさいっ！！」

勉強を教えてもらうように頼もうとしたところで、メイフィールドさんが割ってはいる。

「……何かね？メイフィールド君。僕はこれからこの子達に勉強を教えなければならなんだ。邪魔はしないでもらおうか？」

「何を言ってるんですの。貴方が誰かを教えることなど、出来るはずが無いじゃないですの。さあ、この二人のことは私に任せ、さっさと引っ込みなさい」

「おいおい、二人ともいきなり喧嘩を始めるなよ」

突然勃発しだした喧嘩に、俺は思わずため息を付く。この様子だと、休み時間が終わるまでに対策が決まりそうに無い。

かといって解決案も……いや、待てよ？

「それだったら、どっちかが俺でどっちかがフォルちゃんに教えてくれんか？フォルちゃんも良く分かってないみたいだし」

どの道、二人同時に教えるのは難しいだろう。それなら、一人ずつ教えてもらった方が余程良い。

「そうか、確かにそうだな。なら、メイフィールド君にはフォルカ

君を担当してもらおうか」

「な、何を言ってるんですの！？貴方がフォルカさんを担当すればいいじゃないですか！」

「おいおい。二人とも、そんなにフォルちゃんに教えるのが嫌なのか？」

確かに、フォルに何かを教えるのは難しそうではあるけど、そこまで嫌がるんなら……。

「そ、そういうわけではないのだがね……」

「そ、そういうわけではありませんけど……」

ほぼ同時に否定する二人。……何だかんだ言って、実はこいつらって仲良いんじゃないかね？

「ね〜ね〜ハルちゃん。お勉強するなら、みんなですれば良いんじゃないかな？」

「みんな？あ〜なるほどな。4人でって言う方法もあったか」

なるほど、そういう発想もあったか、直ぐには思いつかなかったな。

確かにそれなら教える側も互いの知識不足を補えるだろうし、教わる側が教えあうことが出来る。

……つか、何で最初にそれを思いつけなかったんだ？俺。

「二人とも、それなら問題ないか？」

「ああ、僕としてはそれでかまわないよ」

「ええ、私もそれならかまいませんわ」

……またかぶってるし。まあ、「本当は仲が良いんじゃない？」とか口に出すと絶対怒り出しそうだから言わないけど。

「じゃあ、二人とも悪いけど、これからよろしくな」

「えへへ、みんなでお勉強頑張ろうねっ」

「ふっ、僕に任せてくれたまえ」

「ふふふ、ちゃんと丁寧に教えて差し上げますわ」

自信満々の二人を見て、なんとも心強いものだと思う。そんな二人に負けないようには、魔法を学んで行きたいと思った。

ちなみに、先ほどの授業が本当に錬金術の勉強だったことに気づいたのは、二人に指摘されてからのことである。ある程度本を読んだといっても、やはり俺はまだまだこの世界では無知なようだ。

「よし、今日の授業はここまでだ。みんな、ちゃんと俺の愛を受け取ってくれたか？」

若干ウザそうな視線を受けて、満足そうにレオナルド先生が頷く。

「よし、では今日のところは解散だ、みんな、お疲れ様」

ひとまず今日の授業は終わったらしい。正直、まだ半分も理解できなかったが、何となく魔法については理解できてきた気がする。といっても、俺はそもそも、魔法を使うための条件をまだ満たしていないらしい。だから、その条件を満たすまでは、どれだけ理解しても魔法を使うことは出来ない。

軽く伸びをして、席を立つ。帰り支度を始めた俺に、レオナルド先生から声が掛かった。

「あ、ミハル君はきちんとご褒美を頼むぞ」

……ちつ覚えてやがったか。まあ、踏むぐらいなら別にかまわんが。

「はいはい、それで……って、おおっ!？」

突然、俺の周囲が光りだす。誰かが魔法でもかけたのかとあたりを見回すが、周囲のクラスメイト達も驚くばかりで、そんな様子は見当たらない。

「み、ミハルさん、それは!？」

「強制転移魔法か!？ミハル君、すぐにそこからっ」

メイフィールドさんとゼノガルド君の叫び声が響くのと同時に、俺の視界が真っ白に染まる。

「な、なあっ!？」

訳がわからないまま、とりあえず俺は身構えた。どんな魔法を掛けられたのかは知らないが、いつ攻撃が来るともわからなかったからだ。

「……………」

ふと気がつく、真っ白だった視界は元に戻っていた。急に全身から力が抜けて、その場に座り込む。辺りを見回して、俺は愕然とした。

「うふふ、ハルちゃん、お帰りなさい」

そんな俺を、満面の笑みで迎えるイセリナ。もし幻覚でないのなら、俺が今居る場所はイセリナの家の中である。

……コイツは、一体何をした。

「お、おい、ちょっと待てどうなってる？何で俺がここに居るんだ？」

「うふふ、おねえさんが極秘に習得していた、【使い魔帰還】の魔法が、やっと成功したのよ」

何だそりゃ？使い魔を帰還させる？

「この魔法はね、使い魔がどこに居ても、主の下に戻すことが出来るの。これで、ハルちゃんが危険な目にあっても、すぐに帰るこ

とが出来るのよ？」

イセリナの説明を聞いて納得する。そういえば、ちょっと前に何か考え事をしていたようだが、これを覚えようとしていたのか。

「これで、いつでもハルちゃんに会うことが出来るわ」

魔法が成功したからか、上機嫌のイセリナ。だが、コイツは自分がしでかした事に気づいているのか？

「おい、イセリナ。お前アホだろ。間違いなくアホだろ」

これから起こるだろう出来事を考え、俺はため息を付く。

「あらあら？ハルちゃん、おねーさんにアホはちょっと酷いんじゃないかしら」

「ほう？なら、フォルちゃんはどうするつもりだったのか、言ってみろ」

俺の問いに、ピシッと固まるイセリナ。考えてなかったんだな？

「その【使い魔帰還】とやらを使うことを、フォルには伝えて無いらろう？どうやって、俺が先に家に帰ったことをフォルに伝えるんだよ」

「あ、あらあら？」

「それともう一つ。何だか知らんが体から力が抜けてまったく動かないのだが、心当たりは無いか？」

「え、え〜と……それは、この魔法を使うと、戻ってきた使い魔は一時的に動けなくなってしまうて〜」

……………。

「そんな魔法を、気軽に使うんじゃないやねえっ!!」

「あ、あらあら〜」

怒鳴る俺に動揺するイセリナ。本当に何も考えてなかったんだな、こいつ。

「それで、どうするんだ？俺は動けないし、イセリナがフォールを迎えに行くのか？」

「あらあら〜。それが、おね〜さんも疲れててしばらく動けないのよ〜」

……………はあ？

「何でだ？疲れてるって、そんな」

ちよつと待った、コイツさっき『やっと』成功したって言ってたよな？

「……………動けるようになるまで、どれくらい掛かる？」

「2時間ぐらいかしら？」

イセリナの返答に俺は軽く首を振る。……力が抜けているせいか、頭をたったこれだけ動かすのですら大分きつい。

もはやこれはフォローのしょうが無い。これから起こるだろう事態をいくつか考え、俺はその憂鬱さのため息をついた。

その後、泣きながら帰ってきたフォルを落ち着かせるのに、俺とイセリナが苦労したのは言うまでも無い。

そして、事情を知ったフォルがしばらくイセリナに口を利かなくなっただが……まあ、それは自業自得だろう。

第20話 それぞれの努力（後書き）

イセリナさん、南無。

ようやく魔法学園に転入してから、一日目が終わりました。一日の割には長かったような気がします。

第21話 紳士的なご褒美（前書き）

紳士的なアレ注意

ある意味R - 15 注意

第21話 紳士的なご褒美

「どづいうことだっ!!」

学園の敷地内に入るなり、俺は待ち構えていたレオナルド先生に非難を浴びせかけられていた。

「ミハル君は、ちゃんとご褒美をくれるといってたじゃないか!? あれは、嘘だったのか!!」

忘れていたわけではない。恐らくこういうことになるだろうと、対応策は考えておいた。

ただ、その策を実行するにはここは人目があまりすぎる。それに、その策をフォルにはあまり見られたくはない。

……しかしこの先生、必死だな。

「フォル、俺は先生とちょっと話があるから、先に行っててくれな
いか?」

「うん、わかった。また後でね」

そう言っ、手を振りながら学舎へと駆け出すフォル。わざわざ走ることは無いと思うのだが、フォルはいつも元気だと思う。

「ミハル君!!俺は、君なら必ずやご褒美をくれるのだとっ!そう
思って!!」

「そのことについて話がある。先生、ちょっとこっちに付いて来い」

有無を言わず、怒鳴り声を上げる先生の横を通って学舎の裏側へと歩き出す。そんな俺の様子に若干戸惑ったようだが、そのまま先生は俺の後についてきた。

「……あれは、ミハルさん？無事だったんですね。でも、あのダメ教師を連れてどこへ……まさかっ!？」

その時、俺はその姿を彼女に見られていることに気づいて居なかった。

「それで、俺をこんなところに連れてきて、どうするつもりだ？」

学舎裏にたどり着くなり、先生がそう尋ねてくる。俺は周囲に人が居ないことを確認し……これからする事を思い返して、先生に振り返った。

「っ!？」

その瞬間、先生の表情が凍りついた。

「先生、俺は先生の事を一流の紳士だと思っていた。恐らく、先生も一流の紳士たろうと振舞ってきている事だろう」

「……あ、ああ」

完全に俺の雰囲気飲まれる形で、先生が答える。

「だが、それは買いかぶりだった様なな？今の先生は、あまりに無様だ」

「な……り、理由、その理由はっ」

焦る先生に、俺はハッと嘲笑する。

「紳士たるもの、ご褒美を自ら望むべからず。たった一日のお預けすら我慢できず、取り乱して喚き散らす。それを無様といわずして、なんと言うのだ？」

先生が愕然とした表情を見せる。徐々に、その顔色が青くなっていくのが見える。

「まして人前でご褒美をねだろうとはな。先生は、この俺を人前で辱めるつもりだったのか？」

「も、申し訳ございませんっ！！」

勢い良く土下座する先生。それを見て、俺は満足げに頷く。

「今は良い。今の先生にはまだ、そこまでは求めるまい。……だが、今後はその心に刻み付けて置くのだな？」

「は、はいっ！！」

俺の要求に、顔を上げて答える先生。そんな先生に、俺は今度は

笑顔を見せる。

「さあ、分かっているだろう？ご褒美の時間だ」

「は、はいっどうぞ私めにご褒美をっ」

微動だにしない先生に、俺は軽いため息を付く。

「どうやら分かってないようだな？仕方ない、特別に教えてやろう。
失意体前屈だ」

「っ！！？は、はいっ！申し訳ありませんでしたっ！！」

あわてて両手と両ひざを着き、頭をたれる。それを見て、俺はゆつくりと先生に近づく。

「さあ、ご褒美だ。幸い授業が始まるまで、たっぷり時間はあ
る。しっかりとその身で受け取るがいい！」

先生の背中に足を乗せる。ゆつくりと、力を込めていく。

「あ、ああ、ああああっありがとっございますっ！！」

先生に対する、ご褒美が始まった。

「……ちよつと、やり過ぎたか」

至福の笑みを浮かべながら気絶している先生を見て、思わずそうつぶやいてしまう。妹や幼馴染に仕込まれた演技に、多少オリジナル要素を加えてみたのだが、思っていた以上に効果があったようだ。

……まあ、要は今までの全部がハツタリというか、演技だ。俺が一流の変態紳士の心構えなんて知ってるわけ無いし。ましてや誰かを踏んで悦に入る趣味などあるはずがない。

先生を踏む段階に入ってから正直ちょっと嫌だったのだが、何とか我慢した。これから先は我慢させるようには誘導できたし、あれだけ恍惚の表情を浮かべてるんだから、当分の間は大丈夫だろう。

とりあえず用事は済んだし、学舎に戻るかな。先生も約束を覚えている以上、授業が始まるまでには復活して戻ってくるだろうし。

根拠は無いが確信はもてるので、そのまま放っておくことにする。幸せに浸ってる先生の邪魔をするつもりは無いし。今の先生には触れたくない。

振り返って、もと来た道を帰ろうとする。だが、不意にドンツという衝撃とともに、俺はしりもちをついた。

「え？……あ、あれ？何？」

突然のことに、軽く混乱状態に陥る。だが、すぐ目の前に何者かの顔があることに気づいて、誰かに押し倒されたのだと理解した。

「え？だ、誰だ！？」

「おびえなくても大丈夫ですわ。私ですの」

その人物の顔と声には覚えがあった。だが、彼女が何故……ここ

に居る？

「貴女とダメ教師が学舎裏に行くのを見て、着いてきたんですの」

「ああ、なるほどね。……ということは全部見たわけか」

「ええ。まさか……」

俺は軽くため息をつく。さすがにこれは、軽蔑されたかな？俺はともかく、フォルの評判に響かなきゃ良いんだけど。最悪の場合は、フォルと距離を離すことも考えた方が……

「まさか貴女が……ここまで人を導く才能に溢れた人物だったとは思いませんでしたわっ！！」

……………。

「は？」

思考が一瞬停止する。え？何？コノコ、イマ、ナニヲイツタノ？

「飴と鞭を見事に使いこなし、あのダメ教師を見事に下僕とするその様……今思い返しても、素晴らしいの一言ですわ！！」

いや、いや、ちょ、おかしいだろ。それ、おかしいだろ？！

「はああ……ミハルさん。貴女ならきつと、国中の愚民達を従えることだって容易いはずですわ。あの様な絶妙なご褒美と罰を与えられれば、間違いなく誰もが貴女に心酔しますものっ……」

いや、ありえないから。ってか愚民って！ちよつとメイフィールドさん！？お願いですから戻ってきてください……！

「あのダメ教師の踏み方一つでも、まさに絶妙な力加減……時には優しく、時には荒々しく。あの見事な足捌きは、完璧というより他はないですわっ……！」

ちよつ……！？あれは単にぶつつけでやっただけで、そんな技術なんて俺は持つて無いってば！

「それにしても……不覚ですわ。まさか、この私があのだめ教師を羨ましいと思うってしまう時が来るなんて」

「あゝ、メイフィールドさん？とりあえずその件はそこまでにして、教室に行くぞ。今 すぐ に ！」

とりあえず、このまま放っておくとどんどん状況が悪化しそうなので、メイフィールドさんの妄想を止めに入る。

「あ、え？……う、そ、それもそうですわね。いけませんわ、私、危うく……」

……危うく何を言おうとした？何をしようとした？聞きたい気もするけど、迂闊に聞くと怖い事になりそうなので聞きません。

「あ、ああ。えゝと、じゃあ戻ろうか」

「え、ええ、それじゃあ戻りましょう」

若干ギクシャクとしながら、俺達は教室へと入っていく。先に教室に入っていたフォルが、そんな俺達を見て不思議そうに首を傾げていた。

うん、大丈夫だから。何も無かったから。むしろ、何も無かったことにしたから。

「……私も、いつかは踏んで欲しいですわ」

聞こえない、聞こえない、聞こえない！俺の耳は何も聞こえていないっ！！

第21話 紳士的なご褒美（後書き）

以上、先生を下手にメインにすえると、いろいろとぶっ壊れることが証明されました。

……反省した方が良いでしょうかね？紳士や変態が時々出てくることも含めて、この小説は成り立っている気もしますが。

ここまでご覧になった方には言うまでも無いと思いますが、ご褒美は人それぞれです。踏む前にまずは相手に聞いてみましょう。

第22話 主に対する評価

「それで、昨日君が突然消えたのは、なんだったんだい？」

「そういえば、そのことはまだ聞いてませんでしたわね」

席について一息ついていると、ゼノガルド君とメイフィールドさんからそんな事を尋ねられた。

そういえば、俺は昨日の顛末を二人には話していない。二人も少しは心配しただろうし、話しておくべきだろうか。

「ああ、俺の主いきなり呼び出されただけだ」

ちなみにフォルは、一晩経った今もイセリナに対して怒ってるらしい。どうやら、俺が身動きできない状態にされたのが大きかったようだ。

……師匠よりも、その使い魔のほうを大事にする弟子ってどんなんだろう？とちょっと思わなくも無い。まあ、イセリナなんだし、いっか。

「呼び出されたって、魔法で……かい？」

「ちよっとお待ちなさい、それより気になる言葉が聞こえましたの」

さらに尋ねようとするゼノガルド君を押しわけ、メイフィールドさんが一歩前に入る。

「主と言いましたね？主というのは、どういうことですか？」

……そういえば、まだ二人には言っていなかったか？

「ああ、俺は使い魔なんだよ」

俺の言葉に、二人が目を丸くしてしばらく固まった。あれ？何かまずいことでも言ったか？俺。

「ちょ、ちょ、ちょっとお待ちなさい、貴女が使い魔って、本当ですの？」

「本当だよ。というか、そんな嘘ついてもしようがないだろ」

「それは……また、驚きだね。まさか、人型の使い魔をこの眼で見られるなんて」

む……人型の使い魔って、そこまで珍しいものだったのか。確か、魔法使いはこの国だと数千人ほどいて、人型の使い魔は大体数体いるくらい……。

十分珍しいじゃん。異世界渡りのほうに気をとられすぎて、少し感覚が狂ってたか。

「それで、そのご主人様はどんな方なのですか？ミハルさんのご主人様と言うほどですし、相当すばらしい方だとは思いますが」

……………。

「天然で、常に半分ボケてるほぼ二トなお姉さん。時々暴走して襲ってくるのが特徴だな」

にこやかな俺の答えに二人が再度呆然とする。でもまあ、俺が見てきたイセリナって、今の言葉でぴったり当てはまってるしな。

「え、ちょ、ちょっとミハルさん？ 貴女、本当に使い魔なんですの？」

「え？ 使い魔だけど……何でだ？」

「いや、普通使い魔がそこまで主を罵倒したりすることは、出来ないはずなんだがね？」

「いや、罵倒じゃなくて事実だし」

さらに二人が呆然とする。そういえば、俺って使い魔なわりに結構イセリナを蹴っ飛ばしたりしてるよな。

……まあ、いいか。何せイセリナなんだし。蹴っ飛ばしたりするのも、暴走して襲ってきたときだけなんだし。

「普通使い魔は、主に絶対服従するものなんだが……ミハル君は、人型だからだろうかね？」

「分かりませんわ。そもそも人型の使い魔なんて、私も初めて見ましたもの」

二人が何やらぼそぼそと相談する。どうでも良いけど、しつかり漏れ聞こえてるぞ。

しかし絶対服従ねえ……イセリナに？ 正直、お断りしたいところなんだけど。イセリナが強制的に俺に何か……ん？ そういえば、イセリナって確か、最初に俺を強制的に動かしてたよな？ 何であれ以降、それをしないんだ？ 出来なくなっただのか、別に理由があるのか……？

突如降って沸いた疑問。あれこれ考えてみるが、理論的な答えは

出てこない。

そして出た結論は、『イセリナだからそのことを忘れたんだろう』
というものだった。イセリナだし、ありえるよな。

……俺の中のイセリナが、ちょっと酷い扱いになってると思わな
くも無い。

「ああもう、何がどうあれ、ミハルさんはミハルさんですわっ！た
とえ使い魔でも、私のミハルさんを妹にしたいと言う気持ちは変わ
りませんのー！」

「ぼ、僕だってそうさ！ミハル君がたとえ使い魔でも、悪魔であつ
たとしても、僕のミハル君を妹にしたいという気持ちが変わるはず
が無いー！」

二人もどうやら結論が出たらしい。いい加減、妹云々は諦めてく
れた方が楽なんだけどなあ……。

そんな会話を続けていると、教室内にレオナルド先生が入ってき
た。同時に始業の鐘が鳴り響く。

だが、それにも関わらず、教室内のざわめきは収まらない。むし
ろ、先生が入ったとたんにざわめきだした？……っておい。

「おいおい、みんなどうしたんだ？いつもに無く騒がしいじゃない
か」

「おい、先生。ちょっとそのにやけ顔やめろ。っつか、一度顔洗つ
て頭冷やして来い」

とりあえず、クラスの全員の声を代弁する。さすがに俺は、二十台の男のにやけ顔を延々と見続けるような趣味は持ち合わせていない。

「はっ！かしこまりました！ミハル様！！」

やたらときびきびした様子で、教室から出て行くレオナルド先生。様って……まあ、いいか。頭を冷やせば戻るだろうし、何やら教室中から変な視線が集まってるような気がするけど、とりあえずは気にしない事にしよう。

「なあ、魔力って具体的な量を調べることも出来ないのか？」

休み時間に入り、4人での勉強をしていた俺は、ふと気になっていたことを聞いてみた。

「それは無理だよ。魔力を正確に測る方法は、今のところ見つかっていない」

「もしそれが出来たら、かなりの大発見になりますわよ？」

「ん？じゃあ魔力の高い低いって言うのはどうやって調べてるんだ？」

「正確な魔力を測ることは出来ませんが、自分より相手の魔力が高いか低いかを判別できる魔法がありますの」

ああ、なるほどね。それでカルナさんは俺の魔力を調べてたってことか。

「けど、もしも魔力を正確に測れるようになれば、それは僕達魔法使いにとって大きな進歩になるだろうね」

「ん？……何でだ？」

「魔法使いは、魔法を使えば使うほど、魔力切れの恐怖と戦う必要が出てきますの。事前に魔力を測れるのなら、ある程度は安心して魔法を撃てるんですよ」

そういえば、魔力が完全に切れると気絶するんだったな。安全なところならともかく、交戦中に気絶なんてしたら確かに致命的か。完全に切れなくても、切れかけてくると身動きが取れなくなってくるらしいし……大雑把に自分の魔力がどれだけ残ってるかは感じられるらしいが、正確に測る手段があれば測っておきたいのは確かか。

それに、どの魔法がどれだけ魔力を消費するのは、今のところ判明していない。

魔力を正確に測れるのなら、魔法を使う前と使った後を計測して差分で消費魔力も測れる。なるほど、確かにそれは大きな進歩と言えるだろう。

「ハルちゃんなら、いつかきつと見つけれよ」

「そうですね。ミハルさんなら、いつか魔力を測る方法を見つけれるかもしれませんわね」

「……おいおい、二人とも。それは買いかぶりすぎだろ」

「そうかな？ミハル君は、僕等が考え付かなかったことをいくつか既に実行している。買いかぶりすぎと言うほどじゃないと思うがね

？」

……なんであの変態紳士の扱い方を知っていただけで、ここまで持ち上げられなきゃいけないんだ？

しかし、測る方法ねえ……糖度計とか温度計みたいな感じで測れるのか？まず魔力に対して何らかの反応する物がなきゃどうにもならんよな。

近くの魔力によって膨張したり収縮したり……ってちょっと待った、そもそも人の魔力って常時外に漏れてるのか？漏れてなかったら、温度計のような測り方では測りようが無いか。

ダメだな、思いつかん。もっと魔法や錬金術についての勉強を進めれば、あるいは思いつくのもしれんが……。

そこまで考えて、ふと自分が魔力を測る方法について科学的な見方も含めて、真面目に考えていることに気づく。……ああ、案外三人の言うことも的外れとは言えんかもしれない。

休憩時間が終わり、また、授業が始まる。

授業の内容はだんだん分かるようになって来てはいたが、いまだに分からないところが多い。

ひとまず先生の言っていることの要点を紙に書き出して……ふと、外で何かが動いたのが見えた。

外へと視線を移すと、そこには俺達と同じ学園の生徒達が出入り口に向かって歩いていった。

……そういえば、この学園には俺たちのクラスのほかに、Bクラスと言うものもあったな。

外の光景に、自分の記憶を掘り起こす。学園の規模の割には、クラス数も生徒数も少ないと思う。

もつとも、魔法や錬金術を扱うと言う点を考えれば、学園の規模が大きいのは不思議ではないのだが。

「ハルちゃん、どうしたの？」

「ん？ いや、なんでもないよ」

小声で尋ねてくるフォルに小声で答え、軽く首を振る。意識を外から戻し、再度先生の言葉を紙に書き出し始める。

外に出る……ということは、つまりは実習の時間なのだろう。魔法か、錬金術かは知らないが。

ちなみに俺はまだ、実習を受けたことは無い。というか、魔法をまだ使えないので受けようがない。

魔法の時は場所が平原だから、まだ見学をすることも出来るのだが、錬金術の時は場所が森だから、最低限の護衛用の魔法を覚えるまでは教室で居残りをするしかないのだ。

幸い……というかなんと言うか、俺が居残りをしている時はカルナさんが来て勉強を教えてくれる事になっているので、暇をもてあますことは無いらしい。

ちなみに、それを聞いた時「仕事を放り出して俺の相手して良いのか？」と聞いたら、「仕事なんてその頃には終わらせてます」と帰ってきた。

さすがはカルナさん。イセリナ何かとは大違いである。

「ハルちゃん、何か考え事？」

「いや、なんでもないよ」

どうやら手が止まっていたらしい。今は授業中だ、他ことを考えるのは控えた方がいいか。

そう思った俺は、思考を切り替え、再度授業に集中することにした。

「さて、この条件だと結果はどうなるか。俺のむす……ゴホッゴホッ、あゝ、メイフィールド君、答えてみなさい」

「……はあ」

一応、先生も先生なりに努力してるみたいだな。半分言いかけたあたり、どうもあれは地でやっていたみたいだが。

第22話 主に対する評価（後書き）

前回はつちやけてたので今回は平凡に。

ミハルはイセリナさんに対しては結構酷評です。頑張れ、イセリナさん。

第23話 発動体との契約

魔法学園に入学してから、数日ほど経った。俺はメイフィールドさんやゼノガルド君の手伝いもあり、魔法の基礎的な事についてある程度理解出来るようになって来ていた。

それに伴い、俺はカルナさんに学園長室へと呼び出されることになった。何でも、魔法を使う条件を満たすための儀式を行うらしい。

魔法と聞いて、大体の人が思い浮かべるもの。それは詠唱と魔法陣だと思う。

よくあるファンタジー小説とか、あるいはゲームとか。長い詠唱をした後に魔法をぶっ放したり、魔法陣を描いてゴーレムを作ってみたり。

俺は初め、この世界の魔法もそういう代物なのだと思っていた。だが、メイフィールドさん達の言葉を聞いていると、どうにもそうでは無いらしい。

「はい、それじゃあミハルさん。この杖を握って【authenticat i o n】と唱えて見てください」

「……【a u t h e n t i c a t i o n《認証》】？」

訳が分からないまま、カルナさんの言ったとおりに喋ってみる。

……何も起きない。

「あら？……あ、忘れていました。その前に、ミハルさんの名前をその杖に書き込む必要がありましたね」

カルナさんがボケるとは珍しい。明日は雨でも降るんじゃないだろうか？

「普段は担当の先生方にお任せしているので、すっかり忘れてしまっていたですよ。お恥ずかしい限りです」

なるほど、っていうか、俺何も言っただけ。カルナさんひよっとして俺の心とか読んでるのか？

「それぐらいなら、表情と動きで何となく分かります。ありました、これでここにミハルさんの名前を書いてくださいね」

む、う。俺ってそこまで分かりやすいのか。ちょっとショックだ。カルナさんからペンのようなものを渡されたので、指定された場所に名前を書く。ミハル・トウマ……で良いかな。

「はい。それでは再度、先ほどと同じ言葉を唱えてみてください」

「……【authentication《認証》】」

ふわり、と俺の周囲に光が浮かび上がる。これと同じものを、俺はどこかで……って、【使い魔召喚】じゃねえか！？

「ちょっと、これって！？」

「安心して下さい、すぐに収まりますから」

慌てる俺をなだめるように説明するカルナさん。その言葉どおり、しばらくすると光は次第に収まっていった。

「無事に、契約は成功したようですね。おめでとうございます」

「え、えーっと……ありがとうございます？」

いきなり契約とか言われても……ん？契約？ああ、これがメイフ・イルドさんたちが言っていた、発動体との契約と言うやつなのか。何でも魔法を使うには、今俺が持っている杖のような発動体が必要で、発動体を介して魔法を使うための力を世界から引き出すことが出来るのだそうだ。そして、その力を引き出すために必要なのが、魔力らしい。

イメージ的には鍵の付いた自販機のようなものか。発動体でとりたいたジュース（魔法）の鍵を開けて、魔力で対価を支払って、ジュース（魔法）を受け取る。

発動体^{かぎ}によって発動できる魔法が変わってくるらしいし、イメージ的には間違っていないはずだ。……自販機に鍵をつけること自体が意味不明、という意見は聞かない。

「そうそう、貴女に渡したその杖は練習用の杖なので、極簡単な魔法しか使えませんよ」

あ、やっぱり。まあ、いきなりいろんな魔法とか使えても、混乱するだけだろうけど。

「しかし、それ以外は他の物と違いはありません。魔法を練習するのなら、その杖でも十分可能なですよ」

それはありがたい。発動体によって扱いが全部違うとか言われたら、かなり困ることになりそうだし。

「魔法の実習に関しては後日行われますので、その時に先生から教えてもらってください」

あ、ここで教えてくれるわけじゃないんだ。まあ、こんなところで変に魔法使ったりしたら、危ないだろうしなあ。

学園長室（こま）に置いてある資料一つとっても結構重要そうだし、下手に魔法を使つて燃えたりでもしたら、本当に洒落にもならない。

「以上です、何かご質問は？」

「今のところは無いかな」

本当は聞きたい事は色々あったのだが、何も今カルナさんに聞かなければいけないことではない。

むしろ、俺としてはカルナさんをあまり拘束したくない。いくら仕事が早いといっても、それが俺のためにいくらでも時間を使つて良いということでは無いのだから。

聞きたいことがあれば、レオナルド先生やメイフィールドさん達に聞けばいいのだ。本来カルナさん（学園長）には、仕事が終わったあとも相応のやらなきゃいけない事があるはずなんだし。

「そうですね、少し残念ですが」

「……？」

何やら、残念そうな表情を見せるカルナさん。……何か、質問して欲しかったのだろうか？

「とりあえず、フォルちゃんが待ってると思うので、失礼します」
「はい、ではまた」

そういつて俺は、学園長室を出る。扉が閉まる直前に見えた学園長の表情が、妙に寂しげに見えたのは……俺の気のせいだろう。

「へえ〜。じゃあ、それがハルちゃんの発動体なんだね〜」

「ああ、まだ練習用だけだな」

そういつて俺は杖を見せる。櫛の木を削りだして先端を丸くし、若干の装飾が加えられた一品だ。

……これ、武器には使えんよな。下手に衝撃を加えると、付いてる装飾とかもげるだろうし。

「そういえば、フォルはもらわないんだな」

魔法学園に入学した生徒は、もれなく練習用の発動体をもらうことが出来るそうだ。

もちろんタダではないのだが、俺は特例でタダにしてもらった。……ひょっとしたら裏でイセリナに請求書が届いてるかもしれないが。

「うん。だって私、発動体持つてるもん〜」

「あれ？そうだったのか」

初耳である。いや、今まで尋ねたことも無かったけど。

「これが私の発動体だよ。お師匠様からもらった、特別なものなんだ」

ちなみに、フォルとイセリナとの仲は既に修復済みである。イセリナがフォルに用意していたデザートを見せたら、あっさりとフォルの機嫌は直ってしまっていた。

恐るべきは甘味の威力か……いや、甘いものは俺も好きだけど。

……それはともかく。

フォルが差し出した発動体を見る。T字型の非常に小型な杖のようなもので、先端は平たい金属、持つ場所は布のようなものが巻かれている。

「随分と小さいんだな。でも、持ちやすそうだし軽そうだし、便利そうではあるか」

「えへへ、私の宝物なんだ。お師匠様も、これは大事にしてねって言ってたんだよ」

なるほど、ひよつとしたらこれはイセリナの手製の発動体なのかもしれない。発動体は錬金術で作られるらしいし、イセリナも……一応、錬金術師のはず……だし？

あるいは、イセリナがどこかで買ってきたものかもしれないが。まあ、どちらでも良いや。

重要なのは、イセリナがフォルに渡したことで、フォルがそれを宝物だと思っていること。

その過程を詮索するなど、無粋なだけだしな。

「それは良かったな。ちゃんと、大事にするんだぞ？」
「うん」

フォルが頷いて、発動体を大事にしまいこむ。やっぱりフォルっていい子だと思う。

学園からの帰り道、魔獣の出る平原での、穏やかな会話。

……そういえば、この平原って魔獣が居るんだよね？この数日一度も襲われたこと無いけど、何でなんだ？

軽くあたりを見回す。遠めに動物や魔獣らしき姿は見えるが、こちらに近づいてくる様子は無い。

「なあフォル。この辺りって、いつもこんな感じで静かなのか？」

「え？えつとね、この辺りはいつも大体こんな感じだよ？本当にたま〜に、狼がこっちに來たりすることがあるんだけどね」

なるほど、単に俺が警戒しすぎてただけか。

まあ、そこまで頻繁に襲撃のある地域なら、学園も建てて無いだろうしなあ……良く考えれば、街の近くでもあるし。

何よりも平和で居られるんなら、それに越したことは無い。というか、フォルに守られるだけの状態で襲われたくねえし。

……自分で考えてて情けないと、若干俯き気味に首を振る。ふと気がつくと、そんな俺に対して心配そうな表情でフォルがこっちを見ている。まったく、無駄に心配させてどうするんだ俺は。

「おつかえりなさ〜い」

「……まあ、突っ込まんけどさ。ただいま、イセリナ、セルニア」
「ただいま〜、おね〜ちゃんも、お家に来てたんだね〜」

家に戻ると、そこにはセルニアの姿があった。

まあ、何をしに来たのかは大体分かってるから問題ない。どうせ俺に会いに来たと言っただろうし。

「今日は、ハルちゃんに会いに来たのだ〜。魔法学園に通うようになってから、中々会える機会が無くて寂しかったんよ〜？」

そういつて俺に抱きつこうとするセルニア。とりあえず顔を手で押しのけて拒絶する。

「んぶつ相変わらず、ハルちゃんは冷たいのでしたとき」
「いい加減、見境無しに抱きつこうとする癖を止めるよ。……ったく、しょうがねえなあ」

突然その場に座り込んでの字を書き出したので、しょうがないからその頭を撫でてやることにした。……あくまで仕方なくだからな。

「ひゅいつ!? ふわあ……」

「あ、お姉ちゃんいいな〜。ハルちゃんに頭、撫でてもらってる〜」

俺に頭を撫でられて陶醉するセルニアと、羨ましそうにそれを眺めるフォル。……俺に頭を撫でられるのって、そんなにいいものなのか？

まあ、俺には一生わからないことなんだろうが。自分の頭なんぞ撫でて、何の感慨も浮かばねえし。

しばらく撫でた後、セルニアの頭から手を離す。今度は、隣で物欲しそうな顔をしたフォルを撫でることにする。

「えへへっ」

余程嬉しいのか、極上の笑みを浮かべるフォル。

「はふう……おねーさん、まだ頭の中がふわふわするですよ」

「ハルちゃんに頭を撫でもらうと、とっても気持ち良いんだよ。ハルちゃんだっけ好き」

二人の頭を撫でていて、ふと、こういうのも一種のハーレムと言うのかな？と少しだけ思った。でも、女の子になってからハーレムが出来てもなあ……。

その後、二人の頭を撫でている姿をイセリナに見つけられ、イセリナが加わった。断ることも出来ず、しばらく俺は三人の頭を撫で続けることになってしまった。

まあ、頭を撫でたらイセリナとセルニアが妙に大人しくなることが分かったので、今度暴走しそうになったら一度撫でみるのも良いかもしれない。

いや、さらに暴走するだけか。止めておこう。

第23話 発動体との契約（後書き）

ようやく、ミハルが魔法を使うための条件が揃って来ました。

しかし、この作品ではシリアスが控えめな都合上、魔法があまり使用されないという事態に陥りそうです。

……いっそ、徐々にシリアスに転向していくのもアリですが。でも、作者は暗い話が比較的嫌いなのであまりドロドロとしたのにはならないはずです。

ルビとか失敗。……見た目良くないけど気にしない。

登場人物紹介（後々追加予定）（前書き）

ここではネタバレ控えめの登場人物紹介を、絵を含めて記述しよう
と思っています。

絵が苦手な方や、絵によってイメージを崩されたくない方は挿絵を
非表示にしてご覧ください。（そんなに見るべきものは記述されて
ません）

なお、作者の画力は残念なことになっています。過剰な期待は禁物
ですのでご了承ください。

登場人物紹介（後々追加予定）

東間 美晴^{ミハル}

年齢：16 ↓ 10

性別：男 ↓ 女

身長：160 cm ↓ 132 cm

体重：52 kg ↓ 30 kg

容姿：黒髪短髪黒眼 ↓ 白銀髪ウェーブ紅眼

> i 3 1 1 2 — 5 1 5 <

元私立東桜帝学園2年に在籍していた少年。

容姿に関しては、実は顔の造形は呼び出し前と呼び出し後であり変わっていない。ただし、肌は青白く、髪の毛が白に近い銀色に、目の色が紅色に変わっている。

基本的に男らしい口調で話し、男らしさを好む性格。呼び出された後もそれは変わっていないが、逆にギャップを生んで人気が出ているらしい。インドア派。

登場人物紹介（後々追加予定）（後書き）

2009/11/30

とりあえず絵がミハルしか出来ていないのでミハルのみです。

男だったころの絵は描いていません。特に需要もなさそうですし…。
…。

第24話 初めての魔法実習

ゆっくりと杖に力を込める。本来は意識するだけで良いらしいのだが、魔法を使うのが初めての俺は意識をするだけというのが難しく、つい力が込もってしまう。

チリッと、自分が何かと繋がったような感覚を受ける。そういう感覚があると言うことは事前に聞いていたので、慌てずにそのまま続ける。

しばらくすると、俺の目の前に長方形のウィンドウが2つ出現した。片方に「magic arrow《魔法の矢》」、もう片方に「anti kill《非殺傷》」と言う文字をイメージする。

ウィンドウにイメージとは違う文字が映し出される。その文字に若干動揺したが、そのまま次の発動に……。

……………。

「なあ、発動ってどうやるんだ？」

「！？……申し訳ありません！！ミハル様に、魔法の発動方法を教えるのを忘れておりました！！」

近くで見ていたメイフィールドさんとゼノガルド君が、呆れたような視線で先生を見つめた。

今の時間は魔法の実習時間。俺は、初めての魔法の実習の時間を迎えていた。

いまだに先生の俺に対する態度が戻らないんだが、そこはもう突っ込んだじゃダメなのかなあ……。何か知らんけど、土下座しっぱな

しだし。まあ、あまりに続くようならたたくのめしてご褒美を与えて無理やり戻させるか。

ひとまず土下座しつぱなしの先生を放置して、メイフィールドさん達に発動の仕方をたずねる。

「えっと、魔法はどこまで入力できましたの？」

「【魔法の矢】の魔法と【非殺傷】の属性は記述できたな。表示されてるのも確認した」

「ふむ、じゃあ後は承認するだけじゃないか。それなら直ぐに出来るだろう」

「承認？」

「ああ、ウィンドウに何かの絵みたいなのが表示されていることは確認したのだろう？それに対して承認をしなければ、魔法は発動されないのさ」

ふむ……つまりは、俺は魔法発動直前の確認の状態で止まっていたのか。……ん？今何か引っかけた気がするが、まあとりあえずそれは後回し。

「その承認はどうすれば出来るんだ？」

「承認の意思を明確にしながら、再度発動体を意識すれば承認できますわ」

なるほど……意思を明確にしながら発動体を意識するって難しそうだが、まあ、やってみればコツがつかめるかな？

「分かった、じゃあまた魔法を使ってみるから、二人は下がってて」

俺の言葉に頷き、二人が後ろに下がる。

先ほどと同じように【魔法の矢】の魔法と【非殺傷】の属性をウインドウに記述する。文字がきちんと表示されたのを確認し、承認の意思を出しながら杖に力を込める。

フォン

形容しがたい音とともに、目の前に小さな球体が生まれる。ふわふわと浮かぶそれを見て、俺は初めての魔法が成功したのだと確信した。

「おお……」

「まさか、こんなにも早く成功するなんて……」

後ろの二人が感嘆の声を上げる。

……で、これ、どうすりゃ良いんだ？

「それを、あのダメ教師に撃ち出すイメージを浮かべるのですわ」

自分で作った球体の扱いに困っていたところに、メイフィールドさんからの指示が来る。

ああ、そっか。最初から、練習として【魔法の矢】を先生に撃ち込むって言う話だったな……と思い、先生に向かって撃ち出すイメージを思い浮かべる。

その瞬間、ふわふわと浮かんでいた球体が光の軌道を描いて急加

速し……土下座したままの先生に向かって飛んでいった。

「……あ」

スパアンと音を立てて【魔法の矢】が先生に直撃する。一応【非殺傷】の属性は付いていると思うけど、大丈夫……なのか？

「ありがとうございますっ!!」

……どうやら大丈夫らしい、ちよつとでも心配した俺が馬鹿だった。

「まさか、ここまで早く成功するとは思いませんでしたわ」

「ああ、しかも初めてなのにちゃんと非殺傷属性も付いていたし、やっぱり君は天才だね」

「ん？非殺傷属性が付いてたって、その辺りって分かるのか？」

「通常なら【魔法の矢】が直撃したら跳ね飛ばされるか、後ろに押し出されるぐらいの衝撃はありますわよ」

【魔法の矢】は初級の攻撃魔法なのだが、それでもそれなりの威力はあるようだ。……狼相手とかだと、これだけでは若干厳しそうだけ。

というか、跳ね飛ばす威力があるんなら、さっきのは実は非殺傷の属性付けに失敗してたらやばかったんじゃない？まあ、先生なら直ぐに復活しそうだけど。

「それじゃあ色々と試してみよう。君のその杖は、攻撃に使えるのは【魔法の矢】だけだけど、他の魔法なら色々と使えるはずだからね」

「それなら、あちらで試してはいいかがかしら？ちよつとあちらには

フォルさんも居ることですし、みんなで色々と魔法の練習をいたしましょう」

メイフィールドさんの指差す先には、魔法を乱射するフォルの姿があった。何か物凄く楽しそうではある。

「そうだな、何かフォルも楽しそうだし、俺達も混ぜてもらうか」

そういつてフォルの元へと歩いていく。その途中でフォルが俺達に気づき、駆け寄ってきた。

そのままフォルを交えて、4人でいろんな魔法を使って行く。使っていくうちに気づいたが、初級魔法は思っていた以上に魔力を消費しないらしく、魔力が減っていると言う実感はほとんど感じられなかった。

ちなみに、先生を土下座しっぱなしで放置していたのに気づいたのは、実習の時間が終わってからだった。実習の時間中土下座をして居たのにもかかわらず、先生は何故か満足そうだった。

「ふうむ……」

実習終了後の昼食時。

普段よりも早めに食事を終えた俺は、一人で図書館に入って調べ物をしていた。

内容は……魔法を使用する際の文字について。

先ほどみんなには黙っていたのだが、俺は魔法に使われる文字がある程度理解することが出来ていた。と言うか、ぶっちゃけ英語だった。

紙に書いてもらった文字はかなり崩れていて、もはや象形文字のような様相を呈していたのだが、ウィンドウに表示された文字は綺麗に英語で記述されていたのだ。

……というか、あの崩れていた謎文字をイメージして正確に表示されてるんだから、ある意味すごいよな。イメージに対して、何らかの補正とか掛かってるんだろうか？

あ、でも最初は中々魔法が成功しないって言うから、イメージと実際の文字が剥離していると間違っって記述されるのかもしれない。

そういう点では、文字を読む俺は成功率が格段に上がっているのか？通常はイメージだけなのに対して、俺は文字として補正を掛けられてるわけだし。初めに【魔法の矢】とか【非殺傷】とかで、英語だとかいうスペルだったかな〜とか考えてたしな。

とにかく、魔法に使われる文字が俺にとって馴染みのある文字だったので、気になってさっそく図書館で調べているのである。

ちなみに、勉強会は最近はもう控えめにしてある。既に大半は理解できるようになってきていたし、何よりいつまでも二人を拘束するのは良くないと思ったからだ。

魔法学園であつても学生は学生である。しかも、二人は青春時代とも言うべき年齢なのだ。俺は、あまりその貴重な時間を勉強のみに費やすのは良いとは思わない。

「魔法を使う際に使われる絵は、魔法絵と呼ばれる……？絵ねえ、俺からすれば英語と言う文字にしか見えんのだが」

本に書かれてる内容に、思わずボソツと突っ込みを入れてしまう。

……自重するか、下手すると怪しまれるし。

というか、呼ばれ方が文字ですらなく絵と来たか。まあ、文字はまったく知らない人が見れば絵にも見えるのかも知れんけどな。

そのまま無言で本を流し読みする。ふと、使い魔という文字が目
に留まった。

「ふむ？」

内容を詳しく読み進めてみる。内容は使い魔と魔法について。

使い魔は、魔法の発動体として使うことも出来るらしい。発動体として使えるのは、使い魔の主と使い魔自身。

ただし、発動体となった使い魔は体力を大幅に消耗するのだとか。

……危険だな。

正直に言うと、今の俺は体力が非常に低い。大幅に消耗すると言うのがどれだけのかは分からないが、下手をすると一発撃つだけで気絶するか、気絶しないまでも動けなくなってしまうかもしれない。

それに、俺は自信を発動体としたときにどんな魔法が使えるのかを知らないし。イセリナなら知っているのだろうか？

とにかく俺が俺自身を発動体とする手段は、基本的には無いと思

った方が良さだろう。魔法発動と同時に気絶とか、笑い話にもなっていない。

さらに本を流し読みする。魔法絵に対する無意味そうな考察やら、未知の魔法の可能性、遺失魔法についてやら色々と書いてあったが、今の俺に有益そうな情報は見当たらなかった。

パタンと本をたたむ。本を集中して読んで疲れてしまったのか、若干立ち上がった時に立ちくらみを感じた。

時間は昼の休憩……早めに食事を終えてきたので、次の授業までは時間はたっぷりある。

とりあえず調べ物はここまでにして、俺は本を元の場所に戻す。図書館から外に出ると、太陽の光がまぶしく感じられた。

「むう……ちょっと眠いな」

別に寝不足でもなかったはずだが……実習での魔法連発と図書館での調べ物による疲労でも出たのか？

そんなことを考えながら、辺りを見回す。図書館の裏辺りに、大きな木が一本立っているのが見えた。

興味がわいて裏に回ってみると、少し広いスペースが開いており、そこに一本の木が立っていた。木はそこそこの太さがあり、木陰で休憩するにはちょうど良いかもしれない。

木陰に歩み寄り、座れる位置を探す。ちょうど良く座れる場所を見つけたので、そこに座って休憩を取る。

まあ、時間もまだあるんだし、少しぐらいは昼寝しても大丈夫か。

そう思った俺は、そのままゆっくりと目を閉じた。夢に潜らずに寝るなんて、久しぶりだな……とか考えているうちに俺の意識は落ちていった。

第24話 初めての魔法実習（後書き）

魔法についての解説などなど。不足気味なコメディ分は先生で何とか補充。

『いろんな魔法の使い方があるのだから、こういった魔法の使い方があっても良いんじゃないか？』

これがこの小説を書き始めた動機です。しかし行き当たりで書いているので、実際に魔法の記述に入るまでに既に24話。……無計画にも程がありますね。

ちなみに私は、ストーリーの流れはほぼ全てアドリブで作ってます。本当に無計画にも程がありますね。はい。

閑話休題 ある少女と少女の邂逅（前書き）

この話は、主人公の視点では描かれていません。
必ず見なければならぬわけではありませんが、若干今後の展開が
超展開に見えてくるかもしれません。

ちなみに短いです。

閑話休題 ある少女と少女の邂逅

その日、私は図書館へと向かっていました。

私は、カルナさんとの縁によって、この学園へと入学することが出来ました。その恩返しの意味もあり、私はせめて常に良い成績を取らねばと思っていました。

そして、本日の授業でも気になるところがあつたので、私はいつものように調べ物をするために図書館への道を歩いていました。

すると、ふと、いつもの光景に違和感を覚えました。

それが何なのか分からず、辺りを見回していると……鳥が数羽ほど、図書館の裏手へと飛んでいくのが見えました。

私はその光景に、思わず首を傾げてしまいました。なぜなら、この周辺の鳥達は滅多に学園の近くには近寄らないからです。

その原因は、魔法学園の生徒達が魔法を使って鳥達を的にしているというものから、魔力が濃密で鳥達が警戒しているというものであります。とにかく鳥達が集まってくるのは珍しいことです。

あ、また鳥達が数羽飛んできたようです。ふと、その様子が気になつてしまい、私は図書館での調べ物すら忘れて、鳥達の姿を追っていくことにしました。

普段なら、気にせず図書館で勉強をしていたかもしれませんが。私

自身、その時なぜ私がそうしようと思ったのか、理解できませんでした。

ですが、その光景を見たたん、私は全てを理解しました。なぜ、私が気になっていたのか。この場所に……なぜ惹かれるものを感じてしまったのか。

そこは、まさしく聖域と呼ぶに相応しい光景でした。

私は何度か、ここの風景を見たことがありました。大きな木が一本生えているだけの、どこにでもある光景です。

ですが、今私が見ている光景は、まるで別な場所を見ているような錯覚すら覚えてしまうものでした。

木を中心に、大小さまざまな鳥達がたたずみ、あるいは枝の上に留まっている。

その数は恐らく数十羽ほどでしょうか？それだけの鳥達が一堂に集まっているところなど、私は見たことはありません。

それはまさしく、鳥達の楽園。……しかし、それらもその中心となる『あるもの』の前では、あまりに霞んで見えてしまいました。

それはたった一人の少女。

限りなく白に近い銀色と言ふべきでしょうか？長く、若干ウェーブの掛かった綺麗な髪をした、とても可愛らしい女の子。

その端正な顔立ちと、すらりとした綺麗な手足。その全てが、完璧な造形をしていると思えて仕方ありません。

その女の子が着ている黒い衣装も、まるで、その女の子のために作られたかと思えるほどに似合っておりました。

そして、木漏れ日によるアクセサリーが、さらにその女の子の姿を映えさせていて……その姿はまるで、聖域に住んでいたとされる聖女様すら、彷彿とさせるものだったのです。

私は、息をすることすら忘れてその光景に見入っていました。

もし、彼女が自らを神様の使いだとおっしゃっても、私は間違はなくそれを信じることでしよう。

それほどまでに幻想的で神秘的な光景が、私の前に広がっていたのです。

しばらく見つめていると、中心に居る女の子がかすかに動くのが見えました。

ひよっとしたら、私の視線に気づいてしまったのかもしれない。不本意ながら、私は彼女を眠りから覚ましてしまったのでしよう。

女の子が薄目をあけ、ゆっくりと体を起こしました。すると、それと同時に近くに居た鳥達が一斉に羽ばたいて、空のかなたへと飛び去って行ってしまいました。

もしかするとあの鳥達は、この少女を守るためにここに来たのかもしれない。本来ならありえないことですが、先ほどの光景を目の当たりにした私からすれば、それは当たり前のことのようにも思えます。

女の子がゆっくりと目を開け、辺りを見回します。そして、私に気づいたのか、彼女が私に視線を合わせてきました。

真っ赤で……とても鮮やかなルビーのような瞳。その眼を一目見た瞬間、私は確信しました。

ああ、この方は、間違いなく神様の使いなのだと。間違いなく……神様の祝福を受けた聖女様なのだと。

その少女が口を開くのが見えました。その声を……一語たりとも聞き逃さないよう、私は少し緊張してしまいました。

この少女の声は、どれほど透き通って綺麗なのでしょう？それを聞くことが出来る私は、どれほどまでに幸せ者なのでしょう？このような機会を与えてくれた神様に感謝をしていた私に、彼女は想像を超える程に透き通った声でこう尋ねました。

「……ええっと、君……誰？」

閑話休題 ある少女と少女の邂逅（後書き）

主人公以外の視点で物語を描いてみる実験です。

いかがでしたでしょうか？上手く描けていれば幸いなのですが……。

恐らくこれからも、主人公以外の視点を描きたくなった場合、これと同じように閑話休題として描かれる事になると思います。

そして、視点となった彼女が何者なのは、これから描かれることとなります。

第25話 使い魔少女の信奉者

誰かが見ている気配がした。

ゆっくりと、意識を覚醒させる。まだ頭が覚醒しきれず、半分寝ぼけた状態のままだったが構わず俺は体を起こす。

ばたばたばた……と騒がしい音が響き渡る。誰かが近くに居るのだろうか？

そう考えて、ふと自分が図書館の裏手の木の下で寝ていることを思い出した。

と言うことは、騒がしいのはクラスの誰か……フォルかメイフィールドさんか、あるいはゼノガルド君辺りが近くに居るのか？

……って、ひょっとして寝顔見られたのか？俺。

辺りに、それらしい人物が居ないか見回す。寝顔ぐらい……とも思うが、やはり見られるのは少し恥ずかしい。

そして、俺の視界が一人の少女を映し出した。

流れるような銀に光る髪の毛。二つの眼に宿る優しげな翠色の瞳。芸術的なほどに整った顔立ちと……絹のように白く滑らかな肌と、服の上からでも分かる完璧なプロポーション。

そして何より、うっすらと頬が桃色に染まっている……陶醉とした表情。

寝ぼけていた意識が一気に覚醒し、俺はその全てを兼ね備えた少女の姿に、少しの間見とれてしまった。

少しの間をおき、俺は我に返る。まだ挨拶もしていない相手の容姿を観察するとか、いくら寝起きだったとしても呆けすぎだ。

彼女に何かを言おうとして……一瞬迷う。自分から名乗るべきとかそんな事が、頭をよぎる。

「……ええつと、君……誰？」

だが、口に出た言葉は相手の名を聞く言葉だった。

言った後に少し失礼だったか……とも思った。本来、相手に名を聞く前に自分から名乗るのが礼儀だったはずだ。

相手もそう思ったのだろうか？俺の問いかけに、特に返ってくる様子は無い。……ひょっとしたら、失礼な奴だと思われるかもしれない。

「え、ああああえええとわ、私の名前はセレスティナ・A・ミストレスですっ……！」

そんなことを考えていた俺をどう勘違いしたのか、目の前の少女はその高貴さをかなぐり捨てて勢いで慌てだした。

え？何？えと……なんでこんなに慌ててるんだろ？というか、むしろ怯えている？

「そそそそ、そのですね、ああああの、その聖女様の姿に見惚れてしまいました、その、おお起こすつもりはその決して……！」

？いや、とりあえず意味が分からない。聖女って何？というか、起こすつもり？？

「あ、えと、悪いんだけど」

「は、はいいいっ！！！」

「うん、そこまで怯える理由も分からないけど、とりあえず落ち着いて？」

俺の言葉にこくこくと頷いて、深呼吸を始める。息を大きく吸って、吸って吸って……ってちよつと待て。

「ちよっ！？ちゃんと息は吐いて！」

「ぶはあっ！？す、っすすみませんっ！！」

何だか、意味が分からない。この子、さっき見た完璧な少女と同一人物だよね？

「せせせせ聖女様のお手を煩わせてしまうなど、やはり私は天罰を受けてしまうのですねっ！？」

「いや、本当に意味が分からないから、それ」

とうとう言っている意味が分からなくなってきたので、とりあえず突っ込みを入れる。

だから聖女って何？天罰って……そんな仰々しい事が出来る奴が、この場のどこに居るんだよ。

「えええとえとえとそのその、わわ私は構いませんから民の方たちまではどどはわあっ！？」

あまりに動揺すぎたのか、こちらに近づこうとして足をもつれさせ、転倒してしまう少女。幸い少し離れていたためか、こっちに被害は無かったのだが……。

「いたたた……」

転倒した少女自身は、腕を地面に強打していた。ひよっとしたら怪我をしているかもしれない。

「大丈夫か？そんなに慌てたりしなくて良いから、とりあえず落ち着いて」

その少女を言葉で落ち着かせながら、俺は覚えた魔法の中に治癒魔法があつたのを思い出す。たしか……。

【minor healing《小治癒》】

ウィンドウを開いて記述する。意図した文字が間違いなく記述された事を確認し、発動させる。

すると、少女が軽く光に包まれ、苦痛にしかめていた顔が次第に戻っていった。

「あ、ありがとうございます」

「いや、構わん。たまたま発動体を持っただけだしな」

元々は、ウィンドウに表示される文字の確認のために持ち歩いていたのだが、まさかこんなところで役に立つとは思わなかった。

座った状態の少女に、手を差し伸べる。意図に気づいたのか、その少女は手を握り返し、

「わわっ!？」

「きゃっ!？」

俺は少女を引き上げるのに失敗して、その少女に引っ張られる形

でぶつかってしまった。

むにゅっとした感触が頭に感じられるんだが……変なことを考える前に、即座に頭を引っぺがす。

「ぐ、つごごごごごめん！」

「いいいいえ、こ、こここちらこそすすみませんっ……！」

慌ててその少女から離れ、立ち上がる。先ほど頭に感じた感触が一瞬よみがえりかけたので、頭を振って振り払う。

「わ、悪い。俺の力じゃ手伝うことは出来ないみたいだ。何とか一人で立ち上げれるか？」

「は、はひっ」

まったく、情け無い限りである。いくらひ弱になったとはいえ、女の子一人も引っぱり上げれないとは。

というか、さっき俺が言った言葉の意味って考えると、この女の子が重いつて言うことになるんだよな。……ぐう、すごい失礼な事言ってるし、俺。

「ええと……それで、セレスティナさんだったかな？」

「は、はいっ……！」

「俺の名前はミハル・トウマ。それでセレスティナさんは何でこんなところにいたの？」

純粹に疑問になったので聞いてみる。ここは図書館の裏手であり、特別に何か施設や設備が置いてあるというわけではない。

魔法の練習なら学舎前の広場ですれば良いし、図書館に用事があるならここに来る必要は無い。

……ひょっとして、俺と同じように休憩に来たのだろうか？それ

だったら、この場を占有していたというのは、悪い事をしてしまったかもしれない。

「は、はいっ分かりました！聖女様のお名前は、ミハル様ですね！」

「……は？」

そんな俺の思考を、セレスティナさんがぶち砕く。

え？さっきから言ってた聖女ってまさか俺の事？聖女ってあれだよね？神とかの祝福を受けた女の子とか、そんなあれだよね？

……ねえよ。

「いや、俺は聖女とかそういうのじゃないから。絶対君は何かを勘違いしてるから」

「そ、そんなことはありません！！私が見たミハル様は、間違いなく聖女様の姿でしたっ！！」

一体俺のどこをどう見たんだよ、この子は。大体俺の服装は黒のゴスロリだろ？黒い服着た聖女ってそれこそありえんだろ。

それが無かったにしても、この子のひいき目は酷すぎる。というか、俺なんかよりも、セレスティナさんのほうがよっぽど聖女っぽいんじゃないのか？

「いやだから、絶対に違うから。ね？」

「し、しかし……」

「セレスティナさんが、俺の何を見てそう思ったのかは知らないけど、俺はそもそも使い魔だから。聖女とかはありえないの」

俺の言葉に、セレスティナさんが驚いて目をみはる。さすがに使い魔で聖女は、ありえないだろうしな。

「まあ、それは置いとくとして……セレスティナさんは、何でここにいたの？」

とりあえず先ほどの質問を繰り返す。というか、それを聞くのになんだけ時間をかけてるんだか。

「あ、ええと……その、ミハル様の寝顔に……見とれてしまって」

そういつて、顔を赤く染めてうつむくセレスティナさん。やばい、なに？このすごく可愛い人。

「え、ええ……と……そ、そうなんだ。寝顔を……って寝顔を？」

……。

急速に恥ずかしくなってきた、思わず顔を俯かせる。顔全体が、熱を持って居るのが感じられる。

ひよっとしたら耳まで赤くなってるかも……と少し焦る。正直、寝顔に見とれるというのが、ここまで恥ずかしいことだとは思っていなかった。

幼馴染や妹に見られた時は、こんなことは……あ、ひよっとして相手が変態とお嬢様という差があるからか。ということは、メイフィールドさんに見られてもこうなるかも……フォルなら、結構子供っぽいところがあるから、ここまではならないと思うけど。

「そ、その……ミハル様は、こちらの学園の生徒なのですか？」

「あ、う、うん。セレスティナさんも？」

「は、はい。その、カルナさんの口利きで……」

ふと、セレスティナさんのその言葉に違和感を感じた。……カルナさんの口利き？

この学園の生徒達は、大半がカルナさんの事を学園長先生と呼んでいる。カルナさんと呼んでいるのは、今のところ俺だけだ。

それに、口利きというのも気になる。口利きということは、一般的に入学したわけではなく、俺と同じように転入してきたのか、あるいは……。

そこでふとセレスティナさんのフルネームを思い出した。セレスティナ・A・ミストレス。

俺が今住んでいる国の名前は、ミストレス王国。国の名前を名前に入れれるのは、王族のみだ。

「……ひょっとして、まさか、セレスティナさんって王族の人……？」

そう問いかけると、セレスティナさんの顔に驚愕の表情が浮かび上がった。

「な、ど、どうしてそれをご存知なのですか!？」

「あ、え、いや。セレスティナさんのラストネームってミストレスだよな？さっき自分でそういつてたし」

ハッと気づいた様子で、口を手でふさぐセレスティナさん。その行動は非常に分かりやすい。分かりやすいけど、そう行動するってことは、それって言うじゃないことだったんだよな？

……王族に関わる秘密を知るって、まずいんじゃない？

「あ、あああのあの、どうかそれはご内密にっ！！」

「それはいいんだけど……でも、セレスティナさんの名前で、今まで気づかれてなかったのか？」

国の王族ともなれば、それなりに名前も知られているはずである。この姿でその名前を名乗っていれば、直ぐにでも気づかれそうなののだが。

「えと、それはカルナさんに協力してもらっていて、今はセレス・ゼノグレートと名乗っているのです」

「あ、そういうことね。さっきは偽名と間違えて本名を言ってしまったということか」

それなら納得できる。……ついでに、この子がすっかり屋さんだということも理解した。

「あれ？でもゼノグレートって確か……」

「はい、カルナさんの子供として、入学させてもらっているのですよ」

なるほどね。……でも、カルナさんって確かまだ若いよな？こんな年齢の子供が……ああ、養子を取ったことにすれば良いのか。

「ええつと、じゃあセレスさんって呼んだ方がいいのかな？」

「いいえ、私の事はセレスとお呼びください」

「？いやだから、セレスさんで良いんでしょう？」

「いえ、ですからセレスとお呼びください」

……ちよつとまった、まさか。

「まさか……呼び捨てで、呼べと？」

「はい」

そんな馬鹿な。あんた仮にも王族だろ。

「そんなことできるわけ無いだろ？セレスさんは女性で、俺より年上なんだぞ？」

「それでも構いません」

「いや、こつちが構うんだってば」

俺が呼び捨てで呼ぶのは、イセリナとセルニアぐらいだ。フォルですらちゃん付けで呼んでいる。

……そう考えると俺の呼び捨ての基準っておかしいのか、いや、あの二人は言動がアレだから呼び捨てにしてるって言うのもあるけど。

「ミハル様がなんとおっしゃられても、これは譲れません」

「いや、というかそのミハル様って言うのも止めて欲しいんだけど……なんで様付け？あ、聖女だからって言う理由だったら、それは無いってさっき言ったよな？」

セレスさんの両目が、真正面から俺に向けられる。どこか、悲しそうな目つきに見える。

「ミハル様がどうおっしゃられても、私はミハル様を聖女様なのだと信じています。ですから、私にはミハル様を敬意を持たずに呼ぶことなど出来ません」

「う……むう」

どうやら意外と頑固なお人のようだ。というか、その容姿でその悲しそうな目を向けられるのは、精神的に結構きつい。

「どうしても、ダメか？」

「申し訳ありませんが、たとえミハル様のお願いであっても、聞き届けるわけには行きません」

しょうがない、と軽くため息をつく。というか、その目で見られ続けるのが精神的にかなりきつくなってきた。

「分かった。呼び方は好きなようにしてくれて良い。ただし、こっちもせめてセレスさんと」

……………。

いや、ダメだからな？ そんな悲しそうな目で、見つめられても……見つめられ……。

「……セレス」

「はいっありがとうございます」

呼び捨てにしたとたん、セレスがすばらしい笑顔を見せる。

……何というか、負けた気がする。いや、何につて聞かれても困るけど。

「おっと、もうこんな時間か……そろそろ教室に戻るか」

「ミハル様……！」

教室に戻ろうとする俺を、セレスが止める。

「その……また、お会いできますよね？」

「同じ魔法学園に通ってるんだから休憩時間にもでも会いに来れば良いじゃないか」

「……はい、ありがとうございます。ミハル様！」

そういつて、今度は笑顔で俺を見送るセレス。戻っていく途中で気になって振り返ると、まだその場から動かずに、笑顔で俺を見送っていた。

……良いけど、君も次授業あるんじゃないの？

俺のちよつとした疑問を、はるか後方から聞こえた謎の叫び声が答えてくれた。やっぱり、セレスはすっかり屋さんで間違いないようだ。

第25話 使い魔少女の信奉者（後書き）

という訳で新キャラです。

王族関係者でかつ聖女様至上主義者です。ミハルの事を聖女様と信じてやまないため、ミハル至上主義ともいえます。

……というか、登場人物で名前付きの大半が、ほぼミハル至上主義状態なんですよ。何この異常なハーレム。

第26話 妹と呼ぶために

授業が終わり、休憩時間に入る。

休憩時間に入るなり、俺は軽いあくびをしてしまっていた。学園での生活にも慣れてきたこともあり、少し緩みが出てきたというところか。

ちなみに隣のフォルもやや眠そうである。昼食後の授業だったということも、その原因の一つかもしれないが。

とは言っても、まだまだ着いて行くのがやっとという身では勉強に手を抜くことは出来ない。今手を抜いて、また勉強会を開く必要が出来てしまったら二人に合わせる顔が無い。

「ミハル様、ミハル様はいらっしゃいますか」

……その声は、そんな真面目なことを考えていた俺の思考を軽くぶち碎いた。

「あ、ミハル様の席はそこなのですね」

そういつて駆け足で近寄ってくる少女。言わずともがな、先ほど会ったセレスである。

「セレス……何かあったのか？」

「いえ、休憩時間になりましたので、これはミハル様の元へと赴かなければと思ひまして」

……休憩時間になるなり赴くつて、お前は俺のメイドか何かか。

「ハルちゃん。この女の人、だあれ？」

「ああ、こいつはセレスだ。少し前に出会った知り合いだな」

「そうなんだあ、私はフォルカ・エティールド。よろしくね」

フォルカが笑顔で挨拶をする。……？何やらセレスがブルブルと震え始めたが、

「か、可愛いですわ……」

そう言つて突然セレスが音も立てずに歩み寄り、フォルカを抱きしめる。若干フォルカが混乱した様子を見せるが、悪意が無いと分かったのかしばらくすると抵抗を止めた。

「こんな、こんな可愛らしい子がいらつしやうたなんて……私、全然知りませんでした！」

「……何やつてるのですの？セレス」

「あ、メイフィールドさん」

そんなセレスを見てか、呆れた様子でやってきたメイフィールドさん。

「貴女の可愛いものの好きは知っていましたが、まさか違うクラスにまで来てまで、そんなことをするとは思いませんでしたわ」

「メイフィールドさんは知り合いなのか？」

「知ってるも何も、私とセレスはライバルですわよ。……ってセレス、聞いているんですの！？」

「はあ……フォルカさんったら、本当に可愛らしいのです……！」

メイフィールドさんに気づく様子も無く、フォルを抱きしめたまま恍惚の表情を浮かべるセレス。……可愛い物好きにしたって、限度があるだろ。

「おいセレス、いい加減フォルを離してやれ。後、メイフィールドさんを無視してやるな」

「はっ！？申し訳ありませんでしたミハル様！」

俺の言葉に慌ててフォルを手放すセレス。フォルは抱きしめられてた事自体は気に入ってたのか、ちよつとだけ残念そうな表情を浮かべる。

……まあ、フォルが気に入ってたんなら、別に良いか。

「セレス、フォルに抱きついてても良いけど、呼吸と目だけはふさがないように後ろから抱き付いてくれ」

「え？……その、よろしいのですか？」

「フォルが喜んでるなら止める理由は無いしな。良いんだろ？フォル」

「うん♪セレスおねーちゃん、とっても柔らかくていい香りだったし、優しい感じがするから好き！」

フォルの笑顔にやられたのか、再度セレスがフォルに抱きつく。ちゃんと俺が言った事を守って、今度は後ろから抱き付いている。

「……それで、いつになったら私の事を認識してくださいますの？」

その様子を見て、何やら青筋を立ててプルプルと震えだすメイフィールドさん。……そういえば、こっちのフォローをしてなかった

な。

「あら、申し訳ありませんメイさん。それで、どのような質問でしたでしょうか？」

「はぁ……もう良いですわよ。貴女の可愛いもの好きは、私の常識をはるかに超えていたということですね」

呆れたようにため息をつくメイフィールドさん。どうやら怒りを通り越して呆れに入ったようだ。

「しかし、セレス君がこちらに来るなどとは珍しいじゃないか。君はいつも、クリス先生の手伝いで忙しいはずだろう？」

「はい、そうなのですが、今日はミハル様にお会いするためにこちらへお伺いしたのです」

「ミハル……様？」

「そういえば、さっきもそう言ってましたわね」

不思議そうな顔で、メイフィールドさんとゼノガルド君がこちらへと振り向く。

「なぁ、セレス。やっぱそれ止めないか？」

「いくらミハル様のお願いであっても、それは聞き入れることは出来ません」

やはりきつぱりと断られた。何というか、本当に頑固な人だ。

「ちょっとちょっとセレス、どういうことですか？貴女、ミハルさんと何かあったんですの？」

「そうだよ。しかもミハル君は、君の事を呼び捨てにしてるじゃないか。僕等どころか、フォル君ですらそんなことは無いというのに

っ

……？何かずれてないか？ゼノガルド君の言い方だと、目上の人に対しての敬意が足りないとかじゃなくて、むしろそう呼んで欲しいっていう風に聞こえるんだけど。

「そうですねっ！私ですら、いまだにメイフィールドさんと呼ばれているのに、ということですよ！？」

「それは、私がミハル様にそう呼んでいただけるようお願いしたからです。お二人も、ミハル様にお願ひしてみてはいかがでしょう？」

……………は？

「ちょっと待てセレス、二人はお前とは違うんだから」

「ミハルさん！私の事はメイと呼んで欲しいですわ！！」

「ミハル君！僕のことはゼノと呼んでくれたまえ！！」

オイ。それで良いのか二人。

「私も、ハルちゃんならフォルって呼び捨てにしても良いよ？」

「あ、ああ。フォルに関しては、フォルが良いんならそれでも良いけど……」

元から、心の中では呼び捨てにしていたしな。フォルは親しみはあるけど、可愛いの一応年上っぽいのでちゃん付けしてたんだけど。

「わ、私も！」

「いや、メイフィールドさんとゼノガルドさんはまずいだろ？二人

とも明らかに目上なんだし」

「そんな事関係ありませんわ！私が呼んで欲しいと思ってるのですから、呼んで欲しいのですわー！」

「その通りだ！ミハル君がどう考えていようと、君にはそう呼んでほしいのだよー！」

……はあ、まあどうしてもって言うなら良いけどさ。

「じゃあ、メイさんとゼノ君……で良いか？俺としても、名前が長くて呼びづらかったからありがたいんだけど」

「まだですわ、ちゃんと『さん』をつけずに呼び捨てで呼んで欲しいのですわー！」

いや、さすがにそれはちよつと……恋人じゃあるまいし。

そう考えていると、ゼノ君が何やら思いつめたような表情で一歩前に出た。

「ミハル君……僕は君を妹にしたいと思っている。だから、まずはその一歩として『さん』をつけずに呼んでくれないか？」

ん？その呼び方にそれを絡めるのか？……だったら、こう言えば良いか。

「なるほどね。だけど、俺が妹になることに関しては条件が決められてるよな？」

「あ、ああ」

「俺はまだ二人の妹になることを了承していない。その時点で、ゼノ君は一歩を踏み出せというのか？」

ゼノ君の全身が衝撃が走ったかのように震える。メイさんも同じように、全身を震わせている。

「そう、その通りですわ。呼び捨てで呼んでもらう事を、妹とするための第一歩と考えるのなら、今の私ではまだ足りてはいないかもしれないかもしれません」

「そうか……僕は、焦るあまりに順番を取り違えてしまっていたのかも知れない。すまないミハル君。僕はまだ、その呼び方でも満足するべきだったんだ」

いやまあ、そこまで仰々しく考える必要は無いんだけどな?というか、人を妹にすることだけに一体どれだけ真剣なんだよ。

「あの、ミハル様。妹というのはどうということなのですか?」

「ん? ああ、あの二人はどうも俺を妹としたがっているらしくてな。俺が認めたら、二人の妹になることになってるんだ」

といつても、妹になるったってどうすれば良いのかも分からんけど。仮の妹とか義理の妹とかそういうのかね。

妹ごっこをすれば良い、というレベルじゃないだろうしなあ……二人の真剣っぷりを見てると。

「そ、それは……私も参加できるのですか?」

「は?……何だ、参加したいのか?」

ピンと来た。俺の口元が、かすかに邪悪の笑みを浮かべる。

……って、参加して良いのか? こいつ俺のこと聖女とか言ってたよな? 聖女を義理の妹につて、結構不遜な考えだと思っんだが……宗教的には大丈夫なのか?

「はい、それはぜひとも参加させていただきたいです！」
「なっ！？ちよつと待ちなさい！！貴女が参加する権利はっ！！」
「メイさん、これは俺の意思が一番関わっていることだ。だから、その参加する権利があるかどうかは俺が決める。違うか？」
「ぐ、それは、そうですね……」

ゼノ君にもちらりと視線を向けるが、不満はあれども意見は無いようだ。改めてセレスに振り返る。

「さて俺を妹にするということだが……当然参加する以上は、セレスもメイさんやゼノ君と条件を同じにしなければならない。分かるか？」

「は、はい。ですがそれが……ま、まさかっ!？」

「参加する場合は、俺はセレスの事をさん付けにする。あと、セレスも俺の事を様付けじゃなくてさん付けにすることだ」

セレスの表情が段々青ざめていく。条件を同じにすると聞いたからか、メイさんとゼノ君の不満そうな表情は一気に和らいで行った。

「し、しかし……それは……その」

「セレス。セレスは俺に、セレスだけをひいきをしるでも言うのか？」

それは、暗に聖女に対して不誠実を要求するのか？という問いにもなる。

これはセレスにとっては、耐えられない事だろう。……妹にするのは良いのか？とも問いたくはなるが。

「そ、そんなことは言いません！わ、分かりました。ミハル様の言うとおりにしますので、ぜひとも私にもその権利をお願いします」

「ミハルさん……だよ。セレスさん？」

「は、はいっ！ミハル……さん」

交渉が上手く成立したようなので、俺はセレスさんに笑いかける。セレスさんも、若干引きつってはいたが、俺に笑顔を返してくれた。

「二人とも、それで良いよね？」

「ええ、それは構いませんけど」

「何というか、セレス君が少し哀れに見えてしまったよ」

何とでも言うが良い。とりあえず尊敬する年上の人を軽々しく呼び捨てにするのは、俺の信念が許さんのだ。

え？イセリナとセルニア？あの二人は別に尊敬して無いし。

「えへへ、これでハルちゃんのおねーちゃんとおにーちゃんが三人になっただね」

「いや、まだ認めて無いからな？」

確かに認めるつもりはまだ無い。出会ってから、一月も経っていない相手を、兄や姉と呼ぶのは抵抗がある。でも……ふと思う。

「？どうしんですの？ミハルさん」

「僕等に何か用かい？ミハル君」

「何かあればおっしゃってください、ミハルさん」

俺はこの三人を尊敬している。それは恐らく間違いない。
だから、今では無いけど遠い未来。彼らを兄や姉と呼ぶ、そんな
可能性があっても悪く無いかもしれない。

とても優秀で見た目麗しい三人の兄妹候補達を見て、俺は柄にも
無くそう思ってしまった。

「で、そろそろ授業始まるけど、セレスさんは大丈夫なのか？」
「はっはううっ!？」

…… まあ、若干抜けてる人も居るけどそこはご愛嬌か。

第26話 妹と呼ぶために（後書き）

というわけで、妹争奪戦に一人追加です。

普通王族の場合、宗教関わりそうな偶像だと思っている人を義妹にしようとは思わない気はしますが、そこは彼女の若気の至りと作風によるコメディ効果ということで。あんまりドロドロしたのは作者が好きじゃないですし。

第27話 疑問と違和感

【lamp《灯火》】

魔法を記述して実行する。イメージに従い、俺の指先から小さな火がポツと生み出される。

「あらあら。ハルちゃん本当にもう魔法を覚えてしまったのね、すごいわ」

「ほんと凄いよ。おねさんは、いつくらやっても初級魔法すら使えなかったからね」

現在時刻は夕方、場所はイセリナの家。

俺は今日、魔法を使えるようになったことをイセリナに報告していた。ちなみにセルニアは何故か初めからイセリナの家に居た。

フォルは勉強で疲れたのか、寝室で一休み中である。多分一時間もすれば、起きて来て元気な姿を見せてくれると思う。

……というか、セルニアは冒険者の仕事をしてなくて大丈夫なのか？とちよつと心配になる。まあ、腕自体は悪くないらしいので、心配するだけ無駄なのかもしれんが。

「覚えたといっても、まだ大した魔法を覚えてないけどな」

「いやいや、この短い時間に一発で成功させるだけの技術を身につけたことが凄いんだよ。おねさん、まだ一回も成功して無いしさ」

それは多分記述をミスってるんだと思う。一文字でも間違えると失敗するみたいだし。

「一応、この初心者用の杖で発動できる魔法は全部覚えてる。まだ使い慣れてないから、実戦は難しいと思うが」

「あらあら、ハルちゃんってば本当に凄いのね。おねさんハルちゃんみたいな使い魔を持って、鼻が高いわ」

いや、頼むからイセリナももう少し努力を……まあ、最近は少しは錬金術師として動いてるみたいだが。

「それでまあ、魔法の先輩としてのイセリナに、ちょっと聞きたい事があるんだが」

「あらあら、でも私は誰かに魔法を教えるのは苦手で」

「いや、答えるだけで良いから。この魔法記述部分は、ひよっとして2つ以上の絵を描けるのではないか？もう一つ、属性は本当に【非殺傷】以外に無いのか？」

俺の言葉にセルニアが首を傾げる。無理もない、魔法を使えるようになって一日も経ってない人間が、疑問を抱くようなものではないだろう。

だが、元の世界でインドア気味だった俺には、魔法を記述した際に残る大きな空白が非常に気になっているのだ。そこには別な何かを記述できるような、そんな気がして仕方が無いのだ。

「ハルちゃんは、何故そう思ったのかしら？」

「ただ何となくそう思ったただけだが。宮廷魔導師候補だったイセリナなら、何か知ってるんじゃないかって思ってたな」

そう、一般的な魔法使いと比べれば、宮廷魔導師候補のイセリナは魔法に対する知識が深いはずである。

なら、そういったことに関して何かを知っているのではと思った

のだ。

……ちなみに、この事はメイさんやゼノ君達には聞いていない。というか、聞き損ねたというのが正解である。

「そうね、ハルちゃん、確かに魔法記述部分にはいくつもの魔法絵が記述できるわ。でも、ハルちゃんがそれをするには、まだ早んじゃないかしら？」

そういつて、自分の唇を人差し指で押さえるイセリナ。何か難しいこととかあるのだろうか？

「ハルちゃんが言っているのは、重複魔法といってね？いくつも絵を描いてようやく起動する技術なのよ。それも、あのカルナさんでも失敗することだってある技術なのよ？」

いくつも記述して、ようやく起動する……？つまり、何か修飾語などが必要なのだろうか？

「それに、発動したい魔法が発動しなかったり、発動して欲しくなかった魔法が発動したり、危険なのよ？」

……どうということだろうか？そもそも記述していない魔法は発動するはずも無いし、いくつか描くだけならそんな……。

「それって、どういうことだ？」

「たとえば【火の矢】と【氷の矢】を同時に使うとすると、その際に【風の矢】と【水の矢】と【雷の矢】を記述する必要があるのよ」

そんな馬鹿な。何でそんな無駄をする必要が……？

「それでも時々失敗して、【風の矢】が発動してしまったり、何も発動しなかったりするのよ？」

……………いや、これはもしかすると。

ありえるかもしれない。イセリナ達がもし、象形文字のようなアルファベットばかりをイメージしていて、そのイメージを実際にウインドウに記述される文字とは別物だと思っているとしたら？

成功率は格段に落ちるし、狙った魔法を起動することも出来ないだろう。それに、重複魔法の場合はいろんな誤認が起きていてもおかしくは無い。

……………イセリナに伝えるべきか？いや、まだ早いか。少なくとも、伝えるのは自身でそれを実証してからの話だろう。

「そして、属性に関しては【非殺傷】以外の属性は知られていないわ。カルナさんに聞いても、きっと同じ答えよ？」

ふむ、元宮廷魔導師長でも知らないのであれば、イセリナが知っているはずは無いか。……………しかし、1種類しかないというのも不自然な話だが。

「わかった。イセリナ、教えてくれてありがとう」

「うふふ、ハルちゃんにお礼言われちゃいました」

そう言って、嬉しそうに微笑むイセリナ。……………使い魔にお礼を言われて嬉しいがる主か。何かが違わね？

その後、休憩を取って元気になったフォルも加わり、夕食の時間となった。

学校で起きたことや、俺が魔法を沢山使えるようになって驚いたこと、新しい姉候補が出来たことなどを話ながら、夜は更けていく。

……うん、セレスさんの話のくだりで、イセリナとセルニアの目つきが若干変わった気がする。するんだが、まあ気にしないようにしておこう。

その後もお風呂に入ったり、一緒に入ろうと言ってきたイセリナやセルニアを睨んだり蹴り倒して黙らせたり、風呂上りでいきなりフォルに後ろから抱きしめられたり、それにイセリナとセルニアが便乗したりして時を過ごしていった。

「えへへ、ハルちゃん大好き♪」

「……………」

フォルの直球な親愛表現は正直照れる。普段から可愛いし、信頼しているだけに、その照れをどうしても隠せなくなってしまう。

俺のフォルへの感情って、ひょっとしなくても恋愛感情混ざってるよな……うん、俺ってロリコンだったのか。正直落ち込む。

フォルのほうは俺を女の子と認識してるだろうし、多分親愛って感じなんだけどな。

「えへへ、ハルちゃん顔真つ赤で可愛い♪」

『フォルのほうが可愛いと思うけど』とか、とても今そんなことは言えない。相手はまだ10歳前後だと言うのに、俺は俺自身がこ

ここまで初心だとは思わなかった。

そういえば、まともな恋愛って経験したこと無かったんだよな。まあ、元の世界の周りに居た連中を考えると、^{ヘンタイども}当たり前のことか。

夢の中に潜る。

初めてこの世界で夢に潜ってから、俺は毎日いろんな夢に潜っていた。

もちろん、あの公園の少女にも何度も会いにいった。名前も、顔も、輪郭すらも覚えることはできないが、何故かとても可愛いのだと言うことだけは覚えている少女。

彼女はまるで俺の事を見透かすかのように、いろんなことを知っていた。でも、何故か俺はそのことに対して嫌悪感を抱くことは無かった。

まるで俺の心を覗き見られているような感覚があるのに……あの少女ならそれとも良いと、あの少女ならそれが当たり前だとすら思えてしまっていた。

今日も彼女に会いに行く。ただし、目的はいつものようなおしゃべりでは無い。

「いらっしやい、今日もまた私に会いに来てくれたのね、嬉しいわ」
「ああ、今日はちょっと君に聞きたいことがあってね」

いつもの様に、現代の公園で立つ少女。その表情が、ゆっくりと笑みに変わっていく。

「クスッ魔法が使えるようになったのね。おめでとう」

「ありがとう。といっても、まだ簡単なのしか覚えていないんだけどさ」

「貴女なら大丈夫。難しい魔法も、複雑な技法も、きっと直ぐに上手に使えるようになるわ」

そういつて笑う少女。俺が納得するような根拠は無いようだけど、この少女が言うとは故かとても説得力があるように聞こえて来る。

「それで、魔法について不思議に思ったことがあるのね？でも、それを私は直接教えることが出来ないの」

「そうか……まあ、それはしょうがないかな」

少しだけ期待していただけあって、ちょっと気落ちしてしまう。だが、前にも同じ事を彼女は言っていたので、仕方ないのかもしれない。

「落ち込まないで……貴女が悲しむと、私もとても悲しくなってしまうの」

そう言っつていつの間近に近づいてきたのか、俯いた俺をそっと抱きしめて来る少女。

「貴女なら、きっと自分で見つけることが出来るわ。貴女なら、きっと自分で気づくことが出来るの」

「自分で……？」

「そう。だから、私が少しだけその後押しをしてあげる。前と同じ……おまじない」

少女が俯いた俺の顔を上に向ける。ゆっくりと少女の顔が近づいてきて……。

ふわりとやわらかい感触が、唇を包んだ。

朝一番の、小鳥の鳴き声が聞こえる。

鶏の鳴き声じゃないんだな……とか、訳の分からない事を考えながら俺は体をゆっくりと起こす。

ふと、夢の内容が思い起こされる。……夢の中の出来事だと分かっている、思わず唇を指で押さえてしまう。

頬が熱くなっているのが分かる。俺って、こんなに純情だったんだなとか、意味の分からないことをちよつとだけ考えた。

ふと、隣ですやすやと眠っているフォルが見えた。可愛い寝顔で眠るフォルの、小さな唇が……。

「って、何考えてんだ俺は？」

慌てて視線をそらして頭を振る。あの夢の後だったからだろうか、妙にフォルを意識してしまっている気がする。

軽く深呼吸をして、気分を落ち着かせる。気分が落ち着いてきた

ところで、フォルへと視線を戻す。

幸せそうに眠るフォルを、可愛いと思う気持ちは生まれても、それ以外の変な感情が生まれなくなった。うん、どうやら俺も冷静になることが出来たようだ。

「で、こんな朝方に何のようだ？セルニア」

「え？いや、その、別にハルちゃんの寝顔が見れるかな？とか、そんなことは思っていないんだけど」

思ってたんだな。というか、セルニアの気配のようなものは感じていたんだが、今声がしたの上だぞオイ。

「いい加減、蜘蛛の真似事はやめようとか思わんか？」

「いや、天上つて結構警戒されにくいから、色々と便利なんよ？あたしが居るのに気づかれたのも、ハルちゃんが初めてだし」

……おい、セルニアは普段から何か犯罪行為でもやってるんじゃないだろうな？

「良いからとつと降りて来い、あ、間違っても俺やフォルの真上に降りてくるなよ？」

「はいはい」

そういつてセルニアが降りてくる。……俺の真後ろに。

「お、おまつ！？」

「んっふっふ、油断大敵よ？ハルちゃん」

そういつて、後ろから抱き付いてくるセルニア。完全に不意を付かれた形で、抵抗する事も出来ない。

「いきなり真後ろに落ちてくるなよっ！危ないだろうが！！」

「んふふ、おねーさんの落下技術を甘く見てはいけないのだ。はあ……久しぶりにハルちゃんを独占♪」

そういつて、すりすりと頬擦りをしてくるセルニア。とりあえずため息はつくが、抵抗する気が起きないのでやりたいようにやらせることにした。

「あり？ハルちゃん、いつもみたいに抵抗しないの？」

「たまには良いだろ。暑苦しいけど、襲ってくる訳じゃないのならそこまで気にはせん」

まあ、後ろからだから視界や呼吸が確保できてるって言うのもある。こいつら時々、俺を殺そうとしてるんじゃないかと思う時があるし。

「そっか、これからはハルちゃんに思う存分抱きついても良いのねん♪」

「たまにはつつただろうが。後、やるにしても視界と呼吸だけは塞ぐなよ？アレは下手をすると本気で死にかねん」

「あははっはい。了解しました、お嬢様っ♪」

そういつて頭を撫でてくるセルニア。むう……悔しいけど、ちょっと気持ち良い。

「あゝ、おねーちゃんハルちゃんに抱きついてる。私も私も♪」

いつの間に起きたのか、そこにフォルが加わる。……まあ、フォルが見たらこうなるって分かってたけどさ。

その後、出てこない事を不審に思ったイセリナが様子を見に来て、さらに加わってしばらく団子状態になったのは言うまでも無い。

……ついでに遅刻しそうになった。朝っぱらから学園まで駆け足とか、本気でこの体だときつかった。

第27話 疑問と違和感（後書き）

……そろそろガールズラブの注意書きとか必要ですかね？
実際ミハルは、心は男の子なので違う気もするのですよ。見た目は女、頭脳は男。めい……失礼しました。

第28話 重複魔法

昼食後の休憩時間。

俺は昨日疑問に思っていたことを実行するために、人目の少ない図書館裏へとやってきた。

途中でメイさんやセレスさんに出会ったのだが、何故か付いてこようとする二人は何とかまいた。正直今回のこれは、あまり人には見られたくない。

ゆっくりと手に持った杖に力を込める。浮かび上がったウィンドウに、イメージしていた魔法文字えいごを打ち込む。

【lamp《灯火》】 【lamp《灯火》】 【lamp《灯火》】

……とりあえず3つほど記述したところで止める。この間約3秒ほど。

そして再度杖に力を込めて、発動させる。

ポツという音とともに、俺の周囲に3つの灯火が浮かび上がった。ちゃんと発動していることを確認し、直ぐにその灯火を消す。灯火とはいえ、燃えやすいものが近くにあれば燃え移ることもあるからだ。

やはり、俺が予想していた通りの結果となった。この世界の魔法は、限りなく無駄の多い方法で使われているようだ。

簡単にそれを実証できてしまったことに、俺は思わず頭を手で押さえた。というか、これで俺は難しい技術であるはずの重複魔法を、

2日で出来るようになったと言うことになる。

それを迂闊に周囲に知られてしまえば、恐らく相当目立つことになるだろう。……あまりそれは好ましくは無い。

「……それにしても、何かしっくりこないんだよなあ」

先ほどの重複魔法について、こう、何ていうか頭に引っかかる部分があると言うか、何かこれにも無駄がある気がするというか。

何か、これよりもっと効率の良い方法を知っているような気がしてならない。同じものをいくつも書くことに、違和感が……？

重複魔法とは、一回の魔法使用でいくつもの魔法を発動させる技術の事だ。

昼食までにいろんな人に聞いてみたところ、それは非常に難しい技術らしい。

いくつもの異なる絵を描く必要がある上、どの魔法が発動するのかが描いた本人でも分からない。

重複魔法を実用レベルで利用できるのは、この国でも居ないとされている。確実に出来るのは、同じ魔法をいくつかが発動させることぐらいだが、それなら上位の魔法を覚えたほうが余程マシだろう。

さらに、発動しなかった分の魔法の魔力は無駄になる。重複魔法が魔法の失敗を前提としているため、必然的に単発の魔法より魔力の消費が跳ね上がってしまう。

以上の理由から、あまりにもハイリスクローリターンであるとされ、使い手がほとんど居ない技術となってしまったのだ。

この技術は精々変わり者が覚えるくらいで、大半の魔法使いはこ

の技術を覚えようとしならしい。覚えたとしても同じ魔法を並べる程度で、魔法の成功率が高いことを示すバロメータ程度にしか考えられて無いそうだ。

「この状況は好都合ともいえるけど、確実に目立つんだよな」

俺は魔法語を読める関係か、魔法の精度は非常に高く、記述もそれほど遅くは無い。

重複魔法を使いこなせば、恐らく一般的な魔法使いに対して大きなアドバンテージになるだろう。……問題は、それをするとな非常に目立つと言ったことだが。

それに、もう一つ疑問がある。この魔法を使っている俺は妙な違和感を抱いたのだが、俺はこの世界に来てからしか魔法を勉強していない。読んだ本だって特別なものは何一つ無い。

それなのに、俺は一体どこに違和感を抱く要素があるというのだろうか？俺が無意識にしか気づいていない何か、この重複魔法の中にあると言っただろうか？

【light ball《光の球》】【light ball《光の球》】
光の球】【light ball《光の球》】

違和感を確かめるため、今度は【光の球】を3つ発動させてみる。光る球が目の前に3つ生まれたが、違和感については何も分からないままだった。

いつそ何個も書いてみれば、その違和感の内容に気づくことが出来るのだろうか？いや、それはまずい。いくら人目が無いといっても、あまり派手に魔法を使えばその魔法自体が人目に付くようになってしまう。

……というか、光の球なんぞ何十個も生み出したら、そりゃあ確実に騒ぎになるわな。

頭に思い浮かべていた計画を断念し、生み出していた光の球をかき消す。ならば次は、違う魔法を組み合わせてみるか？

そんな事を考えていたら、

「すばらしいですわっ!!」

突然後ろから現れたメイさんに、俺は押し倒される事となった。

「……あの、メイさん？」

「す、すみません。その、つい」

「いや、うん。いきなり押し倒されたのも問題だけどさ。それより……何でここにいるの」

「そ、それはその……」

「申し訳ありません、ミハルさん。その、私が……」

そういつて物陰からセレスが姿を見せる。……どうやら、俺が迂闊だっただけのようだ。

「あゝなるほどね……まあ、良いや。で、見ちゃったわけね？」

「はい、それはもうすばらしい光景でしたわ」

「本当に素晴らしいです。まさかここまで早く、重複魔法を成功させてしまうなんて。これは、学園が始まって以来の出来事に間違いありません」

ああ、やっぱり。こうやって無意味に評価を上げたくないから、

二人には……というか、誰にも見られなくなかったのだが。

「やはりミハルさんは、聖女様で間違いありません。まさか、聖女様のお力をこの目で見る事が出来るなんて、思いもしませんでした」

「ミハルさんが、聖女？……でも、そうですね。昨日初めて魔法を覚えた人が、今日になってもう既に重複魔法を使っているんですもの、聖女と言われてもおかしくありませんわ」

「いや、おかしいから。俺が聖女っておかしいからさ。大体重複魔法と言ったって、【灯火】だの【光の球】だのをたった3つ作れただけだろうが」

二人の飛躍し始めた思考を何とか正す。聖女とか呼ばれて偶像化されたりするのは、俺としては出来ればお断りしたい所なのだ。

聖人や聖女と呼ばれ、偶像化されてきた人たちが辿って行った末路は、そのほとんどが悲劇で終わりを告げている。……俺は好んでその足跡を踏みたいとは思わない。

「し、しかし」

「しかし何も無い。俺は前から聖女では無いと言っているし、これからも聖女になるつもりも無いんだ」

「……ミハルさんがそこまで否定するなら、私が言うことは何もありませんわね。ミハルさんなら、聖女もぴったりだと思いますけど」
「め、メイさん」

「セレス。私は貴女の信仰心を存じているつもりですわ。でも、それをミハルさんに押し付けるのは、違うと思いますの」

抗議をしようとするセレスさんに、メイさんが真っ向から反論する。

「ま、どうしてもというのなら止めはいたしませんわ。ただし、それにこだわっている間に私がミハルさんを妹にしまっても、文句は聞きませんわよ?」

「っ!?!……ま、負けません!!」

……何ていうか、宗教が掛かっているのに良いのかそれで。いや、それで収まってくれるなら俺としてはありがたいけど。

「まあ、それはそれで良いけど、とりあえず俺が重複魔法を使えたことを他の人には言うなよ?」

「え?何故ですか?ミハルさんの素晴らしさは、それこそ国中に広めるべきものだと思いますが……」

「そうですね。ミハルさんであれば、成長していけば宮廷魔導師長ですら夢ではありませんわ。むしろ、ミハルさん以外の宮廷魔導師長などありえませんか?」

まあ、二人はそういうだろうと思っていただけ。

「軍に従事するとか、それこそ俺はお断りだから。大体、二人とも俺が使い魔だって事忘れて無いか?使い魔が宮廷魔導師長とか、なれるわけが無いだろうが」

俺の意見に、二人が不満そうに黙り込む。ひよつとしたらセレスなんかは、自分の権利を駆使してでもやりかねないのだが。

前例が無ければ前例を作ってしまうえば良い……とか、暴走されても困るんだけどな。他の宮廷魔導師達からすれば、使い魔に指示されるのは屈辱だろうし。

「それと、俺自身があまり目立ちたくないというのもある。だから、二人にはこの事は黙っていて欲しい」

「……分かりましたわ」

「はい、それがミハルさんの頼みであれば。私は誰にも言いません」

俺の頼みならば仕方なし、と言った様子で返事をする二人。二人が了承してくれたことで、ようやく俺は安堵の息を漏らす事が出来た。

俺はこの世界で目立ちたいとは思っていない。少なくとも、目立たなければ目立たない方が良いと思っている。

その理由は簡単だ、俺の体が脆弱すぎるから。

その気になれば、俺は簡単に有名になることが出来る。俺が持っているいくつかの知識、それは間違いなくこの世界では破格の情報なのだろう。

だからこそ……ろくに自衛策も持たないまま、その知識による力を見せてしまうのは危険なのだ。確かに、一般に広められている情報の中に、この知識は存在しない。

だが、この世界の権力者達が、この知識を知らない保障がどこにある？そして、その知識を抑え、権力を保っている可能性は……決して無いとは言えないだろう。

確率は低いかもしれない。だが、万に一つそうだとしたら、巻き込まれるのは俺だけでは済まない。

そう考えれば……この知識を広めたりするのはしばらくの間は待つ必要がある。少なくとも、この世界についてのある程度の知識や、力を持つてからにしたほうが良い。

とりあえず、重複魔法を練習する場合は誰も見ていない場所で練習する必要があるだろう。この二人はともかくとして、他の誰かに

見られてしまった場合は、その話が流れることを防ぐ手立ては無いのだから。

「しかし、本当にお見事でした。先ほどミハルさんはまだ魔法を覚えて二日目との事でしたが、一体どちらでこの重複魔法の事を教えてもらったのでしょうか？」

「ああ、それは俺の主からだな」

と言つても、俺は主の言^{イセリナ}つたとおりにはやってないわけだが。

「さすがと言うべきですわね。たった1日で、単一の魔法とはいえ重複魔法を覚えさせてしまうその教育法。魔法学園に教師として呼ばれていないのが、不思議で仕方ありませんわ」

本人は、教えるのが苦手だつて言つてたしな。まあ、何も言つまい。

「と言うか、別に単一の魔法なら何十個も並べてしまえば出来ないか？」

「……もしそれをしているのだとしましたら、ミハルさんは素晴らしい根気をお持ちと言うことになりますか」

「たとえ【灯火】や【光の球】だとしても、何十回ぶんの魔力なんて……私でもそれなりにきついですよ？」

「ああ、そういえば俺は魔力を結構持つてるらしくてな。その辺りで結構無駄遣いも出来るんだよ」

そう言つと、二人が若干怒つたような表情でこちらを睨んできた。

「ミハルさん。魔力はあまり無駄遣いをしないように、よろしくお願いします」

「魔力は減らしすぎるとろくに体も動かせなくなりますし、空になれば気絶してしまいますわ。私達を心配させないためにも、そんなことにならないようにお願いしますわ」

「あ、ああ。分かった」

どうやら、二人に心配をさせてしまったらしい。まあ、いくらあったとしても減る時は減るんだし、俺としても気絶何ぞしたくない。

「そ、その、どうしてもというのなら、私の目の前でしたら……その、私が介抱して差し上げても構いませんわ！」

「わ、私もです！ミハルさんを膝枕で介抱する準備なら、いつでも調っていますから！」

「いや、気絶するつもりは無いから。……あ、でもこれからは、重複魔法を練習する時は二人に声を掛けた方が良いか。二人がいれば、今回みたいに誰かに見られないように、見張ってもらうことだって出来るだろうし」

既に二人には知られてしまってる以上、二人に黙ってやる理由はない。それに、万に一つ気絶してしまった場合の助けも必要だし。

「そ、その通りですわ！私、ぜひともミハルさんの練習に参加させていただきたいですわー！」

「私もです、私もぜひ、ミハルさんの重複魔法を間近で見させてくださいー！」

いや、そこまで期待されても、あまり派手なことをする気は無いんだけど。

まあ、懸念だった二人にとって迷惑じゃないか？と言う事に関しては、どうやら二人にも利点があるようで問題ないようだ。

「そういえば、二人はもう重複魔法は出来るのか？」

「私は単一の魔法でしたら、少しは出来ますわよ」

そういつてメイさんが一歩前に出る。魔法のウィンドウを出して集中し始める。

しばらくすると、ポツポツと二つの灯火が浮かび上がった。メイさんがそれを確認し、すぐにかき消す。

「私が出来るのはこれくらいですわね」

「2個中2個か。結構精度高くないか？」

「いくらなんでも、それは過大評価に過ぎますわよ。私は10個は記述してましたもの」

……げ、それじゃ成功率は2割程しかないのか。それならさっき言った何十と記述して3つと言うのも、結構現実味を帯びてる訳だ。

メイさんはクラスの中では一番優秀な訳だし、やっぱりあまり重複魔法は使わない方が良さかもしれん。迂闊に何十個とか【光の球】を発動してなくて、本当に良かったと思う。

「セレスさんは？」

「申し訳ありません、私はまだ重複魔法を一度も成功させたことがございません」

セレスさんは使えないか。セレスさんも優秀そうに見えるんだけど、やっぱり重複魔法の成功自体が難しいと考えた方が良さな。

「まったく、あれだけ成績優秀だというのに、何で重複魔法を未だに一度も成功できないのか。理解に苦しみますわね」

「えっと、メイさん？」

「……何でもありませんわよ。貴女はただ、私のライバルとしてもっとしっかりすれば良いのですわ！」

何だか突然ツンデレらしいものが発動しているけど、とりあえずは放っておくか。

ひとまず、重複魔法に関しての情報はある程度手に入った。まあ、少なくとも、魔法を使い始めた俺が人前で使って良い代物では無いだろう。

そうになると、当面の戦力として使えるのは単発の魔法……それも、簡単な魔法のみである。

さて、その条件でいかにしてアレを切り抜けるか……正直悩みどころである。パートナーがいるとは聞いているので、そのパートナーに任せるのも手なのだが、魔法を覚えた以上は少しは役に立ちたいと思う。

何とか、手持ちの魔法と知識を上手く利用していくしかないか。そう考えて、俺はいくつか問題が発生するパターンとその対処を思い浮かべていく。

「ミハルさん？今度は、何を考え込んでいらつしやるのですか？」

「ん？ああ、次の時間は森での錬金術の採取実習だから、その対策をな」

二人の表情がピタッと止まる。そしてセレスさんは何故か絶望の表情に、対するメイさんの方はうつすらと笑みを浮かべ始めた。

そして始まる言い争い。まあ、何を言おうが他クラスであるセレ

スさんに、俺と一緒に森に入る機会はない。

もつとも、大体こういう時って、勝利宣言しているメイさんと一緒にはないんだけどな。

俺は何となく今後のオチを先読みしながら、再度森の中でのいろんなパターンに対する対策を練っていくことにした。

第28話 重複魔法（後書き）

と言うわけで、次は再度森が舞台となります。

え？先読みされたオチですか？……まあ、気にしないでください。
読んでいる大抵の人が先読みしていると思いますし。

第29話 最弱のパートナー

「納得いきませんわ!!」

「そうだ、納得いかない! 何故僕がミハル君と一緒にじゃないんだ!」

辺りに、メイさんとゼノ君の叫び声が響き渡る。それに驚いたのか、森の中から何羽かの鳥が飛び立った。

さて、何故この二人が叫んでいるのかというと……まあ、実習のパートナーの組み合わせが気に入らないらしい。読めていたオチだと思っただけだな。

初めての錬金術の材料採取実習。実施場所はトレイアの森。

森の入り口周辺での採取なので、魔獣に襲われたりといった危険はあまり無い。精々が、ひよっとしたら狼数体に襲われるかもしれない程度か。

今日は特に霧が発生している様子も無く、迷う危険もほとんど無い。まあ、余程運が悪く無い限り、怪我すらないような状況である。

……とはいっても、今の俺にとっては狼数体は中々厳しい。色々対策は考えてあるが、それでもあまり出会いたいとは思わない。

あの二人は、恐らくその辺りを考慮して異議を唱えているのだろう。嬉しいような情け無いような、なんともいえない気分になってしまう。

だが、それを通すわけにも行かない。なぜならそれは、俺のパートナーとして選ばれた相手をけなしている事にもなってしまうから

だ。

「二人とも、そこまでにしておけ」

「し、しかしだね」

「これは先生が決めたことだ。授業の内容である以上、それを生徒が覆そうとするのは良くない」

俺の言葉に二人が黙り込む。やれやれ……俺以外はこの森での採取には慣れてるはずなのだし、余程俺が足を引っ張らない限りは大丈夫だと思うんだがね。

「こうなったら、先生を脅してでも……」

「止めるっての。今先生は真面目に授業をやってるんだから、んな事したら怒るぞ？」

「う……ごめんなさい」

思考が怪しい方向に走り始めたメイさんを、説得して止める。つか、そんな事やってたらただの暴君だろうが。

「というわけで先生、予定通りのパートナーで問題はないぞ」

「は……わ、分かった、ミハルさ……ミハル君。」

「……とりあえず、先生は早めに元の口調で慣れてくれ。頼むから」
「はっ、う、ああ」

先生はアレから、どうやっても口調が元に戻りそうに無かったの
で、一度裏手に呼び出してご褒美と言葉攻めを繰り返して無理やり
口調を元に戻させた。

初めは抵抗しようとしていたが、口調を元に戻さなかったら二度
とご褒美をしない、と言ったらあっさりと応じてくれるようになった。
……そんなに欲しいか？ご褒美。

まあ、俺だけひいきをされているなどとは思われないし、何より平常時に先生からああいう態度を取られるのは、俺が気に入らない。俺は女王様とかそういう趣味は無いのだ。

「えっと、それじゃあよろしくね」

「ああ、確かまだ互いには自己紹介してなかったな。俺はミハル・トウマだ、よろしくな」

「え？う、うん。僕はミルト・クルトウナ。よろしくね」

俺が笑顔で自己紹介をすると、ミルト君は若干顔を赤くして返してきた。

実際に喋ったことは無いが、何度か顔を見かけたことはある。俺の前の席に座っていた、大人しめの男の子だ。

「ん？どうした？体調でも悪いのか？」

「う、ううん。大丈夫だよ。トウマさんの方こそ、いつも顔色悪そうだけど大丈夫なの？」

「俺のこれは元からだからな。あ、あとトウマじゃなくてミハルって呼んでくれ」

「え？……う、うん。分かったよ。ミハルちゃん」

いきなりちゃん付けかよ。まあ良いけどさ。

ってそんな事よりも、やはりミルト君の顔が赤くなっている気がする。うつむ……まあ、咳やくしゃみをしてるわけでも無いし、風邪のようには見えんのだが。

「僕の事は、ミルトって呼んでくれて良いから」

「ああ、それじゃあこれからの森での採取、よろしくな？ミルト君。俺は採取の実習は初めてだから、色々教えてくれると助かる」

ミルト君は、どうやら見た目通りの大人しい性格のようだ。緑色の短い髪の毛と翠色の眼。他の男の子と比べて低めな身長は、どこか小動物のような印象を思い起こさせる。

とは言っても、採取実習を経験していることは間違いない。それに、どんな力の弱い奴でも俺より弱くは無いはずだし。

「あう、ちょっと自信ないけど……」

「何言ってるんだか。ミルト君は俺と違って、何度も実習を重ねてるんだろ？もつと自信を持って行けば良いだろ」

「で、でも、僕は森の中で狼と戦ったこと無いし……」

おろ？戦闘未経験者だったか。でも、大抵の奴は森の採取の最中に一度は狼と交戦してるって聞いたけど。

「僕は狼をいつも避けてるから……だから、そんな自信なんてもてないんだよ」

「おいおい、何を言ってるんだ？それはつまり、狼に遭遇する前に避ける方法を持ってるって事だろ？それは十分すごいことじゃねえか」

俺の言葉に、ミルト君が口到手を当てて驚く。

「戦闘何て言うのは、回避できるんなら回避した方が良いんだよ。お前は下手に狼と戦うよりも、よっぽど上策をとってるんだからな」
「でも、みんなは僕の事臆病って言うし」
「臆病で結構じゃないか。むしろ俺は、お前が臆病であってくれると非常に助かるんだからな」

俺の言っている事の、意味が分からないといった様子を見せるミルト。俺は別に、間違ったことを言っていないと思うんだが？

「俺は、狼とまともにやりあえば多分負けるんだよ。だから、ミルト君が事前に避けられる力を持つてるんなら、それは俺にとって非常にありがたい事なんだ」

「え？え？でも、ミハルちゃんやクラス長さんやゼノガルド君や、先生にだって凄い認められてるよね？」

「あれは、あくまで俺の力が認められてる訳じゃないからな。むしろ、俺は過大評価をされてると思うぞ」

実際あれは、過大評価だろう。メイさんやゼノ君は俺を妹にしたがってるって言うのもあるだろうし、先生は……まあ、紳士だからなあ。

「だから、ミルト君の力で出来る限り狼に出会わないようにしてくれると、俺としては非常に助かるんだ」

「う、うん。分かったよ」

自分の力が認められて嬉しいのか、初めてミルト君が自然な笑顔を見せる。不覚なことにその笑顔は、男の子であっても可愛いと思えてしまった。

「へえ……ミルト君って結構可愛いんだな。っと、すまん。男がそんなこと言われても、嬉しくないよな」

「え？う、ううん。べ、別に気にして無いから……」

そう言ってミルト君が顔をそらす。ひよっとしたら、少し怒らせてしまったか？失敗したかもしれんな。

「あゝ、次はミハルさ……君とミルト君だな。準備は出来てるか？」

「ああ、俺のほうは大丈夫だ」

「……う、うん。僕も大丈夫です」

「ん？何かミルト君の顔が赤い気がするが……ま、大丈夫か。よし、これが今日採取してくる物の内容だ。それじゃあ、気をつけていて来いよ」

そう言って採取内容の書かれたメモが渡され、先生が俺達を送り出す。こうして、俺の初めての採取実習が幕を開けた。

「集めてくるのは……クロガサタケ5つとワライゴロシ5つと……
げ、ガブリの実かよ」

歩きながら採取内容を確認する。というか、毒キノコ二種類とか、

だいぶ偏ってるなこれ。

「なあ、この二種類のキノコの生えてる場所って……ってあれ？」

てつきり隣を歩いているものと思っていたのだが、気がついたらミルト君がそばを離れていた。

後ろを振り向くと、少し遠くの位置で何やら立ち尽くしている。

……眼を閉じてるようだが、何をしているんだ？

「おーい、どうしたんだ？」

とりあえず駆け寄って声を掛けてみる。すると、俺に気づいたのか、その両目を開けてこっちへと向き直った。

「あ、うん。ごめん。今ちょっと狼の位置を確認してたから」

「ああ、そうだったのか。悪いな、置いていきそうになっちゃって」

「ううん、僕こそ急に立ち止まったりしちゃってごめん」

なぜかお互いに謝りあう。うん、先ほどから気になってたけど……こいつってひょっとして、俺の知り合いの中では数少ない常識人なのではないだろうか？

「次からは、ちゃんと声をかけてから確認するね」

「ああ、悪いけどそうしてくれ。気づかないうちに離れてしまったりすると、危ないしな」

うん、やっぱり常識人っぽい。まあ、今までが個性豊か過ぎたって言うのもあるかもしれないんだが。

「あ、あの……」

「ん？」

「どうかしたの？その、ミハルちゃん……何か嬉しそうだけど」
「ああ、ちょっとな。気にしないでくれ」

俺の返答に対して、不思議そうな表情を見せるミルト君。いかに
いかに、顔に出てたか。

「あ、ちょっと待ってて、もう一度確認するから」
「ああ、よろしくな」

しばらく進んだ後、ミルト君から制止の声が上がったので俺は足を止める。ミルト君が眼を閉じて、何かに集中し始める。

頻繁に、何かを探るような様子で頭を動かすミルト君。時折、ス
ンスンと何かを嗅ぐような音が聞こえてくるのだが、これは……？

「うん、近くに狼はいないみたい。……って、どうしたの？」
「ん？あ、いやその、どうしたのって……」

……言うべきか？でも、本人は隠してるつもりなのかも知れんし
なあ。

いや、本人はいつも狼を回避していたって言ってたし、それなら
その時のパートナーはこれを見てたって事になるし、絶対これって
パートナーの人にばれてるよな？

隠すつもりが無いのなら、確認するぐらいは良いよな？……一度、
どういうのを見てみたって言う気持ちもあるし。

「ミルト君、ちょっとかがんでくれるか？」
「？う、うん。良いけど……」

訝しげな表情を見せつつ、その場にかがむミルト君。頭の天辺周りをじっくりと観察するが、特に変わった様子は無い。

ためしに頭を撫で回してみる。すると、ビクツと肩を震わせてそのまま尻餅についてしまった。

「わわっ！？わわわわわわわ」

「わ、悪い、驚かせるつもりは無かったんだが……」

顔も真っ赤に染まっているし、今のはさすがに唐突過ぎたか？だが、目的を果たすのに十分な効果はあったようだ。

「い、いきなり何するの？びっくりしたよっ」

「本当に悪い。ちょっと確認をしたかったただけなんだけど、まさかそこまで驚くとはさ」

「確認って、何を……え？ま、まさかっ！？」

慌ててミルト君が自分の頭に手を乗せる。そこには、見事なふさふさの犬耳が姿を見せていた。

「何となくそうじゃないかって思ってたけど、やっぱり犬人種^{ワードッグ}だったんだな。初めて見たよ」

「う、うそっ……あ、ああっ」

ん？何かミルト君の様子がおかしいな。顔を青ざめて、何かを恐れるような……。

「お、おい、大丈夫か？ひょっとして、さっき尻餅をついたときにどこか強く打ったのか？」

「え？……だ、だいじょうぶ……ぶ」

「そっか、でも、顔色が真っ青だぞ？ちよつとここで休憩しておこ
う」

「え？え？ど、どうし……て……？」

青ざめた表情のまま、尋ねてくるミルト君。いやどうしてって、
そんな体調悪そうな表情見せられたら、休憩させたくもなるだろう
が。

「どうしても何も、そんな体調悪そうにしてる奴に、無理なんてさ
せられないだろうが」

「そ、そうじゃない、そうじゃないよ」

「……？じゃあ、何が分からないんだ？」

「だ、だって、僕、ワードッグなんだよ？」

……ああ、なるほどね。良く分かった。確かに本を読んで知
ったときも、そんな事が書いてあったな。

ふざけんな。

「だから何なんだ？俺がその程度で差別するような屑どもと同じよ
うに、お前に危害を加えるとも思ったのか？」

「ひっ！？ち、違うの……？」

む？いかん。思わず殺気を込めてしまった。別にミルト君は悪く
ないし、俺にはミルト君を怖がらせるつもりも無いのだから。

軽く深呼吸をする。……うん、大丈夫。まだ若干行き場の無い怒
りはあるけど、ミルトにぶつけてしまうようなことは無いはずだ。

「俺はそんなことはしない。そもそも、そんなことを言ったら、俺は使い魔なんだがな？」

「そつなの？……で、でもさっき凄く怖かったし」

「ああ、あれは……まあ、俺はそういう理由だけで、迫害する屑どもが本気で嫌いなんだな。すまん、つい殺気がもれたかもしれん」

呆然とした様子で、こちらを見るミルト。うゝむ……やはり簡単には信用されないか。

「ま、すぐには信用しなくて良いよ。これから先、ゆっくりと俺を見定めていけば良いさ」

「……君も、不思議な子だね」

「不思議……ねえ、そんな事滅多に言われたこと無かったが」

何故女の子じゃないのか、不思議だと言われたことは多々あったが……いや、よそう。正直思い出したくないし。

「それに、『も』って言うことは、俺以外にも同じようなことを言った奴が居るんだろ？」

「う、うん。君の前にパートナーだった人」

「だったら分かるだろ。前例があるんだから」

数の多い少ないは別として、亜人を迫害することに反対している人は居るはずだ。俺は、そのうちの一人でありたいと思っている。

「はは……そつか。うん、そうだよね」

「へ……やっぱお前は笑顔の方が良いな。かなり可愛いわ」

「え？え？ええ！？……あ、あう」

そうつって顔をツンツンと突付くと、顔を真っ赤にしてうつむい

てしまった。ちょっとからかいすぎたか？

「悪い悪い、可愛いからちょっとからかっちゃった。さて、ちょっと休憩してからまた探し始めるか？」

「え？あうう……もう。でも……うん、そうだね。ちょっと休憩したら、また頑張って探そう！」

どうやら少し元気が出てきたようだ。……先ほどのやり取りで分かったが、多分こいつは何か暗いものを抱えているんだと思う。

……俺にはそれを消すことも支えることも出来ない。それでも、こいつは笑うと可愛いんだから、少しは笑顔にしてやりたいと思う。

だから俺は、少しでも早くこいつと友達になっておきたいと思った。あの騒がしい輪の中に入れば、少しは笑顔も増やせるはずなのだから。

あいつらならきつと、亜人である事ぐらいで差別をしたりはしないはずなのだから。

第29話 最弱のパートナー（後書き）

新たな人物登場です。臆病な少年です。下手すると、ミハルより女の子っぱいかもしれません。

若干コメディ分が不足気味？

第30話 もう一つの記述法

「むう……」

手を差し伸べた先で、ガチガチとかみ合わせる木の実。

指定された品物の中で、俺たちはとりあえずガブリの実をとることにしていたのだが、中々その実を採取することが出来なかった。

「やっぱ、そう簡単には見つからんな」

「うん。でも、頑張つて探すしかないよ？ 僕の鼻でも、本物の実を探すことは出来ないし」

ガブリの実は、一つの木に数十個の実がなっている。そのほぼ全てが噛み付いてくるフェイクなのだが、一つだけ本物の実が混ざっているのだ。

ちなみに本物をもぎ取ると、偽物のうちの一つが徐々に本物へと変わっていくのだそうだ。本物のガブリの実は、栄養価の高い美味しい高級果物として需要がある。

「色とかが変わってるわけでも無いしなあ……」

「簡単に取れたら、きっと高級品じゃなくなつてと思うよ？」

本物が見分けづらく、見分ける作業も面倒。さらにもぎ取ったばかりの木の場合、本物が存在しないということすらありうる。

正直、自分で食べるために取りたいとは思わない。俺自身は果物は結構好きなんだけどな。

さっ……ガチガチ

さっ……ガチガチ
さっ……ガチガチ

……面倒くせえ。

「魔法とかで、ちゃっちゃと見つける方法とか無いんかねえ」

「【探知】の魔法なら分かるかもしれないけど、1個1個の実を調べていくのは結局同じだよ？」

「まあ、そうだろうな」

こういうのは、重複魔法やったところで一つの実を何度も調べまくるだけだしな。重複魔法の意味がまったく無い。

せめて、範囲を拡大とか出来れば良いんだけど……範囲を極限まで拡大して森中を探索……とか。それが魔法の制御がちゃんとできれば、1回で何個か調べられそうだけど。

まあ、無いものねだりをしていてもしょうがない。

さらに地道な探索を続ける。地道すぎていい加減、少しうんざりして来る。

「あっ」

「ん？どうした？」

ミルト君が急に声を上げたのでそちらを向く。……何か噛まれてた。

「おいおい」

「いたたた！っと……抜けた」

まあ、油断でもしてたんだろうけど。ちょっと怪我してるな。

「大丈夫か？」

「うん、これくらいなら大したこと無いよ」

そういつて魔法を使い始めるミルト君、まあ、【小治癒】ぐらいなら自分で出来るだろうし、俺は実を探しておくか。

そう思つて、再度実を探し始める。……やっぱり地道でつまらん。

「ね、ねえ」

「ん？まだ治療しないのか？軽い怪我つて言つても、そのままじゃ痛いだろ？」

「え、えと……ミハルちゃん、【小治癒】使える？」

少し情けない表情で、そう聞いてくるミルト君。……使えないのか、あるいは失敗したのか？

「使えるけど……ミルト君はまだ覚えてないのか？」

「え、えと。【小治癒】は初級魔法の中でも、だいぶ難しい方だと思つけど……」

いや、フォルやメイさんやゼノ君は、当たり前のように使つてたけどな……。

って、そうか。メイさんやゼノ君はクラスで1、2を争う成績だし、フォルは元々魔法をある程度使いこなしてて別格みたいところがあるから、それと比べるのは間違っているのか。

だからと言って、俺に頼るのもどうかと言う気はしないでもないが。

「あゝ……。まあしょうがないか」

そう言つて、俺は魔法ウィンドウを開いて【—minor healing《小治癒》】と記述し、発動させる。

ミルト君の体が軽く光に包まれ、怪我が治っていく。

「あ、ありがとう」

「良いよ別に。でも、それぐらいは直ぐに出来るようになった方が
良いぞ？」

そういつて俺は苦笑する。魔法使いになる以上、治癒魔法の成功率を上げておくのは重要だ。緊急で怪我を治療しなければいけない機会など、これからいくらでもあるかも知れないのだから。

「う、うん。そうだよね……。でも、ミハルちゃんは本当に凄いよね。
たった二日で、こんな魔法を一発で使えるなんて」

「そうか？まだメイさんやゼノ君には全然届かんだろうし、フォル
に至つては何かいろんな魔法を乱射してたぞ？」

あさつての方向に、いろんな色の光弾を打ち出していたからな……
……ただし重複魔法じゃなくて、連続して撃つていただけなんだけど。

「そ、それでも」

「持ち上げてくれるのは嬉しいんだが、多分俺自身の才能はそこま
で大したこと無いって」

何せ、半分ズルしてるようなもんだしなあ……。同じ条件なら、
多分俺はまだまともに魔法を使えて無いだろう。

何やら納得がいかない様子のミルト君だったが、これ以上言っても無駄だと思ったのか、軽くため息をついて再度本物の実を探し始めた。

俺もこれ以上言うことは無いので、ミルト君に続いて探し始める。本物の実が見つかったのは、それからしばらくたってのことだった。

「なあ、きのこはミルト君の鼻で分かるのか？」

「え？うん……実物が無いと、ちょっと難しいかも」

まあ、鼻が良いといっても、全ての匂いを覚えてる訳ではないか。

「じゃあ、一つ目は地道に探していくしかないか。周囲に狼は？」

「……………うん、いないよ」

「よし、じゃあ探し回ってみるか。」

直ぐに集まれる範囲で二手に分かれて、木の裏などを探し回る。

食用キノコなどは見つかったが、お目当てのクロガサタケやワライゴロシは見つからなかった。

まあ、クロガサタケもワライゴロシも生えてる数は少な目だからなあ…………と、思ったところでミルト君の方から歓声上がる。

「見つかったのか？」

「うん、二つとも。これで、匂いで探れるよ！」

嬉しそうにこちらを振り向くミルト君。そして直ぐにキノコの匂

いをかいで、ある方向へと振り返った。

「こっち、こっちの方から匂いがする！」

そう言つて、突然駆け出し始める。……ちょっと待て、いきなり単独行動に走るな。

「お、おい、ちょっと！……行つちまったか」

軽くため息をついて、ミルト君の後を追いかける。あの様子じゃあ多分、狼に対する警戒とかも忘れているだろう。

何もなければ良いんだが……と考えて思わず苦笑いした。何も無いわけが無い。何せアレだ、よくある言葉で言えば、これはフラグが立ったという奴なんだろうからな。

「う、うわああああっ！！」

奥のほうから、ミルト君の声が聞こえてきた。言わんこつちや無いと思いつつ、走るスピードを上げる。

ワードッグの特徴なのかは分からないが、ミルト君はやたらと足が速く、簡単に置いて行かれてしまったのだ。少しは、俺の走れる

速度というものも考えて欲しかったのだが。

森の先に、ミルト君らしき人の姿を見つける。せめて追いつくまで何とか逃げ回ってくれれば……と思いながら、その状況を確認する。そして、俺はその甘い考えを直ぐに後悔することになる。

俺の視界に映ったのは、ミルト君が既に何匹もの狼達に囲まれて、追い詰められている姿。

ぞくりと背筋に悪寒が走った。このまま走るだけでは、絶対に間に合わない。

狼が、彼の喉笛を噛み千切る姿を幻視する。先ほどまで一緒に歩き、話していた人物が、無残に食い殺される姿が目に見えぬ。

喉の奥から、吐き気がこみ上げた。そんな事は絶対に許容できないし、許容したくない。なら……どうする？

敵は狼が数体。驚かせれば逃げるかもしれないが、その手段は限られている。

あるとすれば魔法だ。この状況で、俺が使える魔法は【魔法の矢】のみ。でも、単発では絶対に足りないし、重複魔法でも数を作るには時間が掛かりすぎる。

いくら焦っても、答えは出ない。ついに、狼達が獲物を食い殺す為に飛び掛かる。

俺はまだ、誰かを守ったりすることは出来ないのだろうか……。これから目の前に起きるだろう惨劇から逃げるように、俺はギュッと目を閉じる。

『後押しをしてあげる』

その時、聞き覚えのある誰かの声が聞こえた気がした。そして、俺の頭の中に、ある文字列が閃光の様に走った。

【f o r 1 t o 2 0 m a g i c a r r o w n e x t】

閉じていた目を開ける。杖を握り締めてウィンドウを表示させ、即座に思いついた文字列を魔法のウィンドウに叩き込む。

『前と同じ、おまじない』

【a u t o t r a c e】

さらに思い浮かんだ単語を、迷わず属性を記述するウィンドウに叩き込む。そして、すぐさまそれを発動させた。

俺の周囲に浮かび上がる、いくつもの光る球体。俺は、即座にそ

れらを全ての狼へと撃ちだす。

ドドドドンッ

「ギヤアウー!!」

【魔法の矢】による衝撃を何度も受け、鈍い音を立てて吹き飛ばす狼達。俺はその狼達には目もくれず、ミルトのそばへと駆け寄った。ミルトは、木を背にするような形で倒れていた。ピクリとも動かないので一瞬慌てたが、目立つ怪我が無い事に気づいて落ち着きを取り戻す。

恐らく、襲われた恐怖で気絶してしまったのだろう。特に命に別状は無いと判断し、俺はほっと一息を付いた。

……いや、まだだ。

狼達にまだトドメを刺していないことを思い出し、直ぐに気を張りなおす。

恐らく狼達は手負いになっており、より凶暴化しているだろう。またすぐに襲ってくるかも分からない。

ウィンドウを開いて【魔法の矢】をいくつか発動し、襲撃に備える。だが、いくら待っても狼達が襲ってくる様子は無い。

逃げた……のか？

念のために、【魔法の矢】を2発ほど森の中に撃ち込んでみる。
木に命中して破裂音が響くが、それに対する反応は……無い。

とりあえずこれ以上狼による襲撃はなさそうなので、俺は再度張り詰めていた気を緩めた。全身から一気に力が抜け、その場に座り込んでしまう。

両手と両足の震えが止まらない。どうやら思っていた以上に、俺は緊張していたらしい。

初めて戦ったとはいえ……ミルト君が襲われていた状況だったとはいえ、狼数体でこれだ。俺には、戦闘などは向いていないのかもしれないな……。

ひとまず、怪我をしているミルト君を【小治癒】で癒す。そして、彼が目覚めますまでの間、俺は再度辺りを警戒することにした。

第30話 もう一つの記述法（後書き）

ミハルの初戦闘……でも微妙です。非常に微妙です。

あと、ミルト君がかませ犬に……可愛そうですが、これも展開のためと言うことで諦めてもらいました。まあ、ワライゴロシなんていう怪しい毒キノコの匂いを無防備に吸って、何も起きない訳が無いということ。

この魔法の記述方法に関しては、前々から考えていたものでした。と言うか、これを書きたいがために、この小説を作り始めたと言っても間違いではありません。

この記述方法にピンと来た方は、細かいところに突っ込んだりせずに生暖かい目で見守っていてください。ちなみに、言語等は固定されていません。

……既に同じような魔法の記述法で、小説を書いている人とか居ないと良いんですけど。い、居ない……ですよね？

第31話 プログラム式魔法（前書き）

微妙にR - 15表現有り？注意。
GLっぽいので注意。

第31話 プログラム式魔法

あの後しばらくの間、ミルト君が盛大に落ち込んでしまった。反省しているのを何とかなだめて、立ち直らせるのに結構苦労した。そしてミルト君の手伝いもあって、実習のノルマは何とかクリア。そんな感じで、初めての錬金術の採取実習は終わりを告げた。

ちなみに俺たちが戻ってきたのはだいぶ遅く、順位で言えば後ろから数えた方が早かった。まあ、初めてなんだし、しょうがないと思う。

そんなことよりも、俺は先ほどとっさに思いつきで使った魔法をずっと思い返し続けていた。

【a u t o t r a c e《自動追跡》】

あの時俺が放った【魔法の矢】は、全て狙っていた狼達に命中していた。

普通あれだけの数の魔法を撃てば、どれかは外れるはずなのだが……俺は、外れる軌道だった魔法が軌道を変えて命中したのも確認している。

恐らく、この属性はちゃんと発動している。【魔法の矢】に無い追尾能力を、属性で付与することができたと言うことだ。

そして、もう一つ。

【for 1 to 20 magic arrow next
20本の魔法の矢】

俺はこの記述に、見覚えがある。

俺が元の世界にいたときに、趣味でやっていたプログラム……その中でも比較的簡単な記述だ。

あの時、何故この記述を思いついたのか？何故これが発動したのか？それは俺にはわからない。

ただ一つ言えることは、この方法を使うことで、俺は魔法を非常に効率よく発動できるようになったということだ。

……恐らく引つかかっていたのは、プログラムで同じような経験をしてたからなんだろうな。何度も同じ記述をするのは、プログラムでも効率悪い事だしな。

「い、ごめんっ……！」

そんなことを考えていると、突然ミルト君が謝りだした。視線を移すと、そこには非常に申し訳なさそうに頭を下げるミル

ト君の姿。

「ぼ、僕のせいだよね……僕が勝手に走って行ったりしなければ、僕がきちんと狼を追いついていれば……」

「は？ いや、別にそのことはミルト君はちゃんと反省したし、もう気にするなつて言っただろう？ 誰だつてミスはある。次にそういうことをしなければ良いんだからさ」

「で、でも……ミハルちゃん、凄い怒ってるみたいだったから」

……俺が？ あ、考え事をしてるうちに、顔をしかめてしまったのか。

「怒ってないつて、単に考え事をしていただけだ」

「……考え事？」

「まあ、色々とな」

さすがに、考え事の内容はコイツにはいえない。というか、メイさんやセレスさんにも言うのはちよつとまずいだろう。

まあ、言っただころで、そもそもこんな記述できるのは俺だけなんだが……下手すると、上級魔法よりも難易度高くなりそうだし。

そんな俺の様子を見て、ミルト君が不思議そうに首を傾げる。……ミルト君つて、男だけど可愛いよな。

「まあ、どうしても気になるんだつたら、次はちゃんと俺を守ってくれれば良いだろ。今回は偶々狼を驚かせて何とかなったけど、次

も上手くいくとは限らんからな？」

「う、うん……僕、頑張るよっ！」

何やら背後に、炎のようなオーラを出して頷くミルト君。まあ男としては、女の子に守られるってのは嫌だろうしなあ……時々忘れるけど、俺って一応女の子だし。

もっとも、あまり気合を入れすぎて怪我とかされても困るんだが……。

「むう……ひよつとしたら、セレナさんに続く更なるライバルの出現かもしれないね」

「私も、負けてはいられませんわね。いち早くミハルさんの姉として認められるように頑張らなければ」

「わ、私も……ま、負けませんっ」

……とりあえず、近くで様子を見ながらぼそぼそつぶやいてるお三方の言葉は、無視することにする。

セレナさんとか、いちいち休憩時間毎に良く来るよな……と本気で思う。まあ、彼女に抱きつかれてるフォルは嬉しそうだから良いけど。

その日の夜。

俺は、夕食を食べた後、一人で外に出て魔法の研究をすることにした。

昼間に確認した、プログラムを使った魔法の記述。ひよっとしたら、繰り返し以外も何か使えるかもしれないと思ったからだ。

属性に関しても同じ事が言える。昼間は瞬間的に【自動追跡】が閃いたが、他にも使える属性があれば知っておきたい。

杖を握り締め、魔法のウィンドウを開く。……そういえば、俺はいまだに力を込めずに意識するということが出来ていないんだな。

さて、それではまずは先ほどのおさらいから。

【for 1 to 3
light ball
next 》3つ

の光の球』

ふわり、と俺の周囲に3つの光る球が出現し、あたりを照らす。

【光の球】は、見た目こそ【魔法の矢】に似ているが、大きめで何かに当てて衝撃を加えたりすることは出来ない。

要は単に明かりを作るだけの魔法である。この手の魔法の問題としては、作っても魔法のウィンドウを閉じてしまうと消えてしまうことだ。

……つまり、この光る球を作ってる間は他の魔法が使えない。ダンジョンの中とか闇夜を照らしたい時は、普通はこれを使わずにたいまつやランプを使う事になる。……正直使い勝手が悪い。

とりあえず、繰り返しは昼間使った通りに使えることは確認したので、次。

【wait 20 light ball ≪20秒遅延発動光の球 ≫】

プログラムが出来ると知って、やってみたかったことはこれである。

遅延魔法。魔法は基本的に、使った後は大きな隙が出来る。遅延魔法が使えるれば、その隙を狙ってきた相手に奇襲を加えることが可能なのだ。

とりあえず発動させてみる。すると、発動して20秒ほど経過し

た後に光る球が出現した。

どうやら、数値はそのまま秒数を表しているらしい。その後もいくつか試して、小数点以下の調整まで出来ることを確認した。

そこでふと気づく、この数値が無かった場合はどうなるのだろうか？

【wait light ball《遅延発動光の球》】

しばらく待ってみたが、発動する様子は無い。ひよっとして何らかの発動する条件があるのかと思い、色々と試してみる。

すると、もう一度杖を握り締めてみたところで、光の球が浮かび上がった。つまり、数値を記述しない場合は、任意の時点で発動体を意識すれば発動させることが出来る訳だ。

なら、これはどうなるのだろうか？

【wait light ball《遅延する光の球》】【wait light ball《遅延する光の球》】【wait light ball《遅延する光の球》】

同じ記述を三つ、並べてみる。記述をしてから、先ほどの繰り返しを使えばよかったなと思いつつ、発動させる。

一回目は何も起きない。二回目は光の球が一つ。三回目以降はさ

らに一つずつ光の球が増えていった。

これはつまり、任意での遅延をうまく使えば連続して何度も魔法を撃ち込むことが出来ると言うこと。まだ魔法を全て発動した後に隙が出来るが、そこはそこで別途考えれば良いだろう。

「……とりあえずはこんなところか」

プログラムに関してはもう少し色々と覚えているのだが、魔法に使えそうなのはあまり思いつかなかった。……変数とか関数なんて使えそうに無いしなあ。

次は属性。これに関しては……正直、どこまで出来るのかがさっぱりわからない。

とりあえず、範囲を広くしたり出来るのだろうか？でも、範囲をどこまで広くするとかそういった記述とかが出来るのか……。まあいいや。考えてたつてしょうがないのでとりあえず使ってみる。

使うのは【探知】の魔法。とりあえず属性にrangeと記述してみる。

……普通の探知の魔法になった。

使い方が悪いのか、あるいは何かが足りないのか……数値でも入れてみるか？

そう思つて再度【探知】の魔法に属性【range 10《範囲10m》】を記述してみる。

突然、自分の周りの風景とその詳細が頭の中に浮かび上がった。

どこに何が居るのか、何があるのかが詳細に描かれる。さすがにその姿をリアルタイムで表示までは出来なかったが、それでもこれはかなり有用である。

範囲は半径10mほどか……？恐らく、数値がそのまま半径になるのだろう。

この属性付与による魔力消費は気になったが、先ほどから全然減っている気がしない。……ひょっとして、俺は減っている感覚が無いただけなのでは？とすら一瞬思つてしまふが、まあそれは良いだろう。

そして恐らく、この属性を【光の球】につけると半径10mの巨大な光の球が出来上がるはずだ。……さすがに近所迷惑なので、今はやらないが。

他にもいくつか試しては見たが、明確に効果を発揮していたのは【範囲】のみだった。

あまり長く外に出ていると心配されるので、とりあえず家の中に戻る。今分かったことだけでも、十分すぎる収穫だろう。

「ただいま」

「あ、お帰りなさい、ハルちゃん」

戻ってきた俺を見て、即座に抱きついてくるフォル。最近、フォルのスキンシップが、より大胆になってきている気がする。

「あらあら、ハルちゃんおかえりなさい」

「ただいま……って、イセリナまでくっついて来るなよ」

「あらあら、良いじゃないの。おねーさんもたまにはハルちゃんのぬくもりを感じたいのよ」

「はあ……しょうがないなあ」

暴れるとフォルが怪我をするかもしれないし、本当に仕方なく我慢する。

「あらあら？ハルちゃん、おねーさんが抱きついてても嫌がらなくなっただのね？」

「嫌がった方が良いのか？……まあ、襲ってこなければ別に良いよ」

イセリナは実際美人のお姉さんだし、フォルもとても可愛い女の子である。他意が無ければ、多少抱き付かれるくらいは構わない。

……まあ、あんまりくっつかれると暑苦しいので、程ほどにはし

て欲しいのだが。

「あらあら〜？と言うことは、ハルちゃんは優しくされる方が良いのね〜」

「は？何を言ってるって、ちょっと待て、どこに手をつ！ひうつ！？」

急に胸をまさぐられて走った電流に、思わず声を上げてしまっしまった、最近そういうことが無かったから油断した！？

「お師匠様〜？そういうことは……」

「ふふ、大丈夫。この前はおね〜さん、強引にしすぎちゃったのよ。ハルちゃんは、ゆっくり優しくされ方がいいのよね〜？」

「ち、ちがつあうつ！？」

抵抗したいのに、体が勝手に反応してしまっと思って思うように抵抗できない。

「ほら、力を抜いて～？おね～さんに身を任せれば、ちゃんと気持ちよくしてあげるわ～」

「そ、そんなことっ……できるわけがっ……はあうっ！」

「どうして～？ハルちゃんは、おね～さんの事が嫌いなのかしら～？」

「そういうことを言ってるんじゃないっ……はっああっ！！！」

イセリナの言葉通り、確かにイセリナの手つきは優しい。本気で暴れれば、簡単に抜け出すことは出来るだろう。

だが……。

「ハルちゃん、本当に大丈夫？苦しかったり、痛かったりしない？お師匠様ダメだよ、ハルちゃん嫌がってるよっ！」

そうすると、自分にしがみついたまま、心配そうな目で見てくるフォルを巻き込んでしまうはずだ。とてもそんなことは出来ない。

「ひうつこのっ卑怯……ものおっ！」

「あらあら～？おね～さんにはその言葉の意味は良く分からないけど、本当に嫌だったら暴れてもいいのよ～？」

くっコイツ絶対気付いてっ……ってそこはっ!?

「だっダメッ!?!そこはっ!!!」

「あらあら、ここはまだちょっと早かったかしら?」

なぞるように下ろされていく手を感じて、反射的に俺はそこを守る。そこだけは……絶対に守っておかないといけないっ!

「お師匠様っ聞いているの?お師匠様!」

「ふふふっハルちゃん、前の時はここが物凄い敏感だったものね」

「だっダメ……そっちは絶対にダメっ!!!」

「あらあら、じゃあこっちはいいのね?」

「ひゃんっ!?!」

フツと耳に息を吹きかけられ、同時に胸の先を摘まれる。体中に走った電撃のようなショックに、体がビクッと跳ねる。

顔が、体が、どんどん熱くなっていく。このまま流されてしまうのではないか?そんな恐怖が、私の心を覆っていく。

「お師匠さまっ!!!」

「ふふふっかわおぐっ!?!」

何とか耐えようと眼を閉じて体を縮こませていたら、突如体が後ろに引っ張られた。何とかこらえつつ、何事かと眼を開けると、そ

ここにはイセリナの顎を打ち抜くフォルの姿があった。

「ダメだって言ってるでしょ！もう！！」

「はれはれ」

脳震盪を起こしたのか、眼を回した様子でその場に倒れこむイセリナ。……何とか助かった、のか？

「あ、ありがとうフォル」

「私だって、私だって我慢してるのにつ……ハルちゃんが嫌がってるから、我慢してるのに、お師匠様ずるいっ！！」

……は？

「ふお、フォル……？」

「私だって、ハルちゃんのこと好きだもん！ハルちゃんをいっぱい撫でたりして、可愛い姿見たいもんっ！！」

「わっ！ちよつとフォルツ！？」

今度は突然フォルに押し倒される。え？いや、本当にどうしたのフォル！？

「あの時のハルちゃん、とっても可愛かったもん！私の手で、もつともつと可愛くなって欲しいもん！！」

「フォ、フォル！？ひゃっ……！ちよつ……つと、何するのっ！？」

そのままフォルが私の胸をもみ始める。突然のことに動揺し、抵抗することを忘れてしまう。

「やっだめっ！フォル、やめてっ！！」

思わず上げる叫び声。……その叫び声を聞いたからか、フォルの手の動きが凍りつくように止まった。

「やだ……嫌だよ。ハルちゃんに嫌われたくない。でも、ハルちゃんの可愛い姿見れないのもやだ。嫌だよ……」

そういつてフォルが私の胸に飛び込んでくる。……いや、泣きたいののはこっちの方だよ。

それからしばらく、フォルは俺の胸で泣き続けた。……いつも元氣に見えてたけど、本当は色々と思うところとかあったのかもしれない。

まあ、一番の原因はイセリナだと思うけど。まったく……本当に何でこんな人が俺の主になったのやら。

しばらくしてようやく泣き止んだフォルは、俺に頭を下げて謝りだした。俺は謝るフォルを笑って許し、その頃には夜も遅かったので一緒にベッドの中で眠ることにした。

イセリナ？……一応、風邪は引かないように毛布はかけておいたけど？

「うっ、ハルちゃん……一緒にベッドに」

「やかましいっ！とっとと寝ろっ！ー！」

第31話 プログラム式魔法（後書き）

徐々にミハルが強化されてきました。果たして魔法についてこういった理屈はどれだけ通用するのか、不安でしょうがなかったりします。

後ついでにR - 15つばい表現と、明らかなGL的表現が出てきました。でも、ミハルは心は男の子ですけどね！別にGLでも無いんじゃないかな！？

……はい、すみません。見た人の気分を害さないためにも、GL表現有りと追加しておきます。逆にガチGLを期待する人には期待はずれになりそうですが。

さて、ここからが本題です。

しばらくの更新停止、済みませんでした。というか、これからも恐らく更新はそこそこ遅れます。

理由はまあ、色々とあるのですが……リアルと書いて現実とか、色々と面白いな小説に手を出し始めたこととか、新しい小説のネタを思いついてしまったこととか……あ、過去書いたアレはスルーで1日1話が出来れば理想なのですが、恐らく今後は作者のレベルでは難しいと思われます。具体的には作者の忍耐レベルが低いんです。ああ、ファンフィクションとか作ってみたいなあ……とか。

とりあえず、当面はこの小説がメインです。何日か後に唐突に変な小説を上げたりするかもしれませんが、そちらが主軸になったりすることはあまり無いものと考えてください。

万に一つ方針が変わった場合は、こことか活動報告辺りに記述します。その時は……ついにネタが切れたのだと、生暖かい目で見守っててください。

第32話 街中での一幕

「ん……そういえば、目的のある買い物でもないのに街を一人で見て回るのって、初めてになるのか」

一人で街の様子を眺めながら、ポツリとそうつぶやく。

今日は学園は休校日。いつもはイセリナの手伝いや、家に籠って魔法の勉強をしていたのだが、今日はそんな気になれなかったので、久しぶりに街に出ることにした。

とは言っても買い物を頼まれたわけでもなく、欲しいものがあるわけでもない。小遣いはイセリナにもらっているが、今のところ必要なものは十分そろってるし。

と、そんな訳で、俺は店に入ることも無く街をプラプラと歩き回っていた。こうして見ると、小都市と呼ばれる割には活気が良いと思う。

領主か国王辺りが善政を敷いているのか、あるいは……まあ、俺が住んでいる街が平和なのは良いことだと思う。

暫く歩いていると、視界の端に冒険者ギルドが見えてきた。そういえばギルドってあまり見てないな……と思い、外から軽く観察してみる。

恐らく冒険者なのか、武装した人たちがまばらに居る。仲間との待ち合わせなのか、あるいは暇つぶしか……？

暫く観察していると俺の視線に気づいたのか、そのうちの一人が

俺に近づいてきた。……さすがにちょっと不躰だったか？

「何だい？お嬢ちゃん、俺達に何か用事か？」

「いや、別に。冒険者ギルドって見たこと無かったから、どんなの
かなって見てただけ」

若干失礼だったかとも思ったが、隠すことではないので正直に答える。

「ああ、そうかい。だが、あまり関心はしねえぞ？この街じゃあ、
この辺りは酒場に並んで、一番治安が悪いからな」

「ふうん？そういうものなのか？」

「どこの街だっけそうだが、冒険者つてのは職業柄、荒っぽい奴が
多いのさ。お嬢ちゃんみたいな可愛い子が一人で居ると、下手をす
ればさらわれちゃうぞ」

……人攫い、ねえ？

「こんな街中で、人通りの多いところで人攫い？自警団に捕まりた
ければどうぞって感じだけどな」

「お嬢ちゃんは、まだまだ人生経験が甘いな？こういう所で目を付
けられて、後で人気の無いところに来たところで……って言う事だ
よ」

なるほど、確かにそれは警戒しておいた方が良いか。

「……俺の人生経験が甘いのは、元から承知の上だ。何せ『お嬢ち
ゃん』だからな」

「はっ。確かに違いない」

一本取られた、と言う感じで肩を竦める冒険者。

「まあ、特に依頼や用事があるわけでもなし。おっちゃんの忠告に従って、この場は離れる事にするさ。ありがとな、おっちゃん」

「おっちゃん……………あ、ああ。お嬢ちゃんも気をつけてな」

肩を落とすおっちゃんに手を振り、ギルド前を後にする。その途中で、絡みつくような視線をいくつか確認した。

念のために持って来ていた杖を確認する。街中ではあまり使いたくないのだが、ひよっとすると使わざるをえない事態になるかもしれない。

「へっへっへ、その可愛いお嬢ちゃん。ちょっと俺達に付き合わないかい？」

俺が路地裏に入ったところで、そうやって俺の周囲を囲む三人組。予想はしてたけど、マジで来るとは…………。

「…………冒険者と言うのは、人攫いの仕事も請け負うものなのか？」

もしそうなら、俺は冒険者という職業に対しての認識を、少し改

める必要があるのだが。

「はっ！お嬢ちゃんは、状況が解ってる割には随分と世間知らずなんだな？」

そう言つて、三人が嘲るように笑い出す。……なるほど、つまりは別口か。

まあ、あのセルニアが職業にしてるぐらいだしなあ……あいつがそんな、非人道的な仕事を請けられるとは思えないし。

「へへへ、そんなお嬢ちゃんには俺たちが教育してやらねえとなあ……安心しな、お嬢ちゃん程にもなれば、きっと高く買ってもらえるぜ？」

「ああ、社会勉強つて奴ね……なるほど。確かにそれは、俺にはまだ足りないものだな」

「だが、断る」

懷に隠し持っていた杖に集中して、魔法のウィンドウを出す。それを見て三人組の冒険者達が顔色を変え、俺を止めるために駆け出してくる。

俺は非力だし、格闘の技術も無い。たとえ1対1でも、接近戦ではこいつらに間違いなく負けるだろう。

だが、それを補うだけの魔法と言う力を、俺は持っている。もつとも、3対1の現状では、普通に魔法を使っていたのでは間に合わないが。

魔法は遠距離から撃つものであり、接近されてしまった時点で魔法使いに勝ち目は無い。

では、こういう状況の場合はどうするべきなのか？これは、その一つの答え。

「お前らなんぞから受けるような社会勉強なんて、ありやしねえつてのっ！」

【light ball《光の球》】【range 10《範囲10m》】

俺は二つのウィンドウにそう記述し、眼を閉じて発動する。そして即座に、冒険者達をすり抜けるように一歩ずれる。

「なっ!？」

「があっ!？め、目があっ!！」

叫び声と同時に人同士がぶつかる音と、複数の人が倒れる音が聞こえてくる。それを確認次第、俺は魔法を解除する。

閉じていた眼を開けると、目の前には倒れこんだまま混乱しててもかく三人組の姿があった。どうやら、目くらましは上手く行っただしい。

一瞬トドメを刺すか……とも考えたが、まだ確実に気絶させるような魔法など覚えて居ない。下手を打つと、復活した三人組にこっちが捕まってしまう可能性すらある。

これ以上相手をする理由は無いと判断し、とりあえず俺はその場から走って離れることにした。今の状態なら、逃げるだけなら簡単

だ。

「おんどりやあつ！三流冒険者の分際で、何ハルちゃんをさらおうとしてやがねん！！」

「「ひつひいいいいいいっ！？」」

……何やら後ろから聞こえてきた、聞き覚えのある声は無視。
というか、ランクだけならあんたも三流だろうに。実力はどうかは知らんけどさ。

「ん？」

男達から離れて路地裏を歩いていると、ふと一つの建物が気になったので足を止める。視線をめぐらすと、近くには古ぼけた教会が建っていた。

見たところ、あまり参拝客が来ているようには見えない。というか、教会自体は他にもこの街にあるのだが、こんな路地裏にまであるとは今まで知らなかったのだ。

気になったので、外からのぞいてみる。荒らされている様な形跡は無いが、やはり古ぼけて見える。手入れ自体はそこそこされてい

るようだが……。

「ふむ……」

何となく、好奇心が沸いてきたので、教会の中に入ってみる。中央に台座と銅像が立てられていて、椅子がいくつかある以外はがらんとしている。そんな光景に、俺はどこか物寂しい気分が駆られてしまった。

そういえば、ここに限らず、実際に教会に入っただのは始めてのことである。中央の銅像が気になったので近づいてみると見ると、それはどうやら女神像のようなものらしい。

「その像は、神の奇跡をもたらしたとされる、聖女様の像なのです」
「よ」

突然横合いから声をかけられ、思わず肩を震わせる。慌てて声の方を見ると、そこには年老いた修道女シスターが立っていた。

「ようこそいらつしました。長らく誰も訪れなかったこの教会に、まさかこんな可愛いお嬢さんがいらつしゃるなんて」

「勝手に入ったりして、すまなかつたな。ここはおばあさんが管理している教会なのか？」

「あらあら。気にしなくても、教会に入ることに許可は要りませんよ？それに、この教会を管理しているのはこの街そのものの。私は、時々この教会を手入れしているだけですわ」

どこかさびしそうに、そう語る修道女。昔は……もっと人が来ていたのだろうか？

「せっかく来ていただいたんですけど、大したおもてなしなどは出

来ません。もし私でよければ、話し相手にはなりますけど」

「ん。さつき聖女って言ってたけど、ここの教会では聖女を崇めているのか？」

この世界の宗教は、大きく3つに分かれている。一つは至高神を崇める『正統神聖教』、もう一つは精霊神を称える『御霊神教』、最後に神の奇跡をもたらしたとされる実在の聖女を祭る『神聖聖女教』。

この国は国教として、『神聖聖女教』を信仰している。正直それを考えると、王族関係者のセレスが俺に対して聖女とか言うのは、非常にまずいんじゃないかと思うんだが……まあ、学園内だけの事だと思っし、今のところは問題が起きる様子が無いから良いけど。

それはともかく、三つに分かれているこの世界の宗教なんだが、本で読んだ限りでは、俺の元居た世界の宗教のような対立は起きては居ないようだ。

現場ではどうかは知らないが、基本的に宗教による戦争はほぼ起きたことが無いらしい。そして、これには二つの理由がある。

まずは、三つの宗教はどれも、『魔法を神聖視する傾向にあるらしい』ということ。まあ、実際『神聖魔法』なんて呼ばれる特殊な魔法があり、それを使える人物が司祭や司教として取り立てられる辺り、間違いは無さそうだ。

そしてもう一つ。三つの宗教はどれも、『魔法を人助けに使うこと』を信念としているらしいということ。こっちも、教会に行けば多少の傷はほぼ無償で癒してもらえることから、ほぼ間違いはないだろう。

つまり、三つの宗教で違うものは祭っている対象のみで、実際の教えとかはほぼ類似しているということ。

ついでに言えば、三つの宗教共々、互いの神様を兄弟姉妹のようなものだと思ってるみたいだし……ひよっとしたら、実は信仰する対象すら同じ物なんじゃないか？とも思えてくる。……まあ、さすがにんなこと神官の目の前で言ったら、確実にボコられるんだろうけど。

「ええ、ここは街の大通りにある教会と同じ、聖女様を崇めている教会ですよ。それでも昔は、大勢の方がここで聖女様に祈りを捧げにいらっしやったのですよ？」

修道女シスターの言葉に、俺はその光景を幻視する。恐らくは、街の発展に伴って主要の教会が大通りへと移されていったのだろう。

不思議と頭の中で広がっていく光景に、俺はどこか落ち着いた様な気分になった。別に俺は神など信じては居ないが、こういう誰かが何かを信じるための場所というのは、あっても良いかもしれない。

「そうか、おばあさんは……さびしくないのか？」

「ふふ、さびしくないといえは嘘になりますね。でも、時々お嬢さんみたいに尋ねてくる人だって居るんです。そんな人が手入れをされていない教会の姿を見てしまうのは、きつともっと寂しい事だと思いますから」

ふうん……と、俺は銅像へと視線を移す。確かに目立った汚れなども無く、銅像なものにも関わらず、僅かに輝いている様子すら見える。

ふと、銅像を見てみると、何かが書いてあるのが眼に映った。試しに近づいて読んでみる。

「……………これは？」

「それは、聖女様がこの世界に残したとされる文字の一部なのだそうです。この文を直接読むことが出来るのは、聖女様に文字を直接教わった、極一部の人のみと言われていますわ」

……………。

「おばあさんは、なんて書かれてあるのかは知ってるのか？」

「ええとですね、たしか『王国暦556年、ここに聖女の像を残すことを許可する』でしたか」

……………間違いない。これは俺が読める文字で、読み方も正しく伝わってる『元の世界の言葉』だ。

というか、何で日本語？あれか、ひょっとしてコレが読める俺って王族の末裔とか？んなわけねえだろ、ふざけんな。

突然のことに若干混乱する。というか、何で日本語？それも漢字かな付きで左から読む横書きという、現代式の日本語だし。王国暦556年ってアレだよね、今が王国暦2743年だから二千年以上前の話だよね？

どう考えても、これじゃあ辻褄が合わない。

「お嬢さん？あの、お嬢さん？どうしました？」

「あ、いや、何でもないんだ」

シスター
修道女の呼びかけで辛うじて我に返る。そんな俺を修道女は若干訝しげに見ていたが、はたと何かを思いついたのか別室へと歩いていった。

暫くすると、トレイに紅茶を乗せて戻ってくる。……どうやら気を使わせてしまったようだ。

「お嬢さんはまだ幼いですから、きつとここに来るまでに疲れてしまっていたんですね。どうぞ、座ってお茶でもお飲みください」

そういつて、持ってきた紅茶を渡される。断る理由も無いので、椅子に座って紅茶を一口飲んでみた。

「……あ、美味しい」

「ふふ、そういつていただけるとありがたいわ」

そういつて笑顔で紅茶を飲むシスター
修道女。暫くの間、俺と彼女の間にのんびりとした雰囲気の流れていった。

「ご馳走様。お茶、美味しかったよ」

「いえいえ。よろしければ、またこちらに来てくださいね？お嬢さんのような子なら、歓迎しますから」

といつても、俺は特に祈りを捧げているわけでもないし、『聖女様』とやらに信仰心があるわけでもない。……まあ、この修道女から見れば話し相手として歓迎しているのかもしれないけど。

「ん、じゃあ気が向いたらまた来るよ」

「ふふ、それで構いません。ではまた」

「ああ、じゃあまた」

そういつて手を振り、俺は教会の外へと出て行く。教会から出る直前に、修道女シスターが何かをつぶやいたようだったが、今はそれ以上に気になる事が出来たので、そのまま外に出ることにした。

時刻は昼過ぎ。まだ、街の中を歩き回る時間は残っている。

……なら、今は先ほど出てきた疑問を少しでも解消するべきだ。

そう思い、俺は街の図書館へと足を進めることにした。図書館にある本が、少しでも俺の疑問に答えてくれることを期待して。

第32話 街中での一幕（後書き）

お久しぶりと言うべきなのでしょう。長らく停滞していて申し訳ありませんでした。

こちら側はこちら側で、これから少しずつ更新していく予定です。……予定は未定だと言われると返す言葉はありませんが。

更新は不定期ですが、もしそれでもよろしければ、時折ちらりと見て行っていたけると幸いです。

ちなみに、ただいま設定の見直し中です。ひよっとすると、過去のいくつかの話を修正したりするかもしれません。

第33話 知識を求める者

聖女

トウルナー大陸を三分する宗教の一つ『神聖聖女教』にて、神の奇跡をもたらしたと伝えられる女性。

その美しい容貌と博愛の心は見るものの心を掴み、瞬く間に信仰を広げていったと言う。

また、彼女は最初の神聖魔法の使い手でもある。当時、対抗手段が少なく、驚異的であった悪魔の対抗手段を人々に伝え、その存在を弱体化させた彼女の功績は非常に大きい。

彼女が残っていた偉業は、あまりにも多い。ここにその一部を記す。

- ・彼女にとっての壊滅は、殲滅のしそこない
- ・悪魔千対人間十、しかも人間側は彼女以外全員子供と言う状況から、全員無傷で生還させる
- ・一息で魔法を十発以上撃ち放つ
- ・眼前に立つだけで中級悪魔が全力逃走した。爆散する下級悪魔も
- ・悪魔を一睨みしただけで炎上させた
- ・彼女が病気で休んでいた時、各地で誰が殺したのかわからない悪魔が量産された
- ・散歩ついでに大悪魔を殲滅
- ・軽く大声を出ただけで、5体ぐらいの悪魔が吹っ飛んだ
- ・人間の敵対組織が暴走した時、彼女が目の前に立つただけでひれ伏した

「……何だこれ」

タイトルに全盛期の聖女伝説とでも付きそうな内容に、思わず力が抜ける。

珍しく日本語で書かれている本を見つけたと思ったのに、この内容は……しかも、他の本と書いてある内容に大差が無いし。

まあ、いろんな言語で同じ事が書かれてるってことは、それだけ信憑性のあることなんだろうけど。

それにしたって……と、まるでギャグのような偉業を眺め、ため息をつく。こんなと同格扱いされるとか、セレスは多分俺の事を人間だと思って無いだろ。

それに、この聖女とやらが主に相手取っている、悪魔と言うのも問題だ。

人の悪意や害意を糧とし、人を食い殺す事によって力を増していく種族。

通常の武器は全て素通り。銀製の武器が聖水を振り掛けた武器で、ようやく傷が付く程度。

そんな相手を、まるで紙くずのように吹き散らすとか……対悪魔用の神聖魔法を使えるにしたって、異常だろ。

幸い今はほとんど姿を見せないらしいから、間違っても相手をさせられる事は無いと思うけど。と言うか、絶対に相手したくないし。

読んでいた本をパタンと閉じ、軽くため息をつく。聖女の像に刻まれていた日本語に関して、何かが分かるかと思ったのだが、そっちはなんら手がかりも見つからなかった。

ひよっとしたら……いや、ひよっとしなくても、聖女は日本から来たのではないか？と思ったのだが。まあ、千年単位の過去の話し

だし、正確な記録はさすがに残って無いか。この本も、本人が書いた本っていうわけじゃなさそうだしなあ。

「ねえ」

「ひゃい!？」

そんな考えに没頭していた俺に、後ろから声が掛かる。誰かと思って振り返ると、そこにはモノクルを掛けた、目つきの悪い女の子が立っていた。

「それ、全部読んでるのかしら？」

「え？あ、悪い。読みたかったものとかあったのか？」

他にも何冊か机に持ってきて、一気に読むという人が多かったから、問題ないと思ってたのだが。

「そういうわけじゃないけど。……ふうん？」

「？」

何やら、こっちをじろじろと見てくる女の子。目つきの悪さもあって、こっちからは睨んでいるように見えるので居心地が悪い。

「俺がどうかしたのか？」

「まあ、気づいて無いだろうとは思ってたけど。迂闊よ?。」

そう言って指差す先は、俺が先ほどまで読んでいた本。

「迂闊?。」

日本語で書かれていた本だが、そんな特別な事は書いてなかった

はずだ。まあ、ネタじみた事は書いてあったから、不敬と言えば不敬な本なのだが。

「……まだ、気づかないの？」

「まだって……あ」

……しまった。

そういえば、この世界では日本語は、王族しか読み書きできない特別な言語なんだった。

と言うか、そうなるとこの本って王族が書いたのか？……随分とお茶目な王族もいたもんだ。

そろりと先ほどの女の子の様子を見ると、呆れたような視線でこちらを見てきている。ごまかすのは、無理っぽい。

「え、え」と

「周りに警備が居る様子は見えないし、お忍びかしらね？」

そうともそうじゃないとも、言う和不味い気がする。さすがに、王族を騙るのは大問題だろうし。

「でも、それ以上に気になるのは……ねえ、貴方、本当にその本全て読んでいたの？」

「あ、ああ。そうだけど……」

「ふうん？」

何か、女の子の目がきらりと光った気がする。ええと、何か俺、この子の琴線に触れるような事言ったのか？

「ちょっと、付いてきて」

「え？でも」

「ばらされたくなければ、付いてきなさい」

有無を言わさぬ女の子の口調に、俺は思わず口を閉ざしてしまう。そんな俺を気にも留めず、歩き出す女の子。まあ、さすがにいきなり命をとられることも無いだろうし、とりあえず女の子の後ろについていく事にした。

しばらくして、女の子が一つの部屋にたどり着いた。

「……館長室？」

「あら？そういえば、自己紹介をしてなかったかしら」

そう言って振り返る女の子。暗い青色の長い髪が軽く宙を舞い、鮮やかな赤い瞳が俺を覗き込む。

「私はこの図書館の館長のアルマ。覚えたら覚えておいて」

「あ、ああ。俺はミハル・トウマだ。よろしく」

ほぼ表情を変えることなく、挨拶をするアルマ。なんていうか、無愛想だと思わなくも無いが、俺もあまり大差は無いか。

「さて、それで、貴方は何者なのかしら？」

……何と言う単刀直入。部屋に入って椅子に座るなり、これとか。

「あゝ、ええと、一応使い魔なんだけど」

俺の返答に顔色一つ変えず、再度口を開くアルマ。

「ここには目も耳も無いわ。その上でもう一度聞くけど、貴方は何者？」

「いやだから、使い魔だつてば」

再度の俺の答えに、顔を僅かにしかめるアルマ。いや、事実なんだからしょうがない。

「笑えない冗談ね。人型とはいえ、一介の使い魔が、王族秘伝の文字を読めるはずが無いわ」

「それを言われると困るんだがなあ……」

すっかり忘れていたとはいえ、人目も気にせずあの本を読んだのはさすがに不味かったか。と言うか、何で王族しか読めない本があんなところにあつたのだから。

「……そう、じゃあ質問を変えるわ。貴方は何処であの文字を教えてもらったの？」

「う、それは……」

異世界です。とか言うのは、さすがに不味いよな。

アルマの射すくめるような視線に、思わず顔をそらす。何と言うか、疑われるような事しかして無い気がする。

「そう、答えられないのね」

「ノーコメントで」

「ふうん、そう。……貴方、凄く興味深いわね」

いや、いきなり興味深いとか言われても。

「そんな言うほど興味深いか？」

「まず王家秘伝の言語を含めて、6種類以上の言語を翻訳できる人間なんて、大陸を探しても数える程しか居ないわ」

……うげ、あの本、全部違う言語で書かれていたのか。

俺の読み書きが、一体どういう理屈で出来るようになったのかは知らないが、今のところ全ての文字は読めている。

ただ、その文字が何と言う名前の言語なのか、分からないというところがある。あの夢以降読めるようになった訳なんだし、それを知る機会も無かったわけだけど……これっていわゆる、チートの弊害なんだろうな。

「しかも、その中に今は使われていない言語が2種類もあったわね。正直、貴方の知識は私にとっては喉から手が出るほど欲しいものなのよ」

いや、そんな事言われても……誰かに教わって読めるようになってたわけじゃないし、教える事も無理だろ。

「出来れば、その知識を教えて欲しいところだけど……」

「あゝ、悪いけど、俺はまだ学生だからな。教える側はまだちょっと」

「貴方が学生？何かの冗談……いえ、魔法学園ね」

察しが良いのは良いけど、何でそこまで断定できるのやら……。

「確かに魔法は、文字を読める事で優位に立てることはあまり無いわね。でも、貴方なら独自で魔法の使い方に気づいていそうだけども？」

さすがにアルマも、魔法が絵じゃなくて文字である事は気づいていないのか。

……しかし、本当に察しと言うか、勘が良いなこの子。

「独自の魔法の使い方って？」

「何となく、そう思っただけよ」

そう言っ て何かに気づいたかのように目を見開き、頭を振るアルマ。

「……理屈や理論に拠らない疑問なんて、私らしくも無いわね。さっきの質問は忘れなさい」

「あ、ああ」

しかし随分と理屈っぽいと言うか何と言うか、身長から考えればまだあっちでの中学生ぐらいだろうに。

「しかし、惜しいわね。貴方、ここで働く気は無いかしら？」

「さっきも言っ たけど、学生だからなあ……召喚主の仕事の手伝いもしなきゃいかんし」

「そう……」

元々対して期待してなかったのか、特に落胆することなく応えるアルマ。

「そういえば聞いてなかったわね。貴方のご主人様って誰なの？」

あゝ……まあ、これなら別に答えても良いか。

「イセリナ」

「……………は？」

「イセリナ・アールテール。この街で錬金術師をやってるよ」

イセリナを知らなかったのか？と思ったのだが、まだ呆然として様子から、そうでもなかったらしい。

唐突に顔を伏せ、全身を震わせるアルマ。……………えーっと、ひよつとしてまた何らかの琴線に触れちゃったとか？

「認めない、認めないわ。ええ、認めるわけにはいかないのよ……………」

「え？え？ちよっ」

「私の理想の知識を持ちえるこの子が、あんな火力馬鹿の使い魔ですって？宝の持ち腐れなんていうレベルじゃないわよ」

なおも暗いオーラを漂わせながら、ぶつぶつとつぶやくアルマ。過去に、イセリナと何かがあったのだろうか？

「ふ、ふふふ、そうね。これは私に対する挑戦なのね」

そう言つて、アルマがゆっくりと顔を上げる。ただでさえ目つきが悪いのに、さらに目が据わっていて物凄く怖い。

「さあ、行くわよ？ミハル」

「え、えーっとイクって何処にデシヨウカ？アルマサン」

「もちろん決まってるじゃない」

そう言つて、アルマはとてもコワイエガオを見せ、

「これから、イセリナに『オハナシ』をしに行くのよ」

アレか、これはいわゆる高町式……いや、何でもない。

とりあえず、俺には拒否権はなさそうだ。恐らくこれからイセリナに何らかの不幸が訪れるだろうけど、どうしようもない。

いや、見る限り抵抗しても無駄だし。まだ図書館で調べたい事はあつたけど、絶対に抵抗しても無駄だし。

俺を引っ張りながら前を歩くアルマを見て、俺は軽いため息を付く。次の休校日はいつだったかな……と思い出しながら、俺はアルマに連れられ家に帰ることとなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6180i/>

とある使い魔の日常

2010年10月8日12時32分発行